



書き下ろし&読み切り文芸マガジン

signal

vol3. 夢

「きみの花飾り」
入江棗

「王子と私とご主人様」
広野未沙

「人形姫と泥棒悪魔」
貴水玲

「くるくる」
水島朱音

「世話焼き魔一メイド」
番柵葵

「審判部な面々」
諸星崇

企画・監修 榎本秋

株式会社榎本事務所

はじめに

書き下ろし&読みきり文芸マガジン「s i g n a l」の第三号をここにお届けする。今回のテーマには神話・伝説の時代から物語にとって重要な主題である「夢」を取り上げる。

本マガジンは、私、榎本秋と関係ある若手作家・番棚葵、榎本事務所所属作家の諸星崇の両名の賛同のもと、両名に作家の卵たちが加わり、合計六作品を収録している。基本的に毎号テーマに沿って各人が自分の世界観、キャラクターで緩やかなつながりのもとに執筆する読み切り作品であり、各号ごとにどこから読んでもいいように、またテーマアンソロジーとしても楽しめるように留意して企画した（ただし、一部は作品としての面白さを優先してシリーズものの色の強い作品も掲載しているため、既刊とも合わせて読んでいただければ幸いである）。

さらに、普段から榎本事務所制作の本でお世話になっているアミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科の全面協力を得て、毎月イラストコンペを開催していただき、その上位作品を収録するという試みもさせていただいている。

本誌をひとつの踏み切り板としてに各参加作家、イラストレーターが新たな展開を手にすることを願ってやまない。

なお、昨今の電子書籍の隆盛なども鑑み、本マガジンは、榎本事務所HPで配布しているPDFファイルを改変しないことを条件に配布、複製は自由とする。ただし、有償での配布は印刷も含めて不許可とする。それでは、楽しんでいただけると幸いである。

また、感想やご意見など、コメント機能をご利用の上でいただけると大変うれしい。

榎本秋

目次

はじめに.....	1
口絵	3
イラスト提供	新月竜
	戌祐秋
	仔樺
	S n o w
	(掲載順)
きみの花飾り	入江棗.....7
人形姫と泥棒悪魔	貴水玲.....16
世話焼き魔ーメイド	番棚葵.....25
王子と私とご主人様	広野未沙.....34
くるくる	水島朱音.....43
審判部な面々	諸星崇.....52
解説	58









きみの花飾り 入江棗

あらすじ・登場人物

○あらすじ

高瀬家三女・咲は人間不信で他人に仮面を被って接していたが、副会長の相馬にだけ本性を見せるようになった。次女の双葉はクラスメイトにバイトをしていることがばれてしまい、黙っている代わりに交際を申し込まれる。

今回は二人の姉、香穂のおはなし。

○登場人物

高瀬香穂

長女。大学一年。両親が不在の高瀬家をまとめる。

高瀬双葉

次女。高校二年。和菓子屋でアルバイトをしている。

高瀬 咲

三女。中学二年。猫かぶりの生徒会長。

3、長女はしっかり者であるべきか

「重大なお知らせがあります」

対面に座る双葉と咲は、固唾を吞んで私の言葉を待っていた。

「お父さん達からの仕送りがくるまであと一週間、食費が三千円しか抽出できません。よって仕送りが来るまで食事は質素な方向で」

その言葉を聞いた瞬間、二人の顔が青ざめた。

「香穂姉それはだめえええ！」

「そうだ、人間食わなきゃ死んじゃうだろ！」

咲が悲痛な叫び声を発し、双葉がテーブルに手を叩きつける。予想していた反応だ。

「そんなこと言われたって……今月は出費が多かったから仕方がないじゃない。うちで一番エンゲル係数稼いでいるのは食費なんだから、削るとしたらここよ」

半分涙目の咲は横の双葉をにらみつけた。

「双葉姉が洗濯機壊したからだよ！ シーツと布団カバー三人分いっぺんに洗うなんて無謀なこととして！」

「どう考えたって老朽化だろ！ あれ何年物だと思ってんだ！」

お金の切れ目が縁の切れ目ともいうし、人の感情を逆撫でするのはお金なことが多いけど、私達姉妹の場合はお金より食にうるさい。

朝ごはんを抜くなんて信じられない。学校から帰ったら絶対におやつを食べる（バイトがある日は除く）。夕食後のデザートは欠かせない。とにかく食べることが大好きだ。

確かに洗濯機の出費は大きかった。普段から余裕をもった生活をしてきたから赤字なんてことはないけれど、こうして大事な食事を制限せざるをえない程度には厳しい。

目の前では妹二人が未だ洗濯機を巡って喧嘩を続けていた。一軒家だからお隣から苦情がくることはないだろう。けど。

「静かにしなさい」

私が我慢できない。

そう言った瞬間、二人はぴた、と動きを止めてこちらを見た。さっきとは違う意味で青ざめている。

「もう夜遅いのよ。今更何言ったってしょうがないんだから諦めなさい」

表情を柔らかくして、なるべくゆっくりとした口調を心がける。それが一番恐怖を与えることを知っているから。

「と言っても私も一週間質素なご飯なんて耐えられないから出来るだけ頑張るわ。安売りとかなるべくチェックするから、二人も協力してね」

「もちろん」

普段気が合うとは言いがたい姉妹だけど、こういう時は言葉が揃う。

「でもさ、野菜は安く手に入るじゃん」

落ち着いて椅子に座り直した双葉が思い出したかのように呟いた。今度は私が硬直する。

「え、何で野菜限定？」

咲が首を傾げて尋ねた。

答えないで双葉。

普段は頭の隅に追いやっている悩みの種がメインの思考回路に入り込んでくる。

「気前のいい八百屋の息子が居るじゃんか」

双葉は面白おかしそうにこちらを見ながら答える。咲は一瞬きょとんとした顔をしたけれど、「ああ、そういえば」とすぐに関心が失せたようだった。

この種と付き合い始めてもう随分経つ。解決の兆しは今のところなし。

自分からあちらのテリトリーに出向くなんてできることなら避けたい。

でも、今回は緊急事態。

「質素な食事は、我が家にとってかなりの痛手なわけで」

「安売りの店に行かないなんて、香穂姉のすることじゃないよね？」

この二人、食のためなら姉の悩みなどお構いなしだった。なんて妹達だ。

どう頑張っても悩みの種から避けられそうにない。

観念するようにため息を吐くしかなかった。

大学の授業が終わり、バイトもない日は買い物をして帰る。同じゼミの子からご飯やカラオケに誘われたりするけどあまり行くことはない。学校で付き合う分には構わないけど、プライベートの時間まで共有したいと思わないから。今では咲の人間不信が目立っているし、おいたをした男子中学生を叱ることくらいはできるけど、昔は私の方が人見知りが酷く、対人関係において両親を悩ませていた。

テリトリーに入れていいと思えるのは家族と違う大学に行った数少ない友人と、昔から付き合いのある人——例えばお隣さんくらい。

だから、彼とどう接したらいいか分からない。

自転車を所定の置き場に置いて、よく通う商店街に入った。家の近所にある大型スーパーの方が便利だけど、商店街の方が安さは勝る。こういった緊急時は横着をしないでここで買い物をすることにしている。

今日は何を食べようか。一週間で三千円ということは一日約四百円。お米や冷凍していた魚・肉があったのは幸いだけど、それにしただって厳しい。

自分のバイト代から少し捻出することも考えつつ、安い豆腐やもやしをフル活用するしかない。最近は色んな食材が若干高くなっているからほとんど困る。

商店街の真ん中辺りにある豆腐屋さんで豆腐を三丁購入。店主のおじいさんと話して今晚は湯豆腐にすることにした。贅沢はできないから肉団子はなし。

メインは買ったからあとは野菜。少し気が重くなりつつも商店街の出口に向かった。

目的地に近付くにつれ、大きな掛け声が聞こえる。声の主は若い。

少しだけ期待していたけど無駄だった。親孝行なことに店番をしている。

小さく深呼吸をして声がする店に近付いた。

声の主は、私に気付くやいなや、満面の笑みを浮かべて

「香穂先輩！」

大根を持ったままこちらに駆け寄って来た。高校の制服の上に八百屋さんらしいエプロンを付けている。

「店番お疲れさま、井上くん。受験勉強しないで大丈夫なの？」

「名前で呼んでって言うてるのに。気分転換みたいなもんですよ。心配してくれてるんですか？」

勢いに押されて一歩下がったけど、井上くんはその分一歩進む。意味がなかった。

「店来るの久し振りですね。若干生活ピンチとか？」

「ああ、うん。そんな感じ……」

そういう時しかここには来ないから読まれている。

「今日は何にするつもりなんですか？」

「湯豆腐。だから白菜と、お味噌汁とかで使うからもやしかな。あと何か安い野菜ってある？」

「湯豆腐やるならネギも必須でしょう。あと今日はこの通り大根が安いです！」

満面を笑みの横に大根が並ぶ。その大根と同じくらい白い歯が目立った。虫歯一つないんだ

ろう。

井上くんは店に吊るしてあるビニール袋を一枚引っ張り、白菜やら大根やらを袋に詰めていった。

「はいじゃあ三百円で」

袋の中にはじゃがいもや人参まで入っており、どう考えても三百円で買えるわけがない。

「井上くん、これ三百円って嘘」

「サービスです。先輩やりくり頑張ってるんだから、これくらいは協力させてください」

「でも」

周りのお客さんの視線が痛い。当たり前だ、私だけ破格の値段なんだから。

井上くんもそれには気付いたようで、少しの間上を向いて考え

「見られちゃしょうがないな！ 今から十分間、袋いっぱい詰めて三百円！」

野菜が詰まった袋を掲げ、とんでもないことを言い出した。

奥さん達の目の色が変わる。たちまち店に人だかりができた。

「い、いいの!? ご両親困るんじゃ」

「大丈夫です。赤字分は俺のバイト代から差っ引きますから。はいこれ」

持っていた袋を渡される。こうなってしまったら受け取らないわけにはいかない。

財布から三百円を出して、代わりに袋を受け取った。すごく重い。それだけ詰まっているということだ。

「ありがとうございます」

三百円を渡す瞬間、井上くんの表情が緩んだ。

手がほんの少し触れ合う。

「こちらこそありがとう」

「また来てくださいね」

「う、ん」

これだけまとめ買いしたから当分野菜には困りそうにないけど。

奥さん達が大きな声で井上くんを呼んでいた。会計が詰まっているんだろう。

「それじゃあ香穂先輩」

井上くんは奥さん達の方に顔を向けた。

その直前、

「大好きです」

爆弾を私に手渡して行って。

渡された爆弾を投げ返すことも爆発させることもできず、もう何個も受け取っている。

初めてもらった爆弾はそっと返した。でも諦めてくれなかった。

私があなびかないことを知っているはずなのに、彼は何回も爆弾を私に渡す。

私は導火線に付いた火をどうにか消し止めることしかできなくなっていた。

そして、爆弾を生成するのはどうやら彼だけではなかったらしい。

「香穂姉、私、全寮制の高校に入る」

末っ子の妹が放った爆弾は、手渡しではなく投げつける勢いで飛んできた。

「は？」

夕食後、双葉がバイト先からもらって来た豆大福を食べていた時のことだった。

「だから、高等部進まないでK県のM校行く」

M校といえば東大合格者が多く輩出される超名門校だ。

相当な成績が必要だけど、恐らく咲なら合格圏内だろう。

問題はそこじゃない。

M校は全寮制の高校だ。

「全寮制って、何考えてるの？ 自分がどれだけ他人を苦手にしているのか分かってるわよね？」

この間だって体育祭で発作を起こして肝を冷やしたところだ。家を出るなんて、目の届かない場所に行くなんて冗談じゃない。

「分かってる。でも、私が家のためにできる最大限のことってM校の特待生に合格することだと思うの。合格して成績をキープし続けたら高校の学費が丸々免除になる。お父さん達が楽になる」

「だからって、いきなり家を出て他人に囲まれて生活できるわけがないじゃない。双葉、双葉も何か言ってあげて」

双葉は咲の隣でひたすら黙って聞いていた。いつもならすぐ話に割って入ってくるのに。

「……今回は咲に味方するよ」

「何で！」

「咲だって考えなしに言い出したんじゃないだろ。あたしらの中じゃ一番秀才なんだし」

そういう問題じゃない。頭がいいだけで他人と同じ屋根の下で暮らすのは難しいところの話じゃないのに。

「駄目よ、絶対反対」

「香穂姉が何と言おうと、もう決めたから」

そう言い残して咲はリビングを出て行った。

「咲！」

追いかけようと立ち上がったけどそこで力が抜けてしまった。また座り込んでしまう。

「無理に決まってるじゃない……。私達から離れたら、あの子は誰に支えられるの？」

聞こえているはずの双葉は何も言わなかった。立ち上がってキッチンに行き、夕食の食器を洗い始める。

お父さん達に相談しなきゃ。そう思ったけど、電話の子機がある場所まで移動する力もなかった。

翌日の朝食はまるでお葬式のように静かだった。誰一人喋らずテレビのニュースが部屋中に響く。咲はいつもより早く家を出て行った。「行ってきます」と言われたけど「行ってらっしゃい」と返せなかった。

「香穂姉ちゃんは深く考えすぎ」

双葉は眉を歪ませながらオニオンスープが入ったマグカップに口をつける。

「香穂姉ちゃんもあいつも、優しい奴はみんなそうだ」

意味深な言葉を残して双葉も学校へ行った。一人になったリビングがいつもより広く感じる。こういう時はあの人と話がしたくなる。

メールアドレスも電話番号も知ってる。連絡したら忙しくても空いている時間に話を聞いてくれる。

隣に住んでいたころはどうでもいいことまで話していた。

それなのに。

携帯のアドレス帳を開いた。登録番号まで覚えてしまっているアドレスを表示させる。

それ以上の操作をすることができなかった。電話ならコールボタンを押すだけなのに。

携帯を閉じてテーブルに置いた。食器の後片付けを始める。

「いくじなし」

もう何回目か分からない、自分への説教の言葉を呟いた。

大学に行って授業でも受ければ少しは気分が紛れると思ったけど、そんなことはなかった。お昼ごはんの時間になっても食欲は湧かないし、昨日のことを思い出ただけで憂鬱になる。きちんと話し合いをしなくてはいけない。お父さん達が居ないんだから、私がしっかりしないとイケないのに。

午後の講義に出席するため、所定の教室に入る。大人数が受講する講義だから知らない顔も多い。出席も取らないのでたまに生徒ではない人が紛れ込んでいることもある。

断言できるのは以前私の知り合いも潜り込んで来ていたから。

そして今も。

「香穂先輩やっほー」

講義が始まって間もなく、誰も居なかった隣の席が埋まった。

見知った顔だった。でもここに居るべき顔ではなかった。

「井上くん!？」

「しいー。ばれちゃう」

なるべく小声で話したつもりだったけれど、すぐ近くの人達には気付かれたらしい。最も関係者じゃない人が入り込んできても指摘する人など一人も居ないけれど。

「高校は」

「三年は午前で終わり。授業も終わってるしね」

そういえばそんな時期だ。井上くんが通っている高校は私の母校でもある。自分の時もこの時期は午前中で授業が終わって教室か図書室で受験勉強をしていた気がする。

家に戻ってわざわざ着替えてきたのか。

白のロンTに黒のベストを合わせた格好は、高校の制服よりも彼を大人っぽく見せた。

「何で来たの」

「また今度って言ったじゃないですか」

「それ、昨日の話」

「細かいことは気にしない。香穂先輩に会いたかったから来たんですよ。それに、来年から通うんだし下見も兼ねて」

下見って、この教室にはもう何回も潜り込んでいるくせに……。

あまり話していると教授に気付かれてしまいそうだったので、ノートをとる振りをして筆談に移行することにした。

『この講義、過去に何度か受けるよね』

『この人の話おもしろいですよね。経営でも選択できたらよかったのに』

井上くんは私が入学した当初から、この大学に進学すると宣言していた。理由を聞いたら私に通っているからというので全力で阻止しようとしたけれど、経営学科のカリキュラムが興味深いからともいうので止めるのは止めることにした。同じ大学だからといって経営と心理では接点

がほとんどない。同じサークルにでも入らない限り構内で会うことはほぼないだろう。

ここでしっかり勉強する分には何の問題もない。私なんかに影響されるのは駄目。

私に彼の人生を保証することなんてできるわけがないのだから。

『今日、帰りにうち寄っていきませんか？ 少し日が経っちゃって売り物にならない野菜がごっそりあって、良かったら。あ、もちろん食べる分には問題ないですよ』

『昨日あんなに』

『根菜類はそこそこ保ちますよ。うちだけじゃ食べきれないから協力してください』

そっと井上くんの方を見ると、彼も柔らかい笑みをこちらに向けた。

「美味しいもの作って、咲ちゃんと仲直りしてください」

私だけに聞こえるくらいの小声に過剰に反応してしまった。持っていたシャープペンを手から落としてしまう。

「どうして」

知っているの。

井上くんは再び紙に文字を書き出した。

『実は双葉ちゃんとメル友なんです』

いつのまに。双葉と井上くんは同じ高校だけれど。それで話した覚えのない咲のトラウマも知っていたのか。双葉、おしゃべり過ぎ。

もしかして。

『今日、それで来たの？』

今までにも何回か何も言わずにここに来たことがあったけど、その時はいつもしばらく顔を合わせていなかった。考えてみれば二日連続で顔を合わせるなんて高校に居たころ以来かもしれない。

さっきから教授の話はほとんど頭に入ってきていなかった。今だって井上くんの返事を待っている。

『俺が会いたかっただけです』

今までの文字より少し丁寧な字だった。まるで言い聞かせるみたいに。

嘘つき。

この優しさを私は何回も味わっている。春の日差しに包まれているような気持ちになる。

けど私は、何も返して上げられることができない。

「あー、やっぱ大学の授業はいいっすね。高校の授業なんて脳みそに無理やり綿詰められてるような内容ばっかでつままないっての」

教室を出ると井上くんは腕を上げながら背伸びをした。一緒に教室を出た他の受講生がこちらをチラチラ見ているけど、井上くんは全く気にする気配が無い。

「早く卒業してここ通いたいや。香穂先輩、そしたら一緒に行きましょうね」

「講義の時間合わないと思うよ。二年になったら一限の授業減るし」

「マジか……！ したら一緒に居られる時間が昼休みしかねえじゃねえか！」

昼休み一緒に居るつもりだったのか。昼はできるだけ一人で静かにご飯を食べたいのだけど。
「先輩、今日はもう授業ないんでしょ？　うち寄る前にデートしません？」

不意にとんでもないことを言われて立ちすくんだ。その隙を突いて井上くんは私の手をとる。

「あ」

その手を、反射的に弾いてしまった。

井上くんの表情が固まる。

冷たい風が二人の間を通った。

「すみません、調子乗り過ぎました」

固まった表情はすぐにほぐれて、少し困ったような笑みが浮かんだ。

「香穂先輩にも予定がありますしね。この後時間空いてないなら帰りにでもうち来てください。

閉店時間過ぎてもその時は連絡くれれば大丈夫ですから」

それじゃ、と言って井上くんは足早に離れていった。後姿がどんどん小さくなっていく。

傷つけた。

謝らなきゃ。頭の中では分かっているのに体が全く動かない。

こんなことをもう何回もしている。自分のことしか考えられない自分、最悪だ。

こういうことがある度に思う。

彼は私のどこが好きなんだろう。

井上くんからもらった大根などで作った豚汁の味見をしていると、ドサッ、と重いものがキッチンのカウンターに置かれた。ビニール袋からニラが飛び出している。

「何でバイト帰りのあたしが取りに行かなきゃいけないんでしょうねえ？」

双葉は眉間に皺を寄せて明らかに不機嫌だった。無理もない、ついさっきメールで井上くんの家に寄るように頼んだんだから。

「これ受け取る約束したの香穂姉ちゃんだよね」

「ごめん」

「まったく。明（あきら）兄ちゃんが好きなのも分かるけどさ、だからって千起（かずき）先輩をないがしろにするのは止めなよ」

「！　そういうこと軽々しく言わないで」

急にあの人の名前が出てきてたじろいってしまった。

「それに井上くんをないがしろになんか」

「千起先輩、来たのあたしだったからあからさまに残念そうな顔してたよ。それでも「香穂先輩によろしく」って。香穂姉ちゃん、自分がどれだけ愛されてるか分かってるわけ？」

「それを言うなら双葉もじゃない。浦くんだけ、告白の返事いつまで先延ばしにするつもりよ」

「それは今関係ないじゃんか！」

双葉の追求から逃げ出すために弱いところを突いた。我ながらずるいことをしたと思う。

双葉は興奮したままソファに座ってテレビの電源を付けた。大して面白くなさそうなお笑い番組が映る。

咲は家に帰ってから自分の部屋に閉じこもって出てこない。おやつを理由にリビングに呼んでみたけど来なかった。今まで喧嘩をしてもおやつだけは食べに来ていたのに。

双葉が持って帰って来てくれた袋の中を見る。飛び出していたニラにほうれん草、玉ねぎ、しいたけとカボチャが丸々一つ。カボチャは重かっただろう。自転車とはいえ双葉に悪いことをした。

「ありがとう。バイトで疲れるのにごめんね」

頭のとっぺんしか見えないから横になっているんだろう。双葉にお礼を言った。すると、少し気まずそうな声で返事が返ってきた。

「……ニラあるんだから明日ニラ玉ね」

ニラ玉。私も双葉も、咲も好きなメニュー。

「分かった」

カボチャは煮物にしようか。明日の夕食当番は双葉だったけど、カボチャの煮物作れたらどうか。

明日はバイトだから咲とゆっくり話すことができない。今日話すべきなんだろうけど、昨日今

日でも話しても拗れるだけな気がする。

そうやって逃げているんだって言われたら、否定ができないけれど。

……我ながら駄目な姉だと思う。

「双葉は、不安にならないの」

聞こえないように言ったつもりだったのに、双葉は頭をこちらに向けてきた。

「何が？」

「あ、何でもない」

何もなかったことにしようと、冷蔵庫に入れておいたポテトサラダを出そうと冷蔵庫を開けた。

「そりゃ心配だよ。どんだけ手かかってきたと思ってんの」

キッチンから顔を出して声が聞こえて来た方を見る。さっきこちらに向いていた頭は再びテレビの方を見ていた。

「もう夕飯？ 咲呼んで来るよ」

双葉はソファから立ち上がってリビングから出て行った。遠くでドアがノックされる音が聞こえる。

出てきてくれるといいんだけど。冷蔵庫から出したポテトサラダをテーブルに置き、ついさっき炊き上がった炊飯器の蓋を開ける。この間田舎のおばあちゃんから送られてきた新米だ。ツヤがあってすごくおいしそうなのに、食欲が湧いてくることはなかった。

授業中、井上くんには昨日行けなかった謝罪と野菜へのお礼をメールしておいた。午前に送ったからまだ授業中のはずなのに、三分で返事がきた。ちゃんと授業受けなさいと返事をしたら、今度は二分で返事が来た。

昨日の夕飯、咲は顔を出してくれたけど一つも口を利いてくれなかった。私も私で腫れ物に触るかのような態度しか取れず、双葉が何度もため息を吐いていた。仲介役をするつもりはないらしい。妹に仲介してもらわないと話せないなんて情けない話だけれど。

バイト中も咲のことばかり考えていて、双葉と同じようにため息の嵐。あまりお客さんの来ない雑貨屋で助かったと思う。店長もちょうど休みだった。

夜八時、ドアのプレートをCLOSEにして閉店作業を始める。さっき双葉からカボチャの皮がうまく剥けないとメールが来ていた。せっかくもらったものだから無駄にしてはいけない。早く帰ってヘルプをした方が良さそうだ。

レジ締めを終え、あとはタイムカードを押すだけになると、ドアを叩く音が聞こえた。

閉店のプレートを出しているのにと思いつつガラスのドアの方へ行くと、見知った人物がドアの外に立っていた。

「明くん」

慌ててドアの鍵を開ける。

「ちょっと覗いたら香穂一人だったから」

スーツにコート姿だった。会社帰りなんだろう。きっちりした姿を見るのは明くんの大学の卒業以来かもしれない。

というより、それ以来ろくに顔を合わせていなかった。明くんが実家を出て近くのアパートに住み始めてからは会う機会が激減していたから。

「もう終わる？」

「うん」

「じゃあ途中まで一緒に帰るか」

ちょっと待ってて、とだけ言って乱暴にドアを閉めた。鍵をかけてタイムカードを押す。付けていたエプロンを脱いでロッカーに押し込んだ。代わりに中にあったコートと鞆を取り出す。

裏口から出て自転車を回収、乗らずに押して表に回った。居なくなっていないか（私の幻覚だったんじゃないか）と不安になったけど、明くんはさっきと同じ場所に立っていた。

「お待たせ」

「お疲れ」

小走りで明くんの隣に立った。かすかに煙草の匂いがする。大学生のころは匂いが残るまで吸ってなかった。

「仕事、大変？」

「ん、まあなあ。不況だし」

不況は事実だけど、新入社員だし、いろいろ気遣いもあって大変なんだろう。

「香穂は大学どうだ？」

そう言いながら明くんは私から自転車を横取りして押し始めた。遠慮せずに甘えることにする。

「そこそこかな。サークルに入ったりしてないし、高校の延長みたいなものかも」

うまく話せているみたいで安心した、話をしたいと思っても、突然話せるとなると緊張してしまう。好きだと意識し始めたら時からずっとだ。

「遅刻で単位落としたりするなよ。後で痛い目に遭う」

「それ実体験？」

そういえば一限目の必修授業にどうしても起きれないって話を学生時代に聞いたことがあった。単位はちゃんと取れたからこうして働けているのだろうけど。

「単位は大丈夫。二年で取れるだけ取って三、四年は楽するつもり」

「それが賢いな。三年になったら就活も始まるし」

不況のせいで就活のことを考えるとすごく気が重い。それでもどうにか働いて借金を返す手伝いをしないと。夢、とは言えないまでも憧れがあって選んだ心理学だけど、専門分野に就職するには道が険しい。先輩達も一般企業に就職した人が多くて、もしかしたらお金の無駄だったのでは、と思ってしまうことがある。授業が楽しいことは幸いだけど。

明くんは建築関係の学科に進み、そっち方面の会社に就職することができた。あまり大きな会社ではないらしいけど、それでもやりたかったことができるというのは幸せなことだと思う。

やりたいことができる、のは幸せ。

咲のM校進学もやりたいことなのだろうか。

「香穂、何かあったか？」

「へ」

不意に声をかけられた。意識が飛んでいたようで過剰に反応してしまう。

「ごめん、ちょっとトリップしてた」

「お前はよくぼーっとするよな。しっかりしろよ姉ちゃん」

背筋に細い電流が走ったかのようにピリ、とした。肩に力が入る。

そうだ、しっかりしなきゃ。

明くんにも呆れられないように。

「そうだね。私、お姉ちゃんだしね」

頼りない電灯に照らされた明くんの微笑がとても優しかった。

すごく好きな表情。この顔に私は何度ときめいて、救われたことか。

けれど今はときめきも救われもしていない。

背筋はまだ伸びたままだった。

玄関のドアを開けた瞬間、焦げた匂いが漂ってきた。そして何やら騒がしい。

玄関を見るとあるはずのない男物の靴がある。

ものすごく嫌な予感がした。

「千起先輩これ絶対煮過ぎですよ！ 煮汁尽きてるし！」

「味染みこんだ方がいいかと思って」

「染みこむ通り過ぎて焦げてるんですよ！」

リビングに入ったらこの喧騒だった。

「何、やってるの？」

「あ、おかえり香穂姉ちゃん」

「おじゃましています」

キッチンから双葉と井上くんが顔を覗かせた。

「それよか香穂姉ちゃん助けて！ カボチャがピンチ」

「ちょっと火通し過ぎちゃったみたいでー」

恐る恐るキッチンに入り、焦げ臭さの元凶になっている鍋の蓋を開けた。あろうことかまだ弱火で火が点いている。すぐさま消した。

「双葉」

「は、い」

私が来たことで後ろに下がっていた双葉が上ずった声で返事をする。

「鍋、洗うの大変だと思うけど頑張ってるね」

この鍋が商店街の福引で当たったお気に入りのティファールだということを、双葉は重々承知していたはず。低い声で「はい……」と返事が返って来た。

鍋の中の無事であるカボチャを救出すべく器を出す。井上くんには「座ってて」と言ってキッチンから追い出した。

「あとなにかおかずあるの？」

「ニラ玉」

カボチャの鍋の隣に蓋をされたフライパンがあった。開けるとこっちは美味しそうなんニラ玉が。

これに少し残っているポテトサラダで十分だろう。カボチャを救出すべく菜箸を持った。

「で、何で井上くんが来てるの？」

「昨日店行った時に遊びに来てって言ったから」

「そういうことは昨日の内に言いなさい……」

井上くんも井上くんだ。昼間のメールで教えてくれれば良かったのに。

というか、顔を合わせづらい。

「香穂姉ちゃん、あとあたしやるから咲呼んできてよ」

「え」

もっと顔を合わせずらい。

「あたしが夕食当番なんだからあたしが配膳するって。だから咲呼んできて」

有無を言わさない様子だった。キッチンから追い出される。井上くと目が合った。

「先輩俺お腹空いちゃった。早くみんなでご飯食べましょう」

昨日のことなどなかったかのような口ぶりだった。

「昨日、行けなくてごめんなさい」

「香穂先輩忙しいですもんね。気にしてませんから」

残念って顔してたくせに。嘘を吐かせるなんて。

罪悪感でいっぱいになる。

「咲ちゃん、ちゃんと話せば分かってくれますよ。逆に、香穂先輩も咲ちゃんの話聞いてあげてください」

話ならこの前聞いた、と思いつつ井上くんの言葉は胸の奥に引っかかった。

「香穂姉ちゃんまだー？」

双葉に急かされてリビングを出た。階段を上がって私達の私室がある二階に上がる。咲の部屋は階段を上がってすぐの位置にある。

ドアの前に立つ。ノックをしようと手を上げたけど止まってしまった。目を閉じ、頭を振って改めて前を見据える。ドアを二回叩いた。

「咲、夕飯できたよ」

数秒待つと、中から物音がした。椅子から立ち上がるような。ほどなく内側からドアが半分ほど開いた。出てきた咲が私を見ると、げんなりした表情を浮かべた。

「……何その顔」

「何って」

咲が何を言ってるのか分からず困惑してしまう。

「だから、何なの、その色々言い含んだような顔」

げんなりからイライラしているような口調へ。

「この前の威勢は何？ お姉ちゃんなんだから言いたいこと言えばいいじゃない」

「咲、何でそんなに怒ってるのよ」

そう聞くと、咲の表情が一瞬にして消えた。半分開いていたドアが乱暴に開け放たれる。家中に聞こえるような大きな音がした。

「咲、何して」

「むかつく！ いつまでもガキ扱いして！ 確かに私は手がかかるわよ、でもいつまでもこのままじゃいられないって分かってるんのよ！」

びっくりして後ろに下がってしまった。下から「なんだあ？」と双葉の気の抜けた声が聞こえる。

「無理無理って連呼しないでよ、無謀だっていうのは私が一番よく分かってる！」

啞然としていた脳内がようやく本来の機能を取り戻し始めた。何よ、無謀だって分かってる

んじゃない。だったら何であんな訳の分からないことを決めているのよ。

「だったら止めなさいよ。先に進むのは大いに結構だけど、何段飛ばしてると思ってるの？　ここから離れてどう生活していくつもり？　寮には、八つ当たりみたいな愚痴を聞いてくれる人は居ないのよ」

「だから分かってるって言ってるでしょ」

「分かってないわよ！　口だけでは何でも言えるけどね、停電も起きたらどうするのよ。人付き合いどころか生活に支障をきたすじゃない。ちゃんと考えなさい！」

「だから考えてるわよ！　色々、やりたいこととか、そのために必要なこととか、頭いっぱいいっぱいになるまで考えたわよ！

さっきから古傷抉るような理由ばかり並べて。そんなに行かせたくないわけ？　親代わりなら旅させる度胸見せなさいよ。何だかんだ言って香穂姉が寂しいだけでしょ!!」

反射で言い返そうとして、何も言えなかった。

下から双葉と井上くんが心配そうに顔を覗かせている。

本当に無理だと思った。

小学生のころに閉じ込められてしまってから、これ以上傷つけさせまいと全力で守ってきた。私と双葉が居れば何の心配もない。そんな風に。

逆に言えば、私と双葉が居なきゃ何もできないんだって、決めつけた。

それが誇らしかった。

私は姉としてあの子を守っている。

私なんかでも守れるものがある。

咲と双葉が居れば私は私でいられる。咲と同じ。

二人が離れたら、私は誰のために日々を過ごしていけばいいんだろう。

そっか。

一番依存してたのは咲じゃなくて、私だ。

「さみ、しいよ」

何も考えないで言葉を紡いだ。

これが、答え。

「寂しいに決まってるじゃない。ずっと一緒に居たのに居なくなったら、そんなの」

急に目の前が白くぼやけた。頬に冷たいものが流れる。

一度出てきたら溢れて止まらなくなった。

「ちょっと、何泣いて。香穂姉、……う、我慢してたのに……」

うわあああん、と二人の泣き声が響いた。

大学生にもなって情けない。でも、止まらない。

「あーあーもー、二人して泣かないでよ。あたしまで泣きたくなるじゃんか」

双葉が二階に上がってきて私と双葉を一緒に抱きしめた。人肌が気持ちよくて余計に涙が出る

。

それから暫く私と咲はわんわん泣き続けて、双葉はそんな私達の背中を摩っていた。

落ち着くと、涙でぐしゃぐしゃになった咲の顔を笑って。咲も同じように笑って。

泣いて体力を使ったのかすごくお腹が空いていた。みんなでご飯を食べようと下に降りると、井上くんの姿がなかった。知らない間に帰ってしまったようだ。

恥ずかしいところを見られてしまった。あと、井上くんの言った通りだった。

言いたいことは言い合わないと分からない。たとえ長く一緒に居ても。

何回も聞いた井上くんからの告白、私はちゃんと聞いていただろうか。

何で好きなのか一度も聞いたことがない。

それは聞いたことにならないと思った。

数日後、バイト代が入ったらからお礼も兼ねて井上くんをランチに誘った。考えてみれば私の方から誘うのは初めてだ。井上くんからの返信メールは絵文字がたくさん入っていて、「どこにでも行きます」というものだった。ちょっと子犬っぽいな、とってしまう。

どこがいいかと聞いたら私の大学はいいという。安い学食ではお礼にもならないのでは、と思っていたけど彼はあそこの日替わり定食がお気に入りらしい。

「第一希望は香穂先輩の手料理なんですけど。お家にお邪魔しちゃったら咲ちゃんが気まずいかなあ、と。あまり見られたくないでないあろう場面を見てしまったわけですし」

それは私も一緒なんですけど……。今思い出しただけでも恥ずかしい。

「家に来なくても、お弁当にして持ってこれたけど」

「ああそっか！ うわ、俺のばか！」

井上くんの前には「お礼」の日替わり定食の空食器がある。お腹が空いていたらしく、待ち合わせて食堂に入ってすぐさま注文、席について会話を混ぜることなく十分ほどで完食してしまっていた。日替わり定食、相当のボリュームなのに。男の子ってすごい。

「よかったら今度持ってくるよ？」

「本当ですか！ から揚げ入れてください、少し前に双葉ちゃんの唐揚げ一つもらったらめっちゃ美味かったんですよね」

いつだったか双葉が「から揚げ奪われた」と憤慨していた気がする。

「で、あれから話し合ったんですか？」

「うん。咲なりにちゃんと考えていることを聞いた。両親とも相談して、第一希望はM校に。人間関係に関しては中学の内に少しずつ治していくようにしようって」

「発作は厳しくても、信用できる他人ができるだけでだいぶ違いますからね」

私はその言葉に同意するように頷いた。

「高瀬家って高校に入ったら大学資金貯めるためにバイトする決まりでしょう？ 多分、咲ちゃんが香穂先輩たちと同じように高校入ってバイトしても、辛くて長続きしないと思うんですよ。咲ちゃん自身もそれを分かってるから、自分なりの別アプローチなんだろうね。それに、社会と相手をする前に学校っていうほどほどに狭い世界から慣れていくべきだろうし」

まさに咲が言っていたことだった。

「よく分かるね」

「俺も元は人見知りでしたから。今は店番するようになって克服しましたけど」

時には奥様方にもみくちゃんにされる仕事だ。慣れない方が難しい。私もそれくらいの方がいいのだろうか。

「私もしっかりしなきゃ」

「確かにしっかりするに越したことはないですけど、無理しなくていいと思いますよ。香穂先輩はそのままで十分ですから」

「それは、惚れた弱み、とかじゃないの？」

なんて図々しいことを言ってるんだと自分で自分を罵りたくなる。

でも今日は聞くなって決めた。何で私なんかがいいのか。

「そもそも、私のどこがいいの？」

言えたっ。

「あれ、言ったことなかったでしたっけ」

こっちが振り絞った勇気をさらりと流すかのように、井上くんは間抜けな声を出した。

「俺が店番するようになったころにはもう店に来てくれてたじゃないですか、その時はかわいいお姉さんだなーって思う程度だったんです。それで、ちょうど今の時期かな。その時ってまだお客さんが怖くてびびってたころなんですけど、先輩に商品渡したら「ありがとう。寒いのに頑張ってるね」ってカイロくれたんです。それで落ちました」

記憶を掘り起こす。渡したような気もするし渡していないような気もする。けれど確かに学校でちょくちょく声をかけられるようになったのは二年の冬くらいからだ。

「それがきっかけでお客さんが怖くなくなったし、香穂先輩には感謝してるんですよ」

そんなことなのか、と正直拍子抜けしてしまった。井上くんにとっては大きなことだろうから口にはしないけど。

でも案外そんなものなのかもしれない。私みたいに時間の積み重ねで明くんを好きになったり、井上くんみたいに小さなきっかけだったり。

「そっか。正直あんまり記憶になくて申し訳ないんだけど、こちらこそありがとう」

「覚えてなくても俺はカイロくれた香穂先輩が好きだから、変に背伸びなんかしなくてもいいんです」

殺し文句を言われた気がした。今絶対真顔になってる。

気を逸らそうと思い、買っていた紅茶のペットボトルに手を伸ばす。

その手を握られた。少し引っ張られる。

「もしかして、落ちました？」

顔を覗きこまれた。瞳が、近い。

頭の中が真っ白になる。

「お、」

とっさに軽くデコピンをした。

「落ちません！」

「ちえ、いけたと思ったのに」

井上くんは私の手を握った手でおでこをさすりながら唇を尖らせた。

「ま、今に始まったことじゃないですし。千起っていうくらいだから何回倒されても起き上がりますよ」

満面の笑みで宣戦布告された。厄介過ぎる。

子犬だなんて思った自分が間違いだった。犬でも食わせ犬の方だわ。

人形姫と泥棒悪魔 貴水玲

あらすじ・登場人物

○あらすじ

「感情」を知らないダイヤの心臓を持つクラリッサ姫。『人形姫』と呼ばれる彼女は森の塔で孤独に暮らしていたが、ある日人の大切な物を盗んで空腹を満たす悪魔・ゼルと出会い外の世界に興味を持つ。お人好しのゼルを巻き込み、クラリッサはさまざまな「心」に出会う旅に出る。

○登場人物

クラリッサ

『人形姫』と呼ばれる喜怒哀楽が極端に少ない姫君。ダイヤの心臓と古い物に宿る思いが見えるサファイアの瞳を持つ。

ゼルナーガ（ゼル）

人間から大切なものを「盗む」ことで空腹を満たす悪魔。クラリッサの心臓を狙っている。

第三話 見つける未来

ユヴェール王国の南の果て、シトロンの森。

その緑の海に埋もれるように、石造りの塔がひっそりと聳えている。

今日も朝陽が昇ると同時に、塔の最上階の窓が開いた。顔を出したのは、長い黒髪に透けるような白い肌をしたお人形のようにかわいらしい少女。

この塔の主人にして、シトロンの森の領主であるクラリッサ姫——通称『人形姫』だ。

「——うむ。今日もみな息災だな」

父である王様にもらった黄金の望遠鏡で森の動物たちの様子を観察し、クラリッサは十四歳の少女らしくない、どこか冷めた抑揚のない声で言った。

その小さな白い顔には表情と呼べるような揺らぎは何一つない。人形のように愛らしく、人形のように感情がない——それがクラリッサが『人形姫』と呼ばれる所以だった。

第一の日課を終えると、クラリッサは用意されていたドレスに着替え食堂へと向かった。

白いクロスのかかった細長いテーブルの上には、ほかほかと湯気のたつスープとオムレツが置かれていた。だが部屋の中に人気はない。

この塔にはクラリッサの他に侍女が一人とコックが一人いる。だが彼らは喜怒哀楽を示さないクラリッサが苦手で、出来るだけ顔を合わせないようにしている。

物心ついた頃から十四歳の現在まで、それがクラリッサの日常。

誰とも話さず、誰とも会わない。もちろん塔からも出てはいけないことになっている。

国宝のダイヤを心臓に、二つのサファイアを瞳に持つクラリッサが悪い魔法使いや魔物に狙われないように、王様は都から遠く離れた森に娘を隠した。ここはクラリッサを守る要塞であり、彼女の世界のすべてなのであった。

席につき、クラリッサはもくもくと朝食を食べ始めた。そしてきれいに平らげると席を立ったが——その時、テーブルの端に何かが置いてあることに気がついた。

赤いリボンのついた巻物状のもの。手に取ってみると、ずっしりと重い。

「……手紙か」

リボンに書かれた『クラリンへ』の文字には見覚えがあった。

しばし手の中の巻物を見つめ、そしてクラリッサはいつもの場所へ向かったのであった……。

『クラリンへ★ この間はお返事ありがとう！ あの手紙を読み始めてすぐに、パパは涙で前が見えなくなりました……』

森の観察と朝食を終えると、クラリッサは塔の一角にある図書室に向かう。

世界中の様々な書物がぎっしり詰まった壁一面の書架に囲まれて、クラリッサは一日の大半を過ごす。

天窓からの朝陽が部屋のあちこちに積み上がった本のタワーに降り注ぎ、知識の埃をきらきらと舞い上げる。安寧と静寂に満ちた英知の宝庫の中心に座り、クラリッサは父である王様からの

まるで年輪のようにぶ厚い巻物状の手紙を広げ始めた。

遠く離れて暮らす娘への思いをしたためた手紙は、日に日に長くなってきている。重たいロール状の手紙を、クラリッサは伸ばしては流し伸ばしては流し、無表情で淡々と読み進めていく。だがいくら読んでも終わりはこない。いつの間にかクラリッサは、溢れんばかりの愛情がしたためられた紙の束にぐるぐる巻きにされてしまっていた。

『まあまあ、今日のお手紙は大作ですね！』

その時どこからともなく歌うような女の声が聞こえてきた。顔を上げ、クラリッサは大きなサファイアの瞳をきらっと光らせた。

すると書棚の一角から一冊の詩集がひとりで落ちてページが開かれ、その上に一人の貴婦人の姿が浮かび上がった。

『王様の姫様への愛情の深さには、あたくし脱帽ですわ！ 今日とはどんな内容ですか？』
彼女は古い詩集に宿る“古き知識”の一人、ヒルデガルド。派手な化粧にデコレーションケーキのように高く盛った髪の毛がトレードマークのクラリッサのマナー教師である。

クラリッサの瞳には魔力がある。きらっと輝くと、長き時を超えたものたちの“心”をこうして見ることが出来るのだ。

「うむ。この間送った返事への賛辞と、私の誕生日の催しのことだ。どうやらサプライズらしいのだが……きれいに全部書かれている」

『まーあ、王様ったらそれではサプライズの意味がありませんのに！ フフ、お茶目な方』

「それから話は私の将来のことに転じている。……でも、よくわからないのだ」

長い長い手紙の一部をクラリッサはヒルデガルドに見せた。そこにはこう書かれている。

『パパの夢。それは愛するクラリんと一緒に住むこと。そしていつかクラリんが立派な女王様になって、この国をもっと幸せにしてくれることかな。クラリんには夢がある？』

「ヒルデガルド夫人、“夢”とはなんだ？ 睡眠中の幻影とは違うのか？」

もう一度読み返してクラリッサは小首を傾げた。

「夢は時々見ることがあるが……すぐ忘れてしまう。こんな風に鮮明に述べられない」

『ほほほほ、その夢とは違いますわ姫様。本当の“夢”は決して忘れることはないんですの。たとえば、姫様には大人になってやってみたいと思うことはございません？』

「……やって、みたいこと？」

『そうです。すぐには叶わずとも、いつか叶えたいと思う大きな願いが。それが夢ですわ』

「……ふむ」少し俯き、クラリッサは考えた。じっと考えた。そしてしばらくの後顔を上げてヒルデガルドを見た。

「……ないな。残念ながら何も浮かばない。それがないとどうなる？ もしかして大人になることが出来ないのか？」

『ほほほ、そんなことはありませんわ。夢がなくても成長はします。でもあった方が素敵だと思いますの。だってその道のりは長いんですもの。ただ向かっていくだけでは飽きてしまいますでしょう？ 夢は希望の光。生きる意味となり、見えない未来への道しるべとなるもの。それが胸に生まれると毎日が違って見えてくるものです。あたくしも少女の頃は毎日、素敵な殿方との

出会いを夢見ていましたわ。ああ……薔薇色の青春！』

「……夢は希望……生きる意味」

口の中でクラリッサはぼつりと繰り返した。

未来というものは雲の上の世界のようなもの。どんなものかは見えないし、どんなところかも知らない。でもその漠然としたものを照らし出すほどの大きな光を“夢”とは持っているのか。それがあれば——塔の世界で生きる自分の人生も変わるのだろうか。

「ヒルデガルド夫人、それはどうすれば手に入る？　ためしてみたいのだが」

『まあ、姫様』椿のような赤い唇に指先を当て、ヒルデガルドはやんわりと目を細めた。

『夢や希望はご自分で探すものですわ。もらったり買ったりするのではなく、自ら望み願うことこそ大切なのです』

「……そうか」クラリッサはそっと左胸に手を当てた。

その奥ではトクトクと静かにダイヤの心臓が脈打っている。

クラリッサの毎日はいつも同じ。ただ静かにやってきて、静かに去って行く。

胸のダイヤは教えてくれない。クラリッサが何をしたいのか、何を願うのか。規則正しく時を刻む時計のようにただ、そこにある。ならば——巨大なりボンのような紙束の中からクラリッサは立ち上がった。

「よし。では探しにいこう」

『えっ！』ヒルデガルドが激しく瞬きをした。

『まさか、また冒険にお出になるおつもりですか？　いけませんわ、前回は侍女に気付かれなかったからよかったものの……ばれたら大変ですよ！　それにうら若き乙女が旅なんて！　お肌が荒れますわ！　コルネリウス様が聞いたらまたお説教されますわよ！』

コルネリウスは古い哲学書に宿る“古き知識”である老人である。クラリッサとは一番長いつきあいで、爺やのような存在だ。先日“喜び”を探しにクラリッサは生まれて初めて塔の外に出た。もちろんお忍びで。だがそのまま三日ほど戻らなかったため、心配していたコルネリウスにこっぴどく叱られたのだ。

「でも自分で探さねばいけないのだろう？　ならば他に方法はない」

はじまりの光に満たされた書庫内をクラリッサは大きなブルーのサファイアに映した。

外の世界にはここにあるたくさんの本たちも知らないことがたくさんある。それは自分の目で確かめなければわからないことなのだ。

「世界が私を——呼んでいるのだ」

天窓から降りてくる朝の光がクラリッサの瞳にたくさんのきらめきを落とす。それはまるでまだ見ぬ外の世界からの洗礼のようだった。

「コルネリウス殿によろしく伝えてくれ。私は荷造りをして、あいつを待つことにする」

その夜。

食べかけのチーズのような三日月が、夜空の彼方でウトウトしている深夜。

いつものように悪魔ゼルはクラリッサのダイヤの心臓を狙って、塔の最上階の彼女の部屋に忍び込もうとしていた。

窓辺に降りるとコウモリのような大きな黒い翼をしまい、にょろりと長い黒い尻尾を引っ込める。そしてそーっと窓を開け、つま先をその間に滑り込ませた。

クラリッサの部屋に忍び込むのはもう何度目になるだろうか。そのたびにおかしな“契約”を持ち出されてはまんまとハメられ、ゼルは彼女の思うがまま利用され続けている。

おかげで仲間には「人間の女に尻に敷かれているマヌケ」とバカにされ、腹ペこだ。人間の大切なものを盗んで食べることで食欲を満たすゼルにとって、クラリッサのダイヤは最高のごちそうなのだが……

「——へへ、今夜のオレ様は一味違うぜ。気付かれずに襲う練習をしてきたんだっ。あんなガキ一人から盗めないままじゃ、怪盗ゼル様の名がすたるからな……。そーっと行ってヒュッと飛んでバツ！ だ。そー、ヒュッ、バツ！ そー——……っ」

「ヒュッ！ バアッ！！」

「ぎゃあああああっ！！」

突然背後から聞こえた声に、ゼルは飛び上がって転び床に顔を思い切りぶつけた。

「いっ……て——っ！！ ちくしょー誰だ！ ……って、てめえかクラリッサ！！」

赤鼻をさすりながら飛び起きて振り返れば、そこにはランタンを持って佇むクラリッサの姿があった。

「そなたはいつもワンパターンだな、ゼル。そんなことでは私の心臓は盗めないぞ」

「ううううるせいっ！ 今日からオレ様はやり方を変えたんだっ！ もうお前の言うことなんか聞かねえっ！ ムリヤリにでもダイヤを奪ってくんだっ！」

「それは承諾しかねる。このダイヤの心臓はお母様の形見なのだ。お母様がご自分の命をこれに吹き込んで与えてくださったから、私は今こうして生きている。簡単に渡すことは出来ない——でも、私との勝負に勝ったら考えてもいい」

「……勝負？ それは“契約”か？」

ピンと先の尖ったゼルの耳がぴくっと動く。

悪魔は“契約”が好きだ。それで人間を負かしたりだましたりするの生きがいなのだ。甘いお菓子の匂いのように、その誘いは悪魔を引きつける。思わず頷きそうになりながら——ゼルはそこではっと気付いた。

「……てめえ、また何か企んでやがるだろう。なんでまた服を着たままなんだ？ それに後ろの荷物——」

夜も更けてもうとっくに寝る時間は過ぎているはずなのに、クラリッサは腰に大きなりボンのついたストライプのドレス姿だった。その後ろには見覚えのある白のトランク。嫌な予感に、ゼルはクセの強い黒髪を乱すように振った。

「しないっ！ 今日はないぞ勝負なんて！ オレ様はそんなもの興味ないっ！」

「どうしてだ？」

床についたステッキのハートの柄に両手を置き、クラリッサは黒髪を揺らした。

「今日は褒美にそなたの好きなジャムサンドも用意してあるぞ？ 空腹なのだろう？」

「うっ……確かに腹は減ったけど……い、いらねえっ！！ そんなモンにつられるか！」

「そうか。——じゃあ空腹の時にジャムサンドはいくつ食べられる？」

「えっ？ ええと……どのくらいだろうな。三十個はいけると思うけど……うーん、五十個？ いや、百個だ！ 百個はイケる！！」

「——はずれだ。では行くぞ、下僕」

ガッツポーズをしたゼルの腕の中に、ずしっと白いトランクの重みが乗った。

「え！？ なんで！？」

「今私の質問にそなたは答えた。そして間違えた。だから今から私の下僕だ。荷物を持て。私はこれから“希望”を探しに行く」

愕然とするゼルの横をすり抜け、クラリッサは椅子を使って窓辺にぴょんと飛び乗った。そして両手で窓を開け、胸元から銀色の細いホイッスルを取り出し思い切り吹いた。

星のきらめく天空の頂きから、銀色の光の振りまきながら風駆馬(ヒューマ)が駆け降りてくる。その口唇にほのかな笑みを浮かべ、クラリッサはゼルを振り返った。

「さあ行こう、ゼル。冒険の始まりだ」

一晩夜空を駆け巡り、翌朝風駆馬は消え去った。

クラリッサとゼルは小さな街の門の前に立っていた。

まわりは一面眩しいほどの白銀の世界だった。音もなくしんと、粉雪が降り注ぐ。街の建物や石畳の道にはぶ厚い雪が積もり、どこもかしこも真っ白だった。

「さ、さ、さ、寒い！ は……はっくしょい！」

ブルルっと体を震わせゼルが思い切りくしゃみをした。頭や肩にはうっすらと雪が降り積もり、鼻水も垂れている。初夏を過ぎたばかりのシトロンの森からこんな寒い場所に連れてこられるとは予想していなかったため、ゼルはひどく薄着である。

「……ここは北にある街か」

一方クラリッサはフードのついたケープとファーの耳あてを装着し、防寒対策はばっちりであった。ヒルデガルドの指示でトランクに詰めておいたのだ。

ミトンの手袋をした手で冷たい結晶を受け止め、空を見上げる。吐く息はたちまち白く染まった。

「やいクラリッサ。てめえ自分だけそんな格好しやがって！ オレ様にも何かよこせっ！」

ガタガタ震えながらゼルがわめく。冷たく張り詰めた空気の中でいっそう澄み渡るサファイアの瞳を、クラリッサはゼルに向けた。

「悪魔のくせに寒いのか。鍛錬が足りないのではないか？」

「関係ねえよ、んなことはっ！ オレ様たちだってイキモノなんだっ！ なんだってまた急にこんな冬の街に来るんだよ。ああ～～寒い、寒い、寒い——むぐっ！？」

突然顔に何か押し付けられてゼルは息を詰まらせた。それはマフラーだった。

「うるさい、朝から大声で騒ぐなどマナー違反だぞ。これでも巻いている」

急いでゼルがそれをぐるぐると体に巻きつける。だが小柄なクラリッサ用なので長さが足りず完全に寒さはしのげない。

「だめだ、寒い。おい、どっかあったまれる場所を探そうぜ……このままだとコウモリになっちまう……」

勢いと顔色をなくした泥棒悪魔の姿に、クラリッサはふむ、と考える。ゼルたち悪魔は体力をあまりに消耗するとコウモリの姿になってしまうらしい。変化して冬眠でもされたら何かと不便だ。クラリッサは雪に埋もれたナユールの街の中を見回した。

門前広場の向こうには街路が伸びていて、灰色の小さな石造りの家が並んでいる。だがどの扉も固く閉ざされ広場にも道にも人気はない。水が流れ落ちたままの状態ですりついた噴水がぽつんとあるだけだ。

「みんな寒いから家にこもっているのだろうか……ん？」

クラリッサはふと街路の奥にある建物に目を留めた。

尖塔を持つ白い建物。クラリッサはゼルのマフラーのはしをぐいと引いた。

「ゼル、教会がある。本にも書いてあったが教会は困っている人を助けてくれる場所だ。あそこへ行こう」

他の家とは違い、教会の扉は開かれていた。

入口の両側には小さな松明の炎が赤々と燃えている。ひび割れた石段を上がってクラリッサとゼルは中に入った。

こじんまりとした礼拝堂だった。

正面の壁には聖母が描かれたステンドグラス。天井は吹き抜けで、てっぺんに向かって細く高くなっている。

明りの少ない室内は薄暗く、実に質素であった。

木の長椅子がいくつかと司祭の立つ祭壇がある以外は何もない。壁はところどころ塗料がはげかけ、ひびが入っている。大事なステンドグラスにもひび割れがあり、壁や柱の蝟燭立ては半分以上なくなっている。床には絨毯もなく——みずぼらしい有様だった。

「……誰もいないのか？」

クラリッサは首を傾げた。その後ろでゼルはひどく落ち着かない心地だった。

「お、おいクラリッサ。オレ様は教会はちょっと——」

「我慢しろ。他に入れそうな場所はないのだ。……ちょっと呼びかけてみよう」

そう思ってクラリッサが息を吸った時、祭壇の向こうにある小さな木のドアが開いた。

「おや——お客様でしたか。これは失礼。ようこそ、我が教会へ。お祈りですか？」

出てきたのは、白い法衣を着た若い男だった。メガネの奥の双眸は優しい。だがずいぶん痩せて弱々しい感じだった。

「司祭殿であらせられるか。私たちはさっきこの街に着いたばかりの旅人だ。どこか暖のとれる場所を探していたのだが……扉が開いていたのでお邪魔した」

ぺこりとお辞儀をしてクラリッサは事情を述べた。後ろ手にステッキでつついてゼルを促す。

「なんでオレが」と言いながらゼルはしぶしぶ同じように頭を下げた。

「それはそれは。この雪深い中、大変でしたでしょう。この辺りは冬の間はほとんどこのような天気で気温も下がりますから。さあ、奥の小部屋へどうぞ。火を起こしましょう」

さあと促されて小部屋へ入ろうとした時、入口の方からバタバタと足音が聞こえた。

「ヴェルト司祭様！ ああ、助けてください」

転がるように飛び込んできたのは一人の女性だった。石床の上に座り込み両手を組み合わせる。ヴェルトと呼ばれた司祭が慌てて女性に駆け寄った。

「どうしたのです、しっかりしてください」

「息子が……うちの子がひどい熱でうなされていて。丸一日たってもちっとも下がらないんです！ 薬もないしいったいどうしたら！」

わっと泣き出した女性の前にヴェルトは跪いた。

「それは大変だ。はやく医者に見せなければ」

「でもうちにはそんなお金はないんです。冬の間は内職の仕事もほとんどなくて食べていくのがやっとで……！　せめて司祭様にお祈りをしていただこうと思って来たんです」

「何をおっしゃっているのですか」女性の肩を掴みヴェルトが声の調子を強めた。

「あきらめてはいけません。大丈夫、私が何とかします」

そう言うとヴェルトは首にかけていた大きな金の口ザリオを外した。

「聖母様への祈りを込めたこの口ザリオがあなたを助けてくれるでしょう。これを売れば薬代にはなりましょう。この雪では医者を呼ぶのは無理かもしれませんが、隣街へ行けば薬は手に入る。私が行ってきます」

「え……？ でもこれは司祭様の」

泣きぬれた顔に、女性が戸惑いの表情を浮かべる。ヴェルトは優しく微笑んだ。

「いいですよ。この街の人々の幸せのために、私とこの教会はあるのです。必要なものは必要な時に使わなければ」

女性を支えてヴェルトは立ち上がり、クラリッサたちを振り返った。

「すみませんが私はしばらく外出します。よかったら温まりがてら留守番を頼めませんか」

「ああ、それは構わないが」

「よかった。それではよろしく」

そう言い置いて、ヴェルトは女性と共に教会から出て行ってしまった。

『ねえ、あの人がばかでしょう』

その直後唐突に聞こえた声に、クラリッサとゼルは顔を見合わせた。

『ああやって、困ってる人に何でもあげちゃうの。だからこの教会こんなボロボロなのよ』

振り返ると同時に視界に飛び込んできたのは、祭壇の向こうの淡い光を放つスタンドグラス。瞬きと同時にクラリッサのサファイアの瞳に流星のようなきらめきが走った。すると七色に輝く窓の前に、小さな少女の姿が浮かびあがった。

「うわっ、ヘンなのが出てきたぞっ！ だから教会なんて嫌なんだっ」

ゼルがげさに驚いて飛びのく。少女はクラリッサの前にふわりと降りてきた。

『わたしはシエルっていうの。そっちは？』

「私はシトロンの森のクラリッサ。こっちは下僕のゼルだ。あなたは、あのスタンドグラスに宿る“心”だな？」

『そうよ。すごいわ、人間と話すなんて何十年ぶりかしら。クラリッサ……聞いたことがある。シトロンの森に住む白き魔女の子……『人形姫』。どうしてこんなところにいるの？』

「私は“希望”とは何かを探して旅をしている。ここにはそれがあるだろうか？」

隙間風の吹く教会内をクラリッサは見回した。まあとシエルが呆れたような声を上げる。

『希望ね……ここにはほんの少ししかないかも。あの人はがむしゃらに誰かのために生きること必死で、どんどん自分をすり減らしてる。大切な鐘まで売ってしまったのよ』

細く高くなっている天井のてっぺんをシエルが指差した。

『あのてっぺんにはそれは美しい金色の鐘があったのよ。表から尖塔が見えたでしょう。以前は清らかな音色がこの街に響いていたものよ。あの鐘はこの教会の、この街の象徴だった。でも一年前の冬の始まりにヴェルトはそれを売ってしまったの』

「どうしてだ？ いらなくなったのか？」

『違うわ。街の人々に配る毛布や食料を買うためよ。この街は冬になると雪に閉ざされて、隣街との行き来も困難なの。物資を運んでくる商人たちもめったに来ないし、仕事がないから男たち

は冬の初めに収穫ぎに行ってしまう。だからここにはか弱い女子供だけ。それでヴェルトは皆が困らないように、教会の色々な物をお金にして助けてるの』

「ほう……それはよいことではないのか。教会は人々を助ける場所なのだろう」

『そうだけど。そのせいで今度はヴェルト自身がどんどん貧しくなっていくのよ。この教会を見ればわかるでしょう。教会は人々に希望の光を与える場所、でもほとんど空っぽよ』

以前この教会は光に溢れ、聖母や天使を描いた絵画や美しい壁掛けで装飾されていたという。でも司祭は大事な宝具や鐘をも惜しげもなくすべて売ってしまった。

街が貧しくなってから人々は施しを求めて教会へ来るようになった。純粋に祈るために訪れる者はほとんどいなくなった。

「けっ、くだらねえ。どうして他人のためにそこまでするんだ？ バカじゃねーのか」

『汚い言葉を使わないでよ。あんた悪魔でしょ。わたしの聖なる光を浴びてみる？ 少しはおりこうになるかもしれないわよ』

シエルの虹色の長い髪がゆっくり逆立つ。「げっ」と青ざめてゼルは近くの柱に隠れた。

「でも確かにどうしてそこまでするのだ？ あの司祭殿は」

気になってクラリッサも尋ねた。何も見返りが無いというのに、自分を犠牲にしてまで人を助けたいなどと。クラリッサにはよくわからなかった。

『それがヴェルトの“夢”だからよ』

「……夢」

『そう、みんなが幸せになって笑顔になること、それが彼の夢なの。だから司祭になったんですって。祭壇の前で祈りながら話していたわ。でも……』

シエルがそっと目を伏せた。

『このままだとヴェルトは司祭でいられなくなるかも。宝具や鐘を売ることは本当は罪なの。祈りの心を売ることと同じだから……。こんな状態だからすっかり教区の司教様は怒っていて。次の視察までに鐘か宝具の一つでも戻らなかったら彼を追いだすつもりなの』 何もない天井のてっぺんに向かって、シエルは悲しげな声で言った。

『そうになったらヴェルトは……きっと生きる希望をなくしてしまうわ。よい人間なのに。もうすぐその視察官が来てしまうのよ。ああ、せめて鐘が戻ってくれば』

「……夢は、生きる意味……」

野いちごのような唇を、クラリッサは小さく動かした。

彼を助けたら“希望”のきらめきを得られるだろうか。クラリッサはよし、と頷いた。

夕方、雪まみれになってヴェルトは戻って来た。無事に薬を買ってこられたらしい。

首に下げていたロザリオはなくなっていた。襟元にあったブローチもなかった。

留守番のお礼にクラリッサとゼルは教会に泊めてもらうことになった。暗くなるにつれて降雪も強くなってきたし、他に行くあてもなかったからだ。

「たいしたおもてなしはできませんが、どうぞ」

灰だらけの小さな暖炉のある小部屋で、二人は夕食を振る舞われた。

メニューはパサパサのパンとシチュー。あからさまに顔をしかめたゼルのすねを、テーブルの下からクラリッサはステッキで突いた。無表情のままクラリッサは静かに食事を始める。顔を赤くしたり青くしたりしながら、ゼルもなんとか黙って食べた。

「司祭殿は……それだけか？」

二人の間に座るヴェルトの食事をクラリッサは見つめた。小さなパンのかけらと具のないシチュー。ええ、とヴェルトはめがねの奥で微笑んだ。

「私はこれで十分です。遠慮しないでください、まだおかわりもありますよ」

「おう、じゃあおかわり！」

口のまわりをシチューだらけにして、ゼルがからの皿を突き出した。クラリッサは今度は容赦なくゼルのすねをステッキで突いた。

「ところで司祭殿、今日は泊めていただき助かった。そこで一宿一飯のお礼をしたい」

身悶えているゼルは無視して、ドレスのポケットから小さなベルベットの袋を取り出す。

「この中に金貨が十枚入っている。旅の資金なのだが、私には必要ないのだ。だから司祭殿にもらってほしい。価値はよくわからないが、鐘を買い戻すことくらい出来ると思う」

十枚と聞いてヴェルトは人の良さそうな淡い茶色の目を見開いた。だがテーブルの袋に手を伸ばすことなく小さく首を振った。

「……いいえ、お礼など必要ありません。私は自分がしたいようにしているだけ。恩義など感じずゆっくり体を休めていただければいいのです。これは受け取れません」

「どうしてだ？ 鐘を取り戻さないところから追い出されてしまうのだろうか？ 夢をなくしてしまうのだろうか？ だったらこれを役立てればいい」

「え？ はは、まいったな。誰から聞いたんです？ ご心配はありがたいのですが、それは出来ません。私は見返りがほしくて何かをしているわけではありません。だからその金貨を受け取れば、それは私の志操に反することなのです」

「……どうしてそこまで出来るのだ？」

クラリッサは目の前の男をまじまじと見た。

どんなにほがらかでも、疲労感を隠せない痩せた顔。おそらく満足に食べていないのだろう。よく見ると着ている法衣の袖や襟はすり切れてしまっている。

自分を犠牲にして、どうして他人を幸せばかり願うのか。その“夢”が彼をこんな状態にしているのに——どうして笑ってられるのだろう。

「この世の中から貧しさは消えません。でも和らげることは出来ましょう。私はこんな自分にも

出来ることがあると知って、どんな場所でも精一杯それを尽くそうと決めたのです」
金貨の入った袋をそっと持ち上げて、ヴェルトはクラリッサの前へ置いた。

その夜。真夜中に向かうにつれ、外は激しい吹雪になってきた。

ガタガタと古い木窓が鳴る。小部屋に吹き込んでくるすきま風の冷たさでクラリッサは目を覚ました。

「……寒いな」古ぼけた長椅子の上でむくりと身を起こし、暖炉の方を見る。そこはすでに冷え切って、ちらちらと燃えていた小さな薪は暗闇の一部と化していた。

「……あれが最後の薪だと言っていたな」

ランプに火をつけるためのキャンドルストーンもわずかだと言っていた。それでこの冬をどう乗り切るのだろう。暗闇の中をきょろきょろと見渡し、クラリッサは呼びかけた。

「おい、ゼル。そのへんにいるか？」

「……なんだよ」

声はすぐに返ってきた。眠ってはいなかったらしい。

「ちょっと飛んで薪をとってきてくれ。火が消えて寒いのだ」

「ああ！？ ふざけんなっ、こんな嵐で飛べるわけねーだろ。そもそも何でこのオレ様がためえのために薪なんぞ持ってこなきゃならねーんだっ」

「下僕なんだから当たり前だろう、知らないのか」

「知るかっ！ 毛布でもかぶってガマンしろっ！ オレ様だって寒いんだっ」

確かにゼルの声は震えている。ヴェルトが用意してくれた毛布を、クラリッサは頭からかぶって体に巻き付けた。

——そういえば、ヴェルトはどこで寝ているのだろう。ふと気になった。

一番温かいからと彼はクラリッサたちに食事をした小部屋を貸してくれた。その後廊下へ出て行ったが……。

「……なあゼル」びゅうびゅうと唸る風の音を聞きながらクラリッサは呟くように言った。

「どうして司祭殿は金貨を受けらなかったのだ？ すぐに望みが叶うのに」

よい贈り物だと思ったのに。金貨で鐘を取り戻せば司祭の位を守れる。教会から追い出されずに済む。残りの金貨で人々への施しも出来る。夢を持ち続けていられるのに——

「——人の力を借りてどうにかするモンじゃねーんだよ、そういうのは」

わかったような口ぶりでゼルが返事をよこす。

「でも、このままでは司祭でいられなくなるかもしれないのだろう？ シエルが言っていた。そうなったら彼は希望を失うと。司祭殿はそれでもいいのか？ なんだが彼の夢というのはあまり良いものではないような気がする」

ヒルデガルドは夢とは生きる意味だと言っていた。でもヴェルトの場合は逆に彼の命を奪ってしまうもののようにも思えた。へん、とゼルが鼻を鳴らした。

「お前にはわかんねーんだよ。オトコの夢ってもんが。しょせんオンナだからな」

「なんだ？ ゼルには夢があるのか？」

「ああ、あるぜ。お前にはねーのか？」

そう訊かれて、クラリッサは毛布に鼻先を埋めて考えた。

「……ない。ヒルデガルド夫人にもやりたいことはないかと聞かれたが……思いつかなかった。鏡を見ても見えないし、眠っても出てこない」

「はあ？ なにアホなこと言ってんだ。それってまだわかんねーってことだろ。気付いてねーだけだ。願望ってのは誰の中にもある。きっかけがなくてわかんねーだけさ。ていうか、こうやって外に出ようと思ったのもやりたいことじゃねーのか」

「……そうなのか」

意識はしていなかったが。言われてみればそんな気がする。でも――

「そういうのとは違う気がする。……なんというかうまく言葉にできないが」

からっぽのような気がする。何もなくて。どんな本でも一度読めば全部暗記してしまうし、どんな難しい数学の問題もすらすらと解けるのに、自分のやりたいこと一つ思いつかない。考えても浮かんでこないのだ。

「頭で考えたって出てくるもんじゃねーよ。オレは悪くないと思うぜ。お前は本が好きみたいだけど、あんな紙に書いてあることなんて誰かがやったことばかりだろ。そんなの覚えたって意味がねえ。自分でやるのが一番だ。まあおかげでオレ様は大迷惑だけどなっ。ダイヤも食い損ね続けてるし」

口調のわりにゼルの声には悪意がない。クラリッサはずっと気になっていたことを聞いてみたくなった。

「ゼルはどうして私の心臓をそんなに食べたいのだ？」

「そんなの、オレ様の夢のためだ。強くなってかーちゃんの仇をとる」

「……仇？」

声のする部屋の隅の辺りにクラリッサは目を向けた。

「オレのかーちゃんはイジメられて死んだんだ。だから誰にも負けない最強の悪魔になってかーちゃんの仇をとる。お前の特別なダイヤを食べば話が早いんだよ」

どうということだろう？ クラリッサが疑問に思った時、暗闇の中に声が響いた。

『クラリッサ！！』

シエルの声だった。

「なんだ？」

ゼルにも聞こえたようだった。さらに切羽詰まった声は続く。

『クラリッサ、早く来て！ 大変なの！！』

「……どうしたのだろう」

シエルのいる礼拝堂があるのはこの小部屋の向こうだ。何かあったのだろうか。

毛布をから出て、クラリッサは手探りでランプとキャンドルストーンを見つけた。そしてグラスの中に粒状に砕かれたキャンドルストーンを入れ、火をつけた。

「行ってみよう、ゼル」

ランプを手に、クラリッサは礼拝堂に続く扉をそっと開けた。

夜の礼拝堂はまるで洞穴のように不気味だった。

入口の扉が、ガタガタと激しく音を立てている。古く立て付けが悪いのだろう。ぽっかりと開いた天井からヒューヒューと嵐の音が流れ降りてくる。だが聞こえるのはそれだけではなかった。

ガタン、ガサゴソ……

手に持つランプをクラリッサは前に突き出した。すると祭壇の向こう側から大きな影が立ち上がった。

「誰だ」

顔は見えないが男だろう。影はびくっと体を震わせ、そして入口に向かって走り出した。

「あっ！ 侵入者が逃げる、ゼル捕まえてくれ」

「はあ？ なんでオレ様が」

「早くしろ、下僕。あとでおいしいトルテをやるから」

トルテ、という単語にゼルの尖った耳が反応した。「しょうがねえなあ」と言ってゼルはひゅっとクラリッサの横を通り過ぎ、あっというまに男を取り押さえた。

「ぎゃっ！」と短く叫んで男は石床に転がった。その背中にゼルがどすんと乗る。身動きの取れない侵入者にクラリッサはランプの灯りをかざした。

薄汚れた男だった。ぼさぼさの髪にぼろぼろのコート。体の下に何かを抱えている。

「それは……教会のものではないか？」

男の腕の中にあるのは、小さな置物である。クラリッサはふと、祭壇の上に置かれていた聖母像がなくなっていることに気付いた。

「もしかして盗んだのか？ そなたは泥棒か？」

その時物音を聞きつけてヴェルトが駆けつけてきた。

「どうしたのですか、お二人とも……おや？ その方は？」

もがいていた男がびくっと体を震わせた。ぴよんとその背中から下りると、ゼルはおんぼろのコートの襟首をぐいっと引いた。

「コイツがソレを盗もうとしてたんだ。だからオレ様が捕まえてやった」

男の手の中から木製の聖母像が落ちた。ヴェルトはそれを見てかすかに目を見張り、そして薄汚れた男を眺めた。

「その方が……？」

男は俯き、長いぼさぼさの髪でその表情を隠している。ヴェルトはしばらく固まったように黙り——そしてふっと表情を和らげた。

「……理由を話してくれませんか？ 大丈夫、罰する気はありません」

男の前でヴェルトは膝を折り、やさしく問いかけた。小さく震えながら男がぎこちなく顔を上げる。

「お……おれは……そ、その」

だがヴェルトと目が合った途端、男はガタガタと震え出した。そして落ちていた像を掴み、「うわああっ」とその手を大きく振り上げた。

聖母像がヴェルトの肩を打った。男はそのまま像を持って一目散に逃げていく。よろめいたヴェルトを助け起こし、クラリッサはゼルに命じた。

「大丈夫か、司祭殿。ゼル、追ってくれ」

「いいのです、追わないでください」

肩を押さえたままヴェルトが止めた。その顔は苦痛に歪んでいる。

「いいのです、このままで……。あの像は彼に差し上げましょう」

「……差し上げる？ どうしてそんなことを言えるのだ？ あの男は像を盗み司祭殿を——。なのに見逃すのか？」

「いいのですよ、これで」ヴェルトが無理に微笑んだ。

「物は必要な時に使わなければ存在する意味をなくします。今がその時だったのです。……あの方はきっと、とても苦勞なさっているのです。そして仕方なくやってしまったことなのです。…私にはそれを罰することはできません」

「だが盗むのは悪いことだろう」

クラリッサはなんとも言えない妙な気分になっていた。ヴェルトの言葉の、その微笑みの意味がわからない。頭の中のどんな文献や方程式でも理由は導き出せそうになかった。

「……人はいつでも正しいことばかりをするのではありません。私もかつてそうでした」

穏やかな表情のまま、ヴェルトは静かに語り出した。

「私は昔どうしようもない人間でした。ケンカを繰り返し、盗みもした。……とても貧しかったのです。生きるためには仕方なかった。誰にも信用されずゴミ同然に思われていました。でもある時、盗みをした私を信じてくれた司祭様がいたのです。彼は私を咎めませんでした。それどころか温かいスープを与え『辛かっただろう』と言ってくれたのです。その時私は初めて“人間”になった気がしました。それから私は自分と同じ境遇の人々を救おうと決めました。彼のような司祭になろうと」

長椅子に座り、ヴェルトは正面のステンドグラスの方を見つめた。

「その志は立派だと思う。だが、今のままでは司祭殿が困るのではないのか？」

ランプのグラスの中のキャンドルストーンがジジと焦げた音をたてた。

「このまま施しを続ければ、あなたはすべてをなくしてしまう。それでは生活できない。ならばもうやめるべきではないか？ ……ここはもう空っぽだ」

このまま与え続ければ、彼を待つのは不運な行く末でしかない。わかっていながらそこに向かうのは愚かなことではないか。

「そうですね、確かに空っぽだ。……でもたくさんの思い出はあるのです」

ふふ、と穏やかに笑うヴェルトに、クラリッサは少し呆れた。

「そんなもの腹のたしにはならない。生きて行くのには食べるものと健康が一番だ」

「……いいえ、人はそれだけでは真に幸福にはならない。私もかつてそうでした。パンを盗んで空腹はなくなっても、心の隙間はどんどん広がった。苦しくて切なくて涙がとまらなかった。私はもうあの頃には戻りたくないのです。それにどんなに貧しくても今は怖れも不安もありません。ここで運がついても私は後悔しませんよ。すべてを失っても……振り返った先でみな笑顔でいてくれるなら。私の願いは……夢は叶ったのです」

翌日ヴェルトが表の雪かきをしている間に、クラリッサは祭壇で何かガサゴソしていた。

『ムダだと思うわよ。そんなことしても』

振り返った先にあるステンドグラスから、ふわりとシエルが降りてきた。

『お金を置いていったって、ヴェルトは人のために使っちゃうもの。もう温まるための薪もないしパンだって昨日のが最後だったけど……自分のためには使わないわ』

その指摘に、クラリッサは祭壇にある聖典に挟んだベルベットの袋を見下ろした。

「……厄介なものなのだな、夢というのは」

昨夜、ヴェルトの言い分に対してクラリッサは何も反論しなかった。

いや、出来なかった。何も言葉が出てこなかったのだ。

「でもそれが司祭殿を生かしているのだな」

……少し、うらやましいような気がした。ならばほんの少しでもその時間が長くなればいい。だからこっそり金貨を置いていこうと思ったのだ。

『ね、あの人がかでしょう。でもね、わたしあの人のそういうところ嫌いじゃないの。だから見守りたいと思うのよ』

全身にまとう虹色の輝きをシエルが揺らす。その時入口の方が騒がしくなった。

「お願いします、もう少し待って下さい」

両手を広げてヴェルトが教会の入り口に立っていた。その向こうには男が二人いる。

『ああ来たんだわ、司教館のやつらが』

シエルが声をかたくした。目の前を塞がれて黒い服の男たちが憤慨する。

「おどきなさい、ヴェルト司祭。我々は司教様に命じられてきたのです」

「その通り。ちゃんと教会のものが戻ったか確認させていただきますよ。そうでなければあなたを審議会へ引き渡し、ここは閉鎖しなければ」

「待って下さい！ お願いします、もう少し……！ でもせめてこの冬が終わるまで、ここにいさせてください。その後ならばどんな罰でも受けますから」

ヴェルトが食い下がる。その細い腕を必死に広げて。

左胸を小さな痛みのようなものがかすめた。なんだかよくわからなくてクラリッサは「ゼル！」と呼んだ。

「あの男たちを追い払えないか？」

「イヤだね。人間のケンカに巻き込まれるなんざ。それにこれはあの男の問題だろ」

天井から降りてくると、少年悪魔は口を曲げてツンと顎をそらした。

ヴェルトを乱暴に押しつけ、男たちが入ってこようとする。クラリッサはとっさに聖典に挟んだ金貨の袋を取った。

「司祭様！」

その時、大勢の人々が教会に押し寄せてくるのが見えた。何やら大きなものを皆で運んでくる

。「鐘の修理が終わりましたよ！ お届けにきました」

彼らが抱えてきたのは——金色の大きな鐘。それはヴェルトが売ったあの鐘だった。

「……どうして」

尻もちをついたままヴェルトは目の前に現れた金色の輝きに目を奪われた。そして運んできた人々の顔を見た。

「……どうして皆さんがここに。冬の間は街の外へ仕事をしに行っているはずでは」

そこにいるのは、出稼ぎに出ているはずの街の男たちとその家族であった。昨日教会へ駆けこんできた女性もいる。先頭を切ってやって来た男が言った。

「恩人の危機を放っておくわけにはいかんでしょ。司祭様はいつも私たちの力になってくれておる。わしらの家族を支え、仕事だってあなたが見つけてくれたものだ。せめてもの恩返しに、教会の鐘を取り戻そうとみんなで決めておったのです。おい、あんたたち！ 鐘はこうして戻って来たぞ。文句はないだろう」

「そうだそうだ、司祭様を追いだすなんて出来ないぞ。帰れ帰れ！」

住人達の喚声に、黒服の男たちは顔を見合わせた。

「……ああ」ヴェルトが両手で顔を覆った。

「なんという幸運だろう。私はまだ見捨てられていなかった」

力が抜けてがくりと下がった肩が小さく震えだす。そんな男の前にたくさんの手がやさしく差し伸べられた。

鐘が戻ったことで、ヴェルトはとりあえず司祭の称号を取り上げられずにすんだ。

街の人々が黒服の男たちを追い出し教会は守られた。

『よかったわ、ヴェルトが無事で』

寂しく暗かった教会は、今日は賑やかだった。ヴェルトの周りにはたくさんの人々が集まり、笑いが溢れていた。

『まさか皆がお金をためて鐘を買い戻してくれるなんてね』

シエルと同じ色をしたスタンドグラスの下で、クラリッサスカートのポケットに触れた。

そこには金貨の入った袋がある。結局必要はなかったけれど。

「……お金では買えない“希望の光”か」

ヒルデガルドの言っていたことがわかったような気がした。その時、頭上から高く澄んだ音が聞こえてきた。

人々の歓声が上がる。クラリッサは頭上を仰ぎ見た。

遠く高い天井のてっぺんで、大きな鐘が揺れている。まるで慈愛の雨のように、純粹で透明で神聖な音色がきらきらと降り注いでくる。

『聖なる音が戻ったわ！ わあい！』

ぴよんと飛び上がったシエルの体が淡い七色の光に包まれる。やがて彼女の姿は光の珠になりスタンドグラスに吸い込まれていった。

降り注ぐきらめきの粒子がクラリッサの左胸にこぼれ落ちた。

トクン、とダイヤが反応した。心地よい波がゆっくりと体の中に広がっていく。

「……あたたかいな」

そして、なんてやさしい気持ちだろう。

クラリッサはヴェルトを見た。愛すべき人々に囲まれて彼は微笑んでいた。皆も同じように笑っていた。

「あれが、司祭殿の欲しかったものか」

皆の笑顔。それが彼の生きる意味、彼の守りたかった、希望(ゆめ)。悪くない——そう思った。

「……私も出会えるだろうか」

“心”から大切にしたいと思うものに。あんな風に笑顔になれる瞬間に。

クラリッサは左胸に手を当てた。

今はまだ、小さな予感しかない、でも——きっと探そう。そう思った時、目の前に一筋の光がまっすぐに伸びていくのをクラリッサは見た気がした。確かな、幻。その先にある、まだ知らぬ未来が。

「ゼル、帰るぞ」

両耳を塞いで蹲っている相棒をクラリッサはステッキでつついた。

「うううう、イヤな音だぜ。ちからがぬける……」

よろよるとゼルが立ち上がる。クラリッサはため息をついた。

「だらしないな。そなたは苦手なものが多すぎるぞ。それで最強悪魔になれるのか？」

「う、うるせい。オレ様は繊細なんだ、だからしょうがないんだ」

「そうか。それではたくましくなれるよう、この先も下僕として仕えさせてやろう」

「えっ……」ぶるぶるとゼルが全身を激しく振った。

「冗談じゃねえ！ 絶対イヤだ！ ていうかオレ様はてめえの下僕じゃねえ！ 今回は不意打ちでそういうことになったけど、次はぜって一負けねえ！」

「ほう、じゃあもう答えはわかったのか？」

「当たり前だ！ オレ様を甘く見るなっ。前はちょっと遠慮しすぎた。本当は……千個だっ！ 千個は食べられる！」

「……やはり下僕化決定だな」

自信たっぷりに言い放ったゼルに、くすり、と小さくクラリッサは——笑った。

「教えてやろう。おなか为空いた時に食べられるのは、ひとつだけ、だ」

入り口から、クラリッサは喜びに満ちた教会内を振り返った。

この街の人々の、ヴェルト司祭の生活はこれからも楽ではないだろう。悲しみや苦しみもたくさんあるだろう。でも彼らは——きっこうして笑い合うことを忘れない。

「欲張って多く詰め込んでも、本当の意味で満足しない。でもたったひとつの貴重なジャムサンドで、人は本当の満ち足りた気持ちを知ることにも出来るのだ」

やがて白き街に粉砂糖のような雪が降り注ぎ始めた。

冷たく冴えて張り詰めた空に、鐘の音が鳴り響く。それはどこまでも澄んで美しく、優しい旋律のようだった。

世話焼き魔一メイド 番棚葵

あらすじ・登場人物

○あらすじ

自分が魔界の王子ユタであると、徐々に記憶を取り戻した鎌井裕太。魔界に帰ることを決めた彼は、とりあえず世話役の人魚姫サリナと共に、人間としての生活を送ることに。しかし、そんな彼を魔界の異種族が狙ってくる。遠足先にまで現れ、襲いかかってきた菌糸族を、裕太は幼い頃の思い出を頼りに何とか倒すのであった。

○登場人物紹介

鎌井裕太（ユタ）

入学前の記憶がない少年。その正体は魔界の王子・ユタ……らしい。

海野紗理奈（サリナ）

魔界から来た人魚姫。幼い頃からユタを慕っていて、何かと過剰に世話を焼く。

そこにあるのは、黒色と灰色が混沌と混ざったような、そんな色彩だった。どこか暗く、そしてほの明るい。この二つが打ち消し合うでもなく、同居している世界だ。

「またか」

その世界に立つ僕は、うんざりつつぶやくと、ふと後ろに生まれた気配に反応して振り返った。それが何の気配なのかは、もうわかっている。

グォンッ。

魔力のうねりと共に、僕の体色は赤銅へ、髪は白髪へと変貌を遂げた。自分の本当の姿、魔界の王子ユタへと。

右手をかざした。すべてを焼き尽くす白い炎、「白炎」が生まれる。

「そこっ！」

僕は白炎を気配へと投げて……………そして、炎は宙へとかき消えた。

「ちいっ？」

「進歩がないな、お前も。それは効かないと言っただろう」

渋い男の声がして、気配は黒い人影へと凝縮し、影はやがてくっきりとその姿を現した。

コウモリのような羽根を持つ人間。頭には山羊の角が生え、全身を光沢のある黒色で包んでいる。皮膚なのか衣装なのかは不明だ。

特筆すべきは、その赤い長髪の下にある顔だろう。整えられていて、とても美しい。体型からして男性だろうが、その全身像は僕が見ても思わず見とれてしまう。

だが、外見は美しくとも、こいつの性根は最悪に醜いに違いないのだった。

なぜなら。

「さあ、今日も『覚める』まで持ちこたえられるかな？」

「くそ……もう一度白炎を」

「おっと、無駄な抵抗はやめることだ。忠告してやるが、この世界でもお前の体力は現実とリンクしている。術を使えば、それだけ消耗していくぞ」

勝ち誇った顔で告げると、そいつはやおら舌なめずりをして僕を見た。

「そしてこの世界では、俺に勝てる奴などおらん。潔く、降伏することだな」

「誰がっ！」

叫び返す僕に、奴は「やれやれ」と肩をすくめると、片手を頭の上へと掲げた。そこに「禍々しい」としか言いようのない色の光が、渦を巻いて集まっていく。

「さあ、今宵も始めようか。美しくも恐ろしい夢の戦いを」

「うわあああああっ！」

僕は叫んで跳ね起きると、まず周囲を見渡した。

白い壁に本棚、洋服ダンス、勉強机。そして自分の体を支えてくれている、やや大きめなベッド。

疑う。ここは本当に、現実なのだろうか。頭の中がぼーっとして、今までの経験が夢であ

ることが、にわかに信じられない。

数十秒してから、やっと安堵の息を吐いた。ああ、あれは夢だったんだ。

そう、夢。昨日も一昨日も見た、恐ろしい夢。

心臓がまだ動悸しているのがわかる。正直、生きていてよかったと心の底から思った。しかし、こんなことを繰り返してはいずれ……

「どうしました、ユタ様！」

ふと。ぱたんっ、と扉を開けて一人の少女が入ってきた。僕の従者にして人魚族の姫であるサリナだ。

よっぽど慌てたのだろう、彼女は寝間着を着たままであり、ファッション雑誌を丸めて武器代わりにしている。彼女愛用のナイトキャップと相まって、どこか間の抜けた姿ではあった。

しかし僕には笑ってその格好を指摘することができなかった。彼女は前述通り寝間着のままなのだが、今の季節は晩春なのである。寝間着は結構薄く襟口が開いており、そして彼女は当然ながら睡眠時にブラなどしていなかった。

大きい胸がこぼれそうに揺れ動き、谷間が惜しげもなくさらけ出されている。

「ちょ、ちょっとサリナ！ 僕なら大丈夫だから！ それより早く着替えてきて！」

「大丈夫なんですか？ 本当に？ ていうか、私が着替える必要がどこにあるんです？」

「いいから早く！」

この子は、僕を慕って世話役をしてくれているのは嬉しいが、少しは思春期の男の心情も慮ってほしい。

ともあれ、サリナは首を傾げながら部屋を出て行き、僕は二重の意味で安堵の息を吐いた。

ふと、机の上に置かれている目覚まし時計を見る。

「七時か……」

何はともあれ、夜は明けた。眠った気はまったくしないのだけど。

「じゃあ、ユタ様。やっぱり『夢魔族』の夢を見たのですね？」

「うん。これじゃ体がもたないよ」

リビングにあるテーブルにて。僕はぐったりと体をもたれかけさせていた。どうにもだるい。心も、体も。睡眠というものがいかに大事か思い知らされる。

対面に座っているメイド服姿のサリナは——律儀なことに彼女は、僕の世話を焼いている間はずっとこの姿なのである——彼女が作ったスクランブルエッグを口に運んでから、気遣わしげに僕の顔を覗き込んだ。

「……隈が出来てますね。顔色も悪いですし……このままでは、心身共に参ってしまいそうです」

「あ、うん。そうみたいだね……」

彼女との距離はいわゆる「息すら届く」もので、人形のように可愛らしいサリナの顔を間近で見るといつも僕はドキドキするのだけど、今回ばかりはそんな感慨もわかenかった。ただ鉛のように重い疲れが、頭にのしかかっている。

嘆息すると僕は顔を上げ、少しでも元気を出すためにコーヒーに口をつけた。

自分の正体が、魔界の王子「ユタ」であると知ったのは最近のことだ。とは言っても完全ではなく、ところどころしか思い出していないのだが。それでも、自分が「ユタ」であることに間違いはないと確信はしている。

そしてそんな僕に、魔界から度々「刺客」が襲いかかってきた。魔界を僕の種族である「魔人族」が治めるのが気に入らない他種族が、王子である僕を人質に取ろうと襲いかかってくるのである。

魔界に逃げた方が安全な気もするけど、僕の記憶が完全に戻っていない以上、帰るのには若干の気後れを感じた。それに僕の親父が理不尽なまでに凶暴で、記憶を戻っていない僕を不甲斐ないと判断して、殺しかける可能性もある（らしい）。

だが今度は、そうも言ってもらえない気がする。それというのも。

「まさか、夢の中に入り込んで襲いかかってくる魔族までいるとは思わなかったよ」

「夢魔族はそういう種族なんですよ。夢を自分のフィールドと化して、その中で絶大な力を振るい、敵に襲いかかってくるんです。夢の中では夢魔族に勝てる種族はいないと、言われているほどなのですよ」

サリナの言う通りだった。

夢魔族と名乗る奴——羊の角を持った悪魔のような魔族が、僕に宣戦布告してきたのは一昨日の夜だった。夢の中で奴はこう告げてきた。

『ユタ王子よ、我が軍門に降れ。さもなくば、この夢の中で延々と苦痛を味わってもらうことになるだろう』

僕はユタの力を解放して戦ったが、なぜか夢の中では奴には勝てなかった。というより、普通

の法則が通用しないのだ。それこそ夢のように、突拍子もないことが起きる。

例えば放った攻撃の術は、すべてかき消される。逃げようと後ろに走り出すと、通れない闇が阻止してくる。自棄になって殴りかかれば、いつの間にか足下に穴が空いてその中をまっすぐに落下——そしてなぜか元の場所に戻ってくる始末だ。

そして奴の攻撃が始まる。悪夢が僕を苛んでいく。突如現れた自動車に轢かれ、いきなり飛んできたナイフに心臓を貫かれ、クラスメートが鈍器を持って次々に襲いかかってくる。その間、こちらはまったく動けない。

夢の中の出来事だから、物理的なダメージはないはずだ。だが、僕はユタの知識で知っている。術によって、夢と現実の境界を調整することも論理上可能だということ。夢で受けたダメージが、そのまま現実に及ぶのだ。そして僕よりも博識なサリナが言うには、夢魔族はその辺の術が得意な種族らしい。

今のところ僕に苦痛だけを与えているのは、僕に死なれたら人質の意味がなくなるからであろう。そこだけが救いといえれば救いだ、それでも苦痛は夢を見ている間続き、疲労は夢から覚めても残っている。正直、このままでは神経がすり減りそうだった。

「せめて、夢を見ない方法があればなあ。あいつに会わずに済むのに」

「そうですねえ」

サリナは思案げに宙を見つめていたが、やがて思いついたように両手を合わせた。

「そうだ、膝枕なんてどうでしょう」

はい？

「ユタ様が寝付けない時、私が膝枕してあげたことあるんですよ。それはもう、ぐっすりとお休みになりました」

「え、いや、ちょっと待って。どうしてそれが夢を見ない方法になるの？」

「熟睡できれば、夢も見ないかと」

「あのねえ」

二つの意味で僕は嘆息した。一つは、熟睡できたところで夢を見ないという保証はないからだ。どうもサリナのアイデアは、時々突拍子もない地点に着地する。

もう一つは、その意見がとても魅力的に感じられたからだ。サリナの膝枕……だめだ、邪な考えが悶々とわき起こる。それを自分で戒めるためのため息である。それなのに。

「え、ダメなんですか？」

サリナはがっかりした風に、上目遣いで僕の方を見てきた。う、そんなにしたいのかな。彼女はどうも僕の世話を焼くことに生き甲斐を感じているみたいだけど、膝枕とか嫌なんじゃ……そんな目つきされると、色々期待しちゃうじゃないか。

「と、とにかく、他にもっと効果的なものを考えようよ。魔界のアイテムで、そういうのなの？」

話が脱線しかけたので、僕は咳払いしてから質問を繰り返す。

彼女は以前、菌糸族との戦いで魔界謹製のトレーサーを持っていた。それと同じような便利アイテムがあれば、こっちも助かるんだけど。

「アイテムですか……うんと、そうですね……あ」

「何かあった？」

「はい。人魚族特製の、眠り薬がありました。夢も見ないくらい深い眠りが持続する上に、朝方には眠気はすっきりとれ、副作用もなくてばっちりです！」

「……普通、そっちを真っ先に思い出さない？」

どうして、膝枕案が一番最初に来るのやら。

しかし僕の問いかけに、サリナは小さく舌を出して「うふふ」と笑ったきりだった。その顔は自分のうっかりを恥じているようでもあり、何か違う意味があるようにも思えた。

それから数日後。

「うーん、何の苦もなく眠ることができる生活が、こんなにも快適だったなんて」
僕は喜びをしみじみとかみしめながら、席の上でつぶやいた。

教室内では二時間目の休み時間を迎え、クラスメート達がコミュニティを作ってわいわいと雑談をしている。

僕の周りには今は誰もおらず、ただサリナだけが当たり前のように側に立っていた。

彼女は僕に笑顔を向けると、

「良かったですね、ユタ様。顔色もすっかりよくなりましたみたいですし」

「ああ、サリナのおかげだよ。人魚の作った薬が、ここまで効果を発揮するなんて」

「人魚族は薬の作成にかけては魔界一なんですよ。おとぎ話でも、人間になる薬なんて作っていたじゃないですか」

「あれ実話だったの？」

「というか、あの薬には大変なリスクがあったような気がするんだけど。まあ、サリナが「副作用はない」って言ってたから、この眠り薬は大丈夫かな。」

ともあれ、サリナが魔界から持ってきてくれていた睡眠薬のおかげで、僕は再び元気を取り戻していた。この薬、文字通り本当に夢を見ることもなく深く眠ることができ、そのせいで夢魔族は姿を現さないでいるのだ。

もっとも、薬の数には限りがあるし、効果が常に安定して発揮されるとは限らない。体調と薬の相性次第では、眠りが浅くなってしまう恐れもあった。

だから。

「早いところ、魔界から返事が来るといいんですけどね」

「うん。そうだね」

とりあえず僕達は、サリナの提案で魔人族の中でも「賢者」と称されるほどの学者に連絡を取っている。彼は魔界について知らないことはほとんどなく、夢魔族についても何か対策を知り得ているはずなのだ。

どうしてサリナがその賢者と面識があるのかというと、彼は城の中で文官をつとめているからである。というか、僕とも面識があるらしいのだが、記憶から抜け落ちていた。

「大半が武力派を閉める魔人族の大臣の中でも、貴重な知性派なのです。彼がいないと話し合いという解決策は、魔界の王国では成立しません」

とのことらしいが、体育会系すぎるだろ、魔界の王国って。うーむ、帰るのが本格的に嫌になってきた。

「まあ、とにかく。夢魔族と決着をつけたら、魔界に帰るかどうかが本格的に考えよう。いつまでも親父を怖がっていても、仕方ないような気がしてきたし」

「ユタ様……そうですね。死を覚悟するのも、人生においては必要かもしれません」

「えっ？ そこまで凶暴なの、うちの親父っ？ ちょっ、冗談だよっ？ いくらなんでも実の息子を殺したりしないよねっ？」

「安心して下さい！ いざとなれば、私も後を追います！」

「嬉しくない！ そのフォローは嬉しくないから！ その、そっと両手を合わせるのはやめてよ！ 縁起でもない！」

などと、僕とサリナが言い合っていると。ふと、クラスメートの男子が数名、こちらへとやってきて、声をかけてきた。

「よう、鎌井。相変わらず海野さんとイチャついてるな」

「ああ、そうだろう。いいだろう」

「……ち、反応が今一つまん」

「そりゃ、毎度毎度冷やかされていれば、僕だって耐性がつくよ」

僕は肩をすくめて、彼らの方に向き直る。クラスでも比較的仲のいい生徒達だ。僕とサリナの仲がいいので、いつも羨望の眼差しと揶揄を向けてくるが、いい加減それにも慣れてきた。それに正直なところ、僕自身悪い気もしない。

ちなみにサリナはというと、「？」とよくわかっていない様子で、笑顔を浮かべてこちらを見ている。彼女の場合、僕に対する感情は忠誠に近いだろうから、こんな風にかかわられているなんて夢にも思っていないんだろうな。

それにしても。僕はあることに気づいて、改めてクラスメート達の顔を見た。心なしか、どこか疲れているように見える。それも全員。

「どうかしたの。何かしんどそうだけど」

「あ、ああ。それがだな」

僕の問いかけに、彼らはどことなく気まずそうに顔を見合わせた。何か躊躇してから、一人が代表するように口を開く。

「あのさ、鎌井。別に気を悪くして欲しくないんだが」

「なにを？」

「いや、俺たち、最近変な夢を見るんだ」

「……え？」

「それも、お前に関係があるような気がする夢なんだけど……」

「それって、どういうこと……？」

彼らが言うにはこうだ。

最近、悪夢をよく見るらしい。その悪夢の中で、彼らは惨たらしく殺される。

ある時は鋭い鎌が飛んできて、首がはねられる。ある時は鎖で縛られて水底に突き落とされ、光の映る水面、その向こうにある酸素を望みながら無惨にも窒息死する。ある時はくちばしの鋭い鳥に山とたかられて、生きたまま肉をついばまれていく。

死んだ、と思った瞬間に飛び起きる。夢であることを確認し、やがて何とか気分を落ち着けて再び眠りに入る——すると、また同じような悪夢を見るのだ。

そして夢の最後には、悪魔のような奴が出てきてこう告げる。

『鎌井裕太を呼べ。夢が現実になる前に』

「これが、三日くらい続いているんだ。まったく同じような夢が」

「しかも、同じようにぐったりしているから話をしてみたら、皆が皆同じような夢を見てるしさ。偶然にしても気持ち悪いだろ？」

「それは……」

僕は言葉を濁したが、本当はその夢が意味するところがわかっていた。

思わずサリナと顔を見合わせる。彼女の瞳も、動揺に揺れていた。

ふと、クラスメートの一人が、ぽつり、とつぶやいた。

「なあ、鎌井。お前、何なんだよ？」

「え？」

「だっておかしいだろ。どうして複数の夢の中で、お前の名前が出てくるんだよ。しかも同じような奴が名指ししてさ」

「大体、お前って何か、その、変なんだよ。記憶喪失ってのも嘘くさいし」

「そのくせ、転校してきた海野さんとは、何か前から知り合いだって言うし」

クラスメート達の疑うような目が、遠慮がちに僕に向けられる。

僕は思わず苦笑した。苦笑することしか、できなかった。

「はは、何だよ。酷いこと言うなあ。それじゃ僕が何だって言うのさ？」

「それは、その……えっと」

彼らは言葉につまる。勢い込んで僕を疑ったものの、その正体には気づいていない。それはそうだ、誰が目の中のクラスメートが魔界の王子なんて思うだろう。

僕はにこやかに、言葉を続けた。

「ほら、夢って見た内容が、後であやふやになってくるって言うじゃないか。誰かが『僕の夢を見た』って言い出して、その印象が強かったから、自分の夢もそうだったのかも、って思いこんだんじゃないのかな」

「あ、ああ」

「なるほど」

クラスメート達はそれで納得してくれたようだった。でも、恐らくまだ半信半疑の状態ではいるのだろう。

僕は席から立ち上がると、ドアの方へと向かった。何となく、彼らの顔を見たくなかった。というか、自分の顔を見せたくなかった。

「ごめん、ちょっと保健室行ってくるよ。先生に言っておいて」

「え、あ、うん」

「悪かったな、鎌井。変なこと言って」

「大丈夫、気にしてないから」

僕はできるだけ明るい声で言うと、片手をひらひらとさせて、扉を開けた。

入り口を抜けたところで、ちょうど次の授業の開始を告げるチャイムが鳴る。先生はどうやら遅刻気味のようだった。

保健室には大抵、教諭が存在する。が、今はいなかった。

ちょうどいい。仮病を使うつもりだった僕は、安堵の息を吐いた。嘘はどうにも苦手なのである。

サテンのカーテンを開き、やや大きなベッドの上に腰掛けた。顔だけ伏せ、両手を額の前で組む。

「さてと、どうしたものかな」

「どうしたのですかねえ」

「うわあっ？」

僕は驚いた。いつの間にかカーテンの切れ目から、サリナが顔を覗かせていたからだ。

彼女は少し悪戯っぽい笑みを浮かべると、同じくベッドの上、僕の隣に腰掛けた。肩がくっつくくらいに近い。髪からほのかに甘い香りが漂い、僕は少しどぎまぎしてしまう。

「さ、サリナ。何しに来たの？」

「ユタ様を心配しに来ました」

「え？」

「だって、悩んでいるのでしょうか？ クラスメートのことで」

そう言葉を返すサリナの顔から、いつの間にか笑みは消え、毅然とした、それでいてどこか不安そうな色が表れていた。

「彼らに悪夢を見せているのは、間違いなく夢魔族ですから。目的はユタ様を挑発すること……いえ、あれはもう脅迫ですね」

そう。悪夢の原因が夢魔族なら、夢の中の「死」を現実にも持ってくることもできる。彼らの夢の中のメッセージは僕に向けてのもので、「夢の世界へ来なければ、こいつらを殺す」という意味なのだろう。

僕は深く嘆息した。

「まさか、こんなことになるなんて」

「まったくです。夢魔族のやり方は汚いですよ」

サリナは憤慨したように言ったが、僕はゆっくりと首を横に振った。

「違うんだ、サリナ。確かに夢魔族は外道だけど、問題はそこにとどまっていない」

「え？」

「僕は、今回のことではっきりと身にしみたんだ。自分の立場ってものを。魔族に襲われる程度なら、自衛すればいいと正直高を括っていた。まさか周りの人間を巻き込むことになるなんて思ってもみなかった」

「ユタ様……」

僕があまりにも辛気くさい顔をしていたからだろう、サリナの声はとても気遣わしげだった。でも、僕にはもう選択する権利は残されていない。ため息が口を突く。

「……僕は、魔界に帰るよ。いつまでもこの世界に、いるわけにはいかない」

それは、クラスメートに詰め寄られた時から、僕が決めたことだった。こうでもしないと、いつ彼らを巻き込んでしまうかわからない。

正直、この世界から離れるのは嫌だ。記憶が完全に戻っていない以上、僕は人間「鎌井裕太」であるという意識の方が強い。なのに、魔界なんて恐ろしげなところに行かないといけないなんて……でも。

と、僕の手を温かいものが包み込んだ。ぎゅっ、と力を加えてくる。

「サリナ？」

「大丈夫です、ユタ様。私はいつでも、ユタ様についています。頼りないかもしれませんが、必ずお守りしますから」

「……うん、ありがとう」

僕は力強くうなずいた。このサリナの言葉だけで、心の底から元気が出てくる。我ながら現金だとは思うけど。

「さてと、その前に夢魔族に落とし前をつけないとね」

「ええ。でも、対抗策がないと、何とも……夜が来る前に、賢者様からその返事が来るといいのですが」

サリナは不安そうにつぶやいたが、結局彼女の願いは半分しか叶われなかった。

「賢者様から返事が来ていますよ！」

その夜、家の今にて。メイド服姿でパソコンをいじっていたサリナが、歓声を上げた。

なんと驚くなかれ、魔界との連絡手段はメールで行っていたのだ。魔界は自然も多く、外見の文明レベルはこの世界より劣るのだが、内部の生活レベルに関しては勝るとも劣らないらしい。早い話が、冷蔵庫とかテレビとかがあるそうなのだ。すべて電気ではなく、魔法の力で動くらしいのだが。

ともあれ、賢者から夢魔族に対しての対抗策が送られて来たらしい。僕は期待をこめてサリナに尋ねた。

「で、なんて？」

「それが」

サリナは微妙そうな声を返した。僕を手招きして椅子から立ち上がり、パソコンの画面を見るように言う。

僕は椅子に腰掛け、言われた通りにした。眉が寄せられたのが自分でもわかった。

「えっと、『夢魔族の使う術に関してははっきりとした理論がまだ成立されていない。彼ら特有の能力と言った方が正しいだろう。したがって、その能力そのものを術によって干渉させるには、儀式と魔術式の組み合わせによる、呪術的側面を持った……』えっと、どういうこと、これ？」

後半わからなくなって、サリナに尋ねる。サリナが僕の背中に胸を密着させて——僕は胸中で快哉を上げた——肩越しに画面を見つめながら答えた。

「つまり、現状では夢魔族の能力を術でどうにかすることは不可能ということです」

「そんな？」

それじゃ、夢魔族には勝てないじゃないか！

「でも、方法がまったくないわけではなさそうです。術で対処できない場合のことも記述しています。ほらここ」

そう言ってサリナが指さした箇所には、次のような文章が書かれてあった。

『夢魔族の能力は、夢を媒体にして発動する。夢が宿主に見せる幻覚を彼らは利用しているのである。しかし、実際には夢を保っているのは夢魔族ではなく、夢を見ている存在の方である。よって夢の主が、夢をはっきりと幻だと認識して主導権を握ることができれば、夢魔族の力を打ち破ることはできる』

僕は首をかしげた。書いてあることの意味が、今一わからない。サリナの横顔を見る。

「……えっと、つまりどういうこと？」

「つまり、夢魔族は夢が持っている幻覚の力を利用し、夢を見ている人間を攻撃するわけです。だから、その人間が『夢だからすべては幻に過ぎない』とはっきり自覚できれば、幻覚は力を失い、夢を支配している夢魔族も無力化されるということです」

つまり、「これは夢なんだから気にするな」と、自分に夢の中で言い聞かせないといけないのか。しかし、これは難しいな。

「大体、夢を見ているってというのは、ある程度自覚できているんだ。でも、いざ夢魔族の攻撃を受けると、どうしても夢だとは思えないんだよ」

「そうなんですか」

サリナはつぶやくと、困ったようにあごの下に人差し指を当てた。

「となると、より強固に『これは夢なんだ』と自分に言い聞かせるしかないんじゃないでしょうか。少なくとも、私にはそれ以外の方法が思い浮かびません……」

「結局、根性で何とかしないとイケないのか」

僕がため息を吐くと、申し訳なさそうにうなだれる。

「申し訳ありません、ユタ様。こんな時に役に立てないなんて……私、これほど自分の無力が歯がゆいと思ったことはないです」

「いいよ、気にしないで。とにかく、今夜もう一度あの夢魔族と対決してみよう。ひょっとしたら、うまく夢だと自覚できるかもしれないし」

正直、僕にも策はほとんど思いつかなかった。だからせめて、あいつに会う時間を短くするためにも、僕は夜更かしを決めることにした。

「これは夢、これは夢……まあ、理屈ではわかってるんだよ」

僕はため息をついた。白い髪、そして赤銅色の肌。魔界の王子、ユタの姿だ。

そして対峙するは、典型的な悪魔の姿をした夢魔族。そう、夢の中で僕は再び彼と対峙していた。

夢魔族が放ってくる、幻覚——のはずの攻撃。それをこどごとく受け、負傷する。これらは本当に幻なのだろうか。思わず賢者の返事の方を疑ってしまう。

「ふふふ。ユタ王子よ、早いところ降参してはどうだ？ このままでは、お前を発狂寸前にまで追い詰めないとイケなくなる」

サディスティックな笑みを浮かべながら、夢魔族は決して攻撃の手を休めない。

降り注ぐ火の玉が皮膚を焼き、高速で飛来してくる槍が手足を貫く。熱い、そして痛い。幻だからか、受けた傷は一瞬で消えていくものの、痛みの残留で神経がすり減りそうだ。

せめて気を保とうと、「何てレトロな攻撃なんだ、このファンタジーめ」と毒づいてみせれば、拳銃を作り出して弾丸を撃ってきた。くそ、なかなかユーモアがあるじゃないか。

それらがすべて、夢を媒体にした幻覚にすぎないということを、僕も何とか理解はしていた。が、実感にまで至らない。すべての攻撃が本物に見えてしまう。

(夢の中の幻覚と、実際の現実の違いは違はずなんだ。その違いを自覚できれば、何とかなるかもしれないけど)

その方法がわからない。夢から覚めた後に待つ現実とは、どんなものだったっけ。

「何か、ヒントがあれば……」

色、音、匂い、何でもいい。現実を感じることができれば、夢と比較することができるのではないか。そうすれば、違いがはっきりとわかる——気がする。

僕がそこまで思考を進めた時。

「しょうがない、君には廃人になってもらうか」

「あ、嫌だな」

夢魔族の声に、僕は呆れたようにつぶやいた。生半可に夢だという意識があるので、どうも危機感がわからない。

奴が作り出したのは、大木を軽々と伐採できそうなチェーンソーだった。持ち手にエンジンがついている仕組みなのか、細いひもを引っ張ると、ドロンッという音を立てて全体が振動を始める。刃が回り始めた。

あんなので切り刻まれれば、いかに幻と言えども、想像を絶する痛みを体験することになるだろう。あいつの言う通り、僕は廃人になってしまうかもしれない。

「ちっ」

舌打ちして、反射的に飛び退いた。と、いきなり腕を掴まれる。両脇を見れば、チェーンソーを持つ奴と同じ顔をした夢魔族が、僕をがっしりと捕まえていた。

僕が戦慄を覚えた時、目の前に回転する刃が迫ってきた。そのまま鋭い痛みが首に触れたかと思うと、断続して、そしてすぐに永続的に僕を襲った。

「うわああああああっ？」

首が、首がチェーンソーで斬られる！ 僕は恐怖と、首に熱が食い込む感触に、パニックを起こしそうになっていた。

かろうじて頭の隅に残っている理性が、分析を開始している。このままでは、本当にまずい。痛みと恐怖でいつか神経が焼き切れる——でも、どうすればこの状況を打破できる？

その時だった。右手に温かい感触が生まれたのは。

「……様！」

誰かの声がかすかに聞こえた。同時に、僕の首から一切の痛みが消え、ホールドをかけてきている夢魔族も姿を消した。

「なっ……？」

チェーンソーを失った両手を見つめ、夢魔族が驚いた声を上げる。もっとも、驚いたのは僕も同じだ。右手の中にある温かみが、僕にこれらを夢だと意識させてくれたのだ。

しかし、それも一瞬。すぐに手の感触は曖昧なものになり、夢魔族は再びチェーンソーをその手に持っていた。再び僕に迫ってくる。

「驚かせやがって……夢の中で果てる！」

声を荒げて彼が飛びかかってきたところで——今度は世界が白く染まった。

「ち、タイムオーバーか」

夢魔族がそうつぶやいたのを聞き届け、僕は覚醒しようとしていた。

「ユタ様、大丈夫ですか！」

目を覚ますと、カーテンから白い光がこぼれてくるのがわかった。ああ、もう朝なのか。

傍らでは、サリナが例の寝間着姿のまま、僕の手を握っている。とても真剣で不安そうな顔だ。しかし、僕には右手のしっとりとした温もりが、何より印象に残った。

「ああ、これだったのか」

納得した。このサリナの手の感触が、現実の感覚を夢の中の僕に伝えてくれたに違いない。そしてその時だけ、僕は夢を夢だと実感し、夢魔族の能力を破ったのだ。

僕は身体を起こすと、汗ばんだ額を手の甲でぬぐいながら、なおも不安そうな顔をしているサリナに笑ってみせた。

「ありがとう、サリナ。おかげで助かったよ。そして、打開策が見つかった」

「え？」

「これで、夢魔族を倒すことができるかもしれない……でも」

僕は深刻な表情で、腕を組んだ。頭の中に不安が渦巻いているのがわかる。

その不安を言葉に表すと、次のようになった。

「足りない」

「……何がです？」

サリナが、きょとん、とした表情で尋ね返してきた。

再び夜が来た。夢の中で僕は、夢魔族が現れるのを待っていた。

一瞬とも、永劫ともつかない時間を経て、やがてそいつは現れる。

「おや？」

怪訝な表情を、その悪魔らしい青白い顔に乗せて。僕にはわかっていた、彼が訝しがるその理由を。

僕は薄く笑っていたのだ。

「何だ、今日はやけに余裕がありそうだな？」

「まあね」

「俺たちに降参する覚悟を決めたか？」

「まさか」

僕は笑みを浮かべたまま、昨日の夜と同じくユタへと変貌を遂げる。そして、左手の指を夢魔族に向けながら、右手を軽く胸の前に掲げた。

「今回は、自信があるんだよ。お前を必ず倒せるっていう自信がさ」

「ほう、大きく出たな」

僕の言葉が本気だと看破したか、敵も油断なく構えてこちらを見据えてきた。じろり、と目を動かし、やがて掲げた右手に目を向ける。

「それが自信の源か？」

「ああ、そうだ。これが夢と現実を繋いでくれる」

「ふん、誰かに手でも握ってもらっているのか。しかし、それでは夢は破れんぞ」

そして、夢魔族は大きな鎌をどこからともなく取り出した。両手で握りしめ、こちらに向かって走ってくる。

そいつが鎌を大きく振りかぶる姿勢を、実は僕は若干不安になりながら見ていた。作戦に自信はある。十中八九、この夢を夢と認識できるだろう。

ただ、問題が一つあって——さっきからその策が、発動していないのだ。今掲げている手は、今はただの右手でしかなかった。

「ちょっと、サリナさん頼むよ」

僕は懇願にも等しい思いで、目の前に迫りつつある鎌を見つめながらつぶやいた。

やっぱり、無理があったかな？

そう考えた、その時である。

「……来た！」

右手に、現実の感覚が訪れる。はっきりとした触感が、僕に意識の覚醒をうながす。

間違いなくこれは夢だ。

そう自覚した瞬間、僕の目の前の刃は姿を消していた。

「なにっ？」

「ふう、ぎりぎり間に合った。助かったよ、サリナ」

僕は右手を軽く開閉させながら、ここにはいないサリナに礼を言った。

本当、どれだけ感謝してもしたりないくらいだ——はは。

「馬鹿な、俺の能力が破られただと？」

「当たり前だよ、これは夢なんだから」

僕の声に、一切の迷いはない。そのことに気づいたのだろう、夢魔族は焦りの色を表情に浮かべると、「ちっ」と舌打ちをしつつ、両手を掲げた。

巨大な火の玉が、その上に生まれる。見ていて面白い。僕はあえて、その存在を認めることにした。

「くらえっ！」

炎の塊が、手から離れて僕へと飛翔し——ぶつかる直前で霧散した。

僕はわざとへらへら笑ってみせた。肩をすくめて、尋ねる。

「終わりかな？」

「くっ！」

完全に動揺した夢魔族は、僕をにらみながらわめき散らした。

「なぜだ！ いや、一体どうやったっ？ 手を握ってもらうくらいで、夢は破れるはずがない。それでは圧倒的に、『刺激』が足りないはずだ！」

「そう、足りなかったんだよ。だから工夫が必要だった」

昨日、サリナがくれた手の温もりは、夢魔族の持つチェーンソーを消すに至った。しかし、すぐにそれは効果を失い、チェーンソーは復活を果たした。

手を握られる程度では、夢をはっきりと自覚できないと僕も気づいたのだ。もっと刺激がなければ、夢を自覚できない。

だからといって、刺激が強すぎても問題があるだろう。例えば、現実世界で殴られれば、夢を夢だと自覚もできようが、それだとすぐに夢から覚めてしまう。

適度に刺激を与え、かつ夢から覚めない程度の「優しい」感覚が必要だった。

それは今、僕の右手の中にある。

「さてと、それじゃそろそろ終わりにしようか。何しろこの工夫、サリナにかなりの迷惑をかけているんだよね」

「……どういう工夫をしたんだ、貴様？」

「教える必要はないよ」

僕はそう断言する。

ふと、目を細めた。夢の中で曖昧だった現実の記憶が、少し戻ってきたのだ。

不快感を伴う黒い感情が、胸に広がっていく。

「そうそう思い出したよ……色々と小賢しいことをしてくれたんだよな、お前は」

「な、なに？」

「よくも……よくも僕の大切なクラスメートを、巻き込んでくれたな！」

ぶわっ、と自分の身体から高熱が立ち上るが理解できた。右手に生まれた炎は、その勢いを増

して火柱となる。

夢魔族が「ひいっ」と後ずさるのが見えたが——もちろん、手加減なんてしてやらない。

「お礼に苦しむことなく一瞬で殺してやる……………消えろっ！」

「う、うわあああああっ！」

そして。僕の左手から放たれた、白く輝く地獄の業火により、夢魔族の刺客は夢からも現からも、永遠にその姿を消すこととなった。

僕はベッドの上で、ゆっくりとまぶたを開いた。

夢魔族が消失した影響か、勝手に目が覚めたのだ。机の上の時計を、ちらりと見る。まだ午前二時にもなっていない。

「もう一回、寝るかぁ」

軽くあくびをしてつぶやいた、その時である。

「あのお」

遠慮がちな声が聞こえてきた。メイド服姿のサリナが隣に座っているのを思い出し、僕は慌てて顔をそちらに向けた。

「ああ、サリナ！ ありがとう、おかげで夢魔族に勝つことができたよ」

「お役に立てて何よりです。でも……」

サリナはどこか怒ったような、複雑な表情を見せていた。

ふにっと、右手に柔らかい感触が伝わってくる。

「は、恥ずかしかったですよ。いくらユタ様の頼みとはいえ、こんなこと」

「ごめん。でも、これしか思いつかなかったし、頼めるのもサリナしかいなかったんだ」

「むう。そ、そうですか？」

仕方ないですね。と、ぶつくさ言いながら、サリナは顔を赤くして伏せる。

僕の右手は、彼女の胸へと伸びていた。その大きなふくらみの上へと。

そう、手を握ってもらう程度では夢を自覚することができないと思った僕は、思い切ってサリナにこの方法を頼んだのだ。引き受けてくれて本当に助かった！

かくして、柔らかい、思春期の男子にとって刺激いっぱいのこの感触は、現実を夢の中へと運び込むことに成功したのである。

最初はなかなかこの感触がこなかったということは、サリナも躊躇していたのだろう。実際、年頃の女の子に取って過酷な要求をしたと自分でも思っている。

もっとも、サリナは普段から何かと、背中を流そうとするわ、自分の箸で僕に料理を食べさせてくれようとするわで、過剰気味に世話を焼いてくれていた。だから、八割くらいの確率で頼みを聞いてくれると、密かに計算はしていた。

いやはや、僕も魔界の王子としての風格が備わりつつあるものである。

「それにしても……」

ふと。僕は昨日の同級生とのやりとりを思い出し、憂鬱に息を吐いた。

顔を伏せていたサリナが、気遣わしげに尋ねる。

「どうしましたか？」

「いや。やっぱり、魔界には戻らないといけないなと思って」

夢魔族は倒すことができた。だが、結局のところ、クラスメートを巻き込んだ事実をそれで帳消しにはできないのだ。

僕は帰らなければならない。魔界へと。

「やっぱり、怖いのですか？」

「うん。正直、それもあるけど……魔界へ戻ったら、もうこの生活には戻れないんだろうなと思ったんだ」

人間としての生活。学校での授業や、友達との他愛ないやりとり。僕が記憶喪失だということで、気を遣ってくれた近所の人達とも別れなければならない。

そして、二度と会ってはいけないのだ。僕は人間「鎌井裕太」をやめ、魔界の王子ユタに戻らなければならないのだから。

そのことを考えると、少し虚しくなってきた。記憶を失ってまで僕が手に入れようとしたものは、結局なんだったんだろう。

「大丈夫ですよ」

ふと。何もかも見透かしたかのような顔で、サリナがつぶやいた。

「確かに一度は魔界に帰って見せる必要はあると思います。でも、こっちの生活がどうしてもいいのなら、またこっそりと戻ってくればいいのですよ。今度は、他の種族に気づかれないように、こっそりと」

「サリナ……」

「その代わりに、今度はちゃんと最初から私を連れてきてください。置いてけぼりは嫌です……だって、ユタ様のお世話、ちゃんと焼けないじゃないですか」

すがりつくような彼女の目に、僕は思わずうなずくのだった。

「ああ、うん」

そうだった。僕にはどこに行こうと、僕を健気に慕ってくれる世話役がいる。

魔界は怖いところかもしれない。この世界に来て得られるものがなかったのは、虚しいことなのかもしれない。

でも彼女が言う通り、いつかまた、この世界に戻ってこれるかもしれないし。サリナがいれば、魔界だって捨てたものじゃないかもしれない。

「サリナ、本当にありがとう。僕は本当、君に世話になりっぱなしだね。魔界の王子が、聞いて呆れるや」

「そんなことはありません。ユタ様は、いてくれるだけで私の支えになるんです。ユタ様の側にいることが、私の幸せですから」

僕を見つめてそう言うと、サリナはにっこり微笑んだ。

今はまだ来ていない、朝日のようなまぶしい笑みを。

……と。その笑みがすぐに消えて、彼女の顔は白い紙のようになる。

「でも、それはそれとしてですね、ユタ様」

「うん？」

どうしたんだろう、急に表情を変えて。

僕が訝しがる暇もあらずこそ。サリナは少し震えたかと思うと、はぁ、と拳に息を吹きかけた。

「いつまで胸を触っているんですか。いい加減に離してください！」

「あいだっ？」

真っ赤になった彼女の、希なる鉄拳制裁を頬に受け、僕はベッドの上に再び倒れ込むのであった。

王子と私とご主人様 広野未沙

あらすじ・登場人物

○あらすじ

キプルソフ家に居候を始めたルネ。縁が切れると喜んだレーアだが、ルネは毎日のように魔法の練習を邪魔しにくる。そんなある日、イストに誘われた紅葉狩りで、レーアたちは魔物に襲われてしまう。そこで、圧倒的な力で魔物を倒したルネをみて、レーアはルネが魔界の王子というのは本当かもしれないと思うのだった。

○登場人物

レーア・ブランデル

一七歳。フォルセル家の使用人。魔法の素質を信じて訓練の日々。

ルネフォールト＝ベルテルデ・アンテロイネン

通称ルネ。空から降ってきた少年。自称魔界の王子。現在は隣のキプルソフ家に居候中。

イスト・フォルセル

レーアが仕えるフォルセル家の長男。穏やかで誰にでも優しい。

第三話 夢には何かがやってくる

客室の掃除中。ふわあ、と大きなあくびをセルヤがしたとき、レーア・ブランデルは純粋に驚いた。

セルヤ・ハイリネン。レーアと同じくフォルセル家の使用人である彼女は、レーアのルームメイトであり、親しい友人でもあった。年はレーアと同じ十七歳。使用人歴もほぼ同じ。明るい金色の髪に、大きな空色の瞳が目を引きかわいらしい顔立ちをしていて、薄い金髪に平凡な容姿のレーアとしては羨ましい。

しかも、セルヤは、仕事が出来ると周りからの評価が高い。たとえば、一緒に掃除をすると、レーアがつい見落としてしまう隅などの汚れをきちんと指摘してくれる。

「どうしたの？ セルヤ。寝不足？」

思わずレーアは窓をふく手を休めて、床を磨いているセルヤに尋ねた。

「ちょっと、ね」

セルヤは、どこか眠そうな顔で微笑む。その間も手は動き続けている。

「珍しいね」

それがレーアの率直な感想だった。

セルヤは自己管理の意識も高い。夜を不毛な（と周りから評価される）魔法練習に費やし万年寝不足気味のレーアと違い、毎晩ほぼ決まった時間に就寝している。

「あまり夢見が良なくて。あと、レーア。手が止まってる」

「ごめん！」

セルヤの指摘に、レーアは慌てて窓を拭き始めた。

（夢見が良くない、か）

昨日、レーアが魔法練習から戻ったとき、セルヤはすでに眠っていた。そのときは、特にうなされた様子はなかったように思える。

夜中に目が覚めて、そのまま眠れなかった。そんなパターンだろうか。

まあ、そういうことは、誰にだってある。レーアだって例外ではない。むしろ、夢にうなされても決まった時間にきっちり起きられるセルヤはすごい。

そのとき、レーアは深く考えなかった。

「お前の屋敷、嫌な感じがする」

珍しく深刻そうな顔でそう言い放ったのは、隣のキプルソフ家の居候、ルネだった。

夜。誰もが寝静まる時間。レーアはいつもの通り、屋敷を抜け出して裏庭で魔法の練習をしていた。冬も近づいてきた。寒いので、紺色の使用人服の上に、上着を着込むことも忘れない。それでも時折背筋が震える。

一回呪文を唱える。やはり魔法は発動しない。さて、と気を取り直してもう一回。そう思ったところで、いつもの通り、ルネがやってきた。どういうわけだが、この少年、毎日のようにレー

アの魔法の練習を見に来るのだ。最初は迷惑極まりないと思っていたレーアだけれど、いつの間にかそれが普通になってしまっていた。

ルネ——ルネフォールト＝ベルテルデ・アンテロイネン。黒髪に黒い瞳。やや幼さが残るが、顔の造作は非常に整っている。黒づくめの格好を好む彼は、自称魔界の王子だ。

人間界に隣り合って存在する世界——魔界。強大な魔力を持つ生物が棲んでおり、彼らに力を借りることで魔法は発動すると言われている。

最初は疑っていたレーアだけれど、最近は、少しずつルネが魔界の王子だと信じてもいいかな、と思い始めている。幾度か彼の強大な力をこの目で見てしまったからだ。その力で助けられたことすらある。

堀の上からレーアを偉そうに見下ろすルネに、レーアは軽く眉をひそめた。

「嫌な感じ？ 何言ってるんですか」

たまに真面目な顔をしたと思ったら、よくわからないことを言い出す。

ルネは身軽に堀から飛び降りると、綺麗に着地をする。その姿勢のままレーアを見上げた。

「お前にはわからないのか？」

「わかりません」

レーアは即答した。ルネは、ゆっくりと立ち上がると、深々とため息をつく。まるで、レーアが超弩級の鈍感みたいな顔をしないでほしい。別にレーアは鈍感ではない。たぶん。

「まあ、人間にはわからないのかもしれないな」

そのバカにしたような口調に、少しかちんとくる。

「どんな風に嫌な感じなんですか？」

「……とにかく、嫌な感じだ」

「それじゃ、全然分かりません」

「ニュアンスで気づけ」

「無茶です。きちんと説明してください。魔界の王子なら」

レーアはじっとルネの黒い瞳を見る。ルネの背が高いので、首が痛くなるけれど我慢する。しばらくして、根負けしたようにルネは肩をすくめた。

（勝った？）

だが、そう思ったのも束の間だった。ルネがにやり、と不敵な笑みを浮かべる。

「それよりお前、魔法の練習はいいのか？ 今日とはしか、明かりをつける魔法を一回唱えたきりだよな」

ぎくり。レーアの背中に冷たいものが走ったのは、気候のせいだけではないはずだ。

「そ、それは、ルネが変なことを言い出すからじゃないですか」

「そうやって人のせいにするのか？ お前だって、早く魔法を使えるようになりたいんだろう？」

「だから、こうして頑張ってるんじゃないですか」

レーアには、魔法の素質があるという。しかし、レーアが魔法を使えたことは、未だかつてない。それでも諦めきれず、レーアはこうして毎日魔法の練習を続けているのだ。

「なのに、いつもルネが邪魔をしにくるから」

「じゃあ、今日はこれで退散するよ」

あっさりルネが引き下がったので、レーアは驚いた。

いつもだったら、思う存分レーアをからかい倒してレーアの堪忍袋の緒が切れるのを楽しみにしている節すらあるのに。

「ルネ？」

「まあ、お前もほどほどにするんだな」

その言葉を残して、ルネの姿が闇にとける。

「……」

まるで今さっきまでルネがいたことが信じられないほどの静寂が訪れる。ルネがいたあたりの草が踏みしめられているのが、唯一の痕跡。

(って、呆気にとられている場合じゃないから)

ルネの瞬間移動は以前にも見たことがある。今更驚くことじゃない。

大事なのは、ルネに邪魔されず、ゆっくり魔法の練習ができるということだ。少し寒いけれどよし、と気合いをいれようとして、レーアは気づく。

結局、何が「嫌な感じ」なのか、具体的な説明をしないまま、ルネは消えてしまったじゃないか。

「……うまく逃げられた」

まあ、ルネの戯言なんて気にははいられない。今は練習あるのみだ。

朝。はっと目が覚めて、レーアは慌てて時間を確認した。

昨日は、いつも以上に力を入れて練習したので、ベッドに入った時間も遅かったのだ。結局、魔法はぴくりとも発動してくれなかったけれど。

——ぎりぎりセーフ。と、ほっとしている場合じゃない。ベッドの上から飛び起きて、レーアは気づく。

セルヤがまだ眠っている。

この時間、普段のセルヤだったら、絶対に起きているはずだ。

(疲れているのかな)

昨日、掃除の時間、とても眠そうだったセルヤを思い出す。夢見が悪い、とか言っていたっけ。

(とにかく起こしてあげないと)

いつもと立場が逆。セルヤを起こすという行為が、なんだか嬉しかった。

「セルヤ。そろそろ起きないとまずいよ」

眠っているセルヤに声をかける。

しかし、セルヤは反応を示さない。規則正しい寝息が聞こえる。

もう一度名前を呼ぶが、やはり反応はない。レーアは大きく息を吸い込んだ。

「セルヤ！」

耳元で大きく叫んでみる。しかし、セルヤは眠り続けている。

(実はすごく寝起きが悪いタイプ?)

レーアは、セルヤがいつも自分をどうやって起こしているのか考える。

答え。毛布を引っぺがす。

秋も深まり、朝と夜はかなり冷え込むようになってきた。毛布をはぎ取られたら、寒さで一気に目も覚めるはず。

(申し訳ないけれど、でも、これも全部セルヤのため)

「せーのっ」

レーアは気合いを入れて毛布を掴んだ。一気に毛布をセルヤの体からはがす。

セルヤは起きる——ものだと思っていた。

「セルヤ？」

セルヤは何事もなかったかのように眠り続けている。ネル地の寝間着は、決して生地が厚いものではない。寒いはずだ。なのに。

絶対におかしい。そう思ったレーアは、メイド頭に報告するために部屋を飛び出した。

結局、その日、セルヤは目を覚まさないままだった。

今日も、セルヤは眠り続けている。これで、三日目だ。

仕事が一段落ついて、休憩時間。セルヤのことが気になって仕方のないレーアは、自室へと駆け戻る。セルヤの目が覚めた様子はない。こんこんと眠り続けている。

医者にも、セルヤが眠り続ける原因はわからなかった。疲れじゃないか。精神的なものじゃないか。そんなことを口にしていただけ、はっきりとした自信はなさそうだった。

レーアは、ベッドで眠り続けるセルヤを見つめる。いったい、どうしてしまったんだろう。眠り続けて起きない病なんて、レーアは聞いたこともない。

(セルヤ.....)

さすがにルームメイトがこんな状態では、夜の魔法練習もする気がおきない。魔法の練習も休んでいた。本当は、仕事だって放り出してずっとセルヤの側にいたい、使用人という立場である以上、そうもいかない。その代わりに、仕事の合間に、こまめに部屋に戻ることにしている。

こんこん。ノックの音がしたので、扉を開ける。

「イスト、様？」

そこに立っていたのは、フォルセル家の長男のイストだった。

太陽の光のような温かい金色の髪に、青空を思わせる青い瞳。柔らかな優しい顔立ち。イストは、女性使用人の憧れの的である。この春、パブリックスクールを卒業したイストは、仕事で家にいない両親に代わり家を守っている。いわばレーアたちの「ご主人様」だ。

イストは、一目で質がいいとわかるゆったりとしたシャツに、深い緑色のカーディガンを羽織っていた。

「ああ。よかった。レーアがいて。今は確か休憩時間だったよね」

イストがほっと胸をなで下ろす。

あまりのふいうちにぽかんとしてしまったレーアだが、はっと我に返った。

「ど、どうしたんですか。こんなところに」

使用人部屋は、主人の立場にある人間が入ってくるような場所ではない。

「セルヤは、まだ目を覚まさないの？」

イストが真面目な顔になった。レーアもセルヤの名前を聞くと、顔が暗いものになる。

セルヤが眠り続けていることは、当然、イストの耳にも入っている。率先して医者を呼んでくれたのも、イストだという。セルヤが心配で、わざわざ見に来てくれたのだろう。

「はい。全然起きる気配もなくて.....」

「間違いない！ この部屋だ！」

聞き覚えのある声に、レーアの言葉は遮られる。

(ルネ?)

間違いない。この無駄に偉そうな口調は。自称魔界の王子、ルネに決まっている。

「待っていてって言ったのに」

イストは右を向いて、ふうとため息をついた。廊下から聞こえる、こちらへ向かってくる足音。

「こんな嫌な感じがびんびんしているのに、おとなしくなどしてられるか」

レーアの視界にも、ルネの姿が飛び込んでくる。こちらを向いたルネと目が合う。相変わらずの黒ずくめの格好と、偉そうな態度。

随分久しぶりに会うような気がするの、魔法の練習をしていたときは、毎日顔を合わせていたからだろう。

「レーア。お前、どうしてここにいるんだ？」

心底疑問だ、と言った表情でルネが尋ねてくる。レーアは平静を心がけつつ答えた。

「ここは私の部屋ですから」

「魔法は諦めたのか？」

最近、魔法の練習をしていなかったことを言っているのだから。

「そういう気分じゃないんです」

「まあ、そっちの方が、俺の安眠も守られていいんだが。それにしても」

ルネは露骨に眉をひそめた。

「よくお前、こんな嫌な感じのところにいられるな」

「全然意味がわからないんですけど。確かこの前も同じようなこと言ってましたよね」

「ああ。だから、わざわざ俺がフォルセル家まできてやったんだ。この嫌な感じが、こちらまで侵食してくると困るからな。数日で消えると思ったんだが、妙に強くなっているし」

そう言って、ルネは胸を張った。

自称魔界の王子は、感覚で物を言うことが多いから、こちらにはさっぱり意味がわからなくて困る。

「だから、私には言っている意味がさっぱりなんですけど」

「で、ルネ。結局、何かわかった？」

レーアとルネの不毛な会話に割って入ったのは、イストだった。

「この部屋から嫌な感じがするのは間違いないんだよね」

「ああ」

「それは、セルヤ——この部屋に住むもう一人の女の子が目を覚まさないのとの関係があるのかな」

そのイストの言葉に、レーアははっと顔を上げた。レーアには思いつかなかった可能性。

「目を覚まさない？」

ルネが顔をしかめる。なんとなく、嫌な予感を覚える。

セルヤが眠り続けているのは、魔界の何かが原因なのだろうか。

「心当たりがあるんですか？」

レーアはルネにおそろおそろ尋ねる。

「とにかく、本人を見せてくれ」

ルネが、つかつかと部屋に入ってくる。レーアも、イストも止めなかった。

狭い部屋だ。もう一人の少女、セルヤの存在は、すぐにルネにもわかったようだ。

「彼女か」

ルネは、セルヤの枕元に立つ。

「レーアよりかわいいな」

ちらり、とレーアに視線を向け、聞こえよがしに呟く。

「余計なお世話です。真面目にみてください」

「わかってるよ」

はあ、とレーアはため息をつきたい気分になった。せっかく見直しかけたのに！

それでも、今、頼れるのはイストしかいないことも確かなのだ。医者だってわからなかった。セルヤが眠り続けているのが、魔界の何かが原因だというなら、余計に。

たぶん、わらにもすがりたい、というのは今みたいな気持ちを表すのだろう。

レーアは、いつのまにか祈るようにぎゅっと手を組んでいた。

部屋の入り口に立ったイストも、神妙な面持ちでルネを見つめている。

ルネは、まるで熱でもはかるように、セルヤの額に手を当てた。セルヤは反応を示さない。ただ眠り続けるのみ。

部屋の空気が、緊迫感に包まれる。何となく暑い気がするの、単に密度の問題だけだろうか。

「ルネ。何か、わかりましたか？」

ルネの硬い表情は、普段そういう顔を見せないだけに不安をあおる。沈黙に耐えきれなくなり、レーアは静寂を破った。

「どうして、セルヤは起きてくれないんですか？」

うるさい、だの、気を散らすな、だの、そういう言葉が返ってくる事も覚悟した。

そっとルネがセルヤの額から手を離す。

「——夢を食われている。予想通りだ」

「夢？」

レーアとイストの声が揃う。

「ああ。ニムソという夢を糧にする化け物だ。それが、彼女にとりついている。嫌な気配の原因はこれだな。大方、たまたま迷い込んだ夢が気に入った、というところだろう。最近、彼女が眠そうにしていたことはないか」

レーアは数日前のセルヤのあくびを思い出す。それが前兆だったのだ。

「このままだと、どうなっちゃうんですか？」

「まあ、ニムソが飽きるまで夢を食べ続けるだろうな。それがいつまでなのか、俺にもわからない。問題は、ニムソが飽きるまで、彼女の体が持つか」

「……」

レーアは背筋が冷える思いがした。

急にセルヤの体が頼りないものに見える。

「それを、やめさせることはできないのかな」

「強硬手段しかないな」

イストの問いに対するルネの答えは明快なものだった。

「まあ、俺は、ニムソがまき散らす気配が大嫌いなんだ。これ以上、ここに居座られても不愉快

快だ」

にやりと不敵に笑うルネは、とても頼もしい。

「行くぞ、レーア」

「へっ」

急に自分に矛先が飛んできて、レーアはぼかんとした。

「私、ですか？」

てっきり、ルネが一人で退治にでかけると思っていたのに。

「そうだ。夢なんてなーんもないただ広いところに、俺一人で行かせるつもりか？ 暇つぶしのお供が必要だろう」

「お供って……」

文句を言いかけたレーアだけれど、はっと思い直した。ここでルネのご機嫌を損ねてみたりしたらどうなるだろうか。

レーアにはニムソとかいう魔物を倒す力はない。眠り続けるセルヤの体は徐々にやせ細り、最後にはきっと死が待っている。

そんなのは、絶対に嫌だ。

「行きます！ 行かせてください」

レーアは宣言した。セルヤのためなら、ルネの暇つぶしくらい、いくらでも付き合う。

「でも、どうやって夢へ入るんですか？」

「愚問だ。俺は、魔界の王子なんだぞ。人間の夢に潜入するくらいたやすい」

自信に満ちたルネの言葉。そして、それはたぶん本当なのだろう。

「ルネ、盛り上がっているところ悪いんだけど」

「どうした。イスト」

ルネがイストの方を見る。イストは言った。

「僕も、連れて行ってくれる？」

「本当に何も無いんだね」

ぐるりとあたりを見回したイストが呟く。レーアも同感だった。

ここは、セルヤの夢の中だ、という。

ルネがよく分からない言葉で呪文を唱えたら、全力で上に引っ張られるような力を感じて、そして気づいたら先ほどまでいた自室とは全く違った空間にいた。

白いもやのなか。それが一番しっくりくる表現かもしれない。

夢というから、てっきりセルヤのしている夢の光景が映し出されているのかと思った。

「人間は、いつも夢をみているわけではないからな。夢を見ているときだけ、この世界は形を変えるんだ」

ルネの解説に、レーアはなるほどとうなずいた。

「それにしても、この何も無い空間から、どうやってそのニムソとかいう化け物を探すんだい？」

イストの疑問はもっともだった。

「待つ」

「それ、本気ですか？」

「ああ。やつは夢の中の異物の気配に敏感だ。そのうち気づいてやってくるだろう。大好きな夢に邪魔な存在は消したいはずだからな」

「それって、いつやってくるかわからないってことですか？」

レーアの口調が思わず高くなる。こんな何も無い空間でひたすら待つなんて、苦行に等しい。ただでさえ、気が急いているというのに。

「君にしては、随分気が長い話だね」

イストが苦笑している。

「まあ、夢の中は、いくらでも暇つぶしができるからな」

(ちょっと話が違う！)

暇つぶしにレーアを連れてきたのは、どこの誰だ。文句を言いたいのを、レーアは必死でこらえる。外でじりじりと待っているより、状況がわかって有り難いと思おう。

「たとえばどうやって？」

イストの問いかけに、ルネは笑う。

「簡単だ。——城よ！」

ぱちり、とルネは指を鳴らした。

にわかには信じがたいことが起こった。

レーアの目の前に、いきなり大きな城が現れたのだ。高い塀に囲まれた石造りのそれは、どこかおどろおどろしい雰囲気を出している。

「これはなんですか？ ルネ」

「魔界での俺の家だ」

どうだ、と言わんばかりにルネは胸を突き出す。

「そうじゃなくて、どうしてこんなものがいきなり現れたんですか？」

「これは夢だからな。ある程度、強く願えば、こうして何でも創り出すことができる」

「そうなんですか？」

「ただ、ここで手に入れた物は、あくまで夢だからな。実体はないから、この世界の外に持ち出すことはできないぞ」

「この城と、ニムソとかいう化け物が現れるのと、どう関係があるんですか？」

「目立つ物を出しておけば、嫌でも目につくだろう？」

確かにそうかもしれない。何もない空間にある城。嫌でも視界に入ってくるだろう。

「それに、中に入れば、暇もつぶせる。魔物がやってきたとき、身も隠せる。いいことづくめじゃないか？」

ルネの言うことは随分いいことばかりのように聞こえる。けれど、相手がルネだからこそ、レーアは警戒している。

「随分大きな城だね」

イストが感心している。ほうっと感嘆の息まで聞こえてきそうだ。

「まあな。案内してやろうか。宝物庫や衣装室は特にすごいぞ。そうだ」

ルネは、ぽんと手を叩くと、レーアをちらりと見た。嫌な予感しかしない。

「レーア。お前のその格好、見飽きたから、たまには別の服に着替えさせるのもいいな」

レーアはいつも使用人の制服である紺色のワンピースを着ている。

「これは制服なんです！ 第一、いつ魔物が襲ってくるかわからないんですよ」

セルヤが眠り続けているのに、レーア一人で着飾るという気分ではない。

「それは面白そうだね。僕も、レーアのいつもと違う姿、見てみたいな」

「イスト様！」

ご主人様まで話にのるとは思わなくて、レーアは悲鳴じみた声を上げる。

「ごめん。確かにセルヤのことがあるから、レーアはそんな気分になれないよね」

イストの心底申し訳なさそうな表情に、逆にレーアの方が慌ててしまった。

「べ、別に、イスト様に謝っていただきたいわけじゃなくて……」

「要するに、魔物を倒したあとでなら、何をしたいっていいってことだろう？」

「……それは、そうですけど」

「だったら……」

ちらりとレーアに視線を送ったあと、ルネがイストの方に向き直った。

「イスト。勝負をしないか？」

「僕と勝負？」

ルネの話の矛先がイストにいったので、レーアは拍子抜けする。意味ありげにレーアを見たのは一体何だったんだろう。

「内容によるけど。どんな？」

「単純だ。城のてっぺんまで目指す。賞品は……レーアでどうだ？」

「ちょっと待ってください」

聞き捨てならない発言だ。

「なんで私が賞品なんですか！ 第一、そんなことをしている間に、魔物が現れたらどうするんですか！」

しかし、レーアの抗議をまるっと無視して、ルネは続ける。

「勝った方が、城の衣装室で好きなようにレーアを着飾ることができる。夢の世界にいるだけ着る分なら、特に問題はない」

「ちょっと待ってください！ 私は、そんな不安定な服は着たくありません。第一、そんなことしている時間は……」

「大丈夫だ。選んだ服は、俺の魔力で実体化してやる。魔物をさっくり倒したあとなら、お前だって文句ないだろう？」

(まあ、それなら、マシ……かなあ、って、そんなわけない)

レーアは慌てて首を振った。賞品扱いの時点で十分ひどい。

「どうする？ イスト」

どこか挑発的にルネが言う。イストは、小さく息を吐いた。

「いいよ。ただ、君の得意な瞬間移動はなしだよ」

(イスト様まで！)

「ああ。勝負だからな。じゃあ、そういうわけで、レーアお前にはゴールに先に行っていてもらおう」

「ちょ、ちょっと。私の意見は全て無視なんですか？」

「お前は使用人だからな。それに、対して悪い話でもないだろう。じゃあ」

ぱちり、とルネが指を鳴らす。

抵抗むなしく、レーアの周りの風景が、いきなり変わった。

「……まったく強引なんだから。何よ、私が賞品って」

どうやらレーアが飛ばされたのは、城にある塔の一番上らしい。ドアにつながる一部を除いては、展望台のようになっていて、屋根もない。レーアの胸くらいの高さまでの石製の塀にぐるりと囲まれている。広さはレーアの部屋くらいだろうか。休むために塀と同じ材質の椅子が置いてある以外は、何もない。

(着飾らせる、ねえ)

てっきりレーアも勝負に巻き込まれるのかと思っていた。正直、自分を賞品にして、ルネやイストが得をすることは思わない。いや、ルネの場合、レーアがいやがる素振りを見て楽しみたいだけかもしれないが。

(まあ、考えたって仕方ないか)

すでに「賞品」としてレーアはゴールまで送られてしまっている。ここでぎゃあぎゃあ文句を言ったって、ルネに聞こえるわけでもない。たぶん、すでに勝負は始まっているのだろう。ここから元の場所に戻るよりも、ルネたちがくるのを待った方が賢いはずだ。

レーアは外に視線を向けた。塔だけでもかなりの高さがあるらしく、下を見てレーアは少し後悔した。石で出来た建物の屋根が、想像以上に遠い。落ちたら絶対に死ぬ。

(それにしても、本当に何もない世界だわ)

ひたすらに広がる白いもや。こんなところにずっと一人でいたら、気が滅入ってしまいそうだ。早く、ルネでもイストでもいいから（どちらかというといスト希望だが）、ここまで来てほしい。レーアは願う。

とすん、と椅子に座る。石でできた椅子はひんやりと冷たい。

(セルヤは大丈夫かなあ)

レーア一人が焦ったからといって、魔物が現れてくれるわけではない。それはわかっているけれど、考えずにはいられなかった。

セルヤにはお世話になりっぱなしだから、少しは恩を返したい。

そんな状況で、勝負だなんて。二人とも、一体、何を考えているのだろう。勝負がついたら、少なくともルネには抗議しよう。

ふと、後ろに気配を感じる。ルネかイストがたどり着いたのだろうか。距離感がわからないから、それが早いか遅いかもレーアには判断できない。

(違う)

レーアはすぐにそれを否定した。とてつもなく嫌な気配がする。

レーアはおそろおそろ振り返った。

「で、ルネ。どういうつもりなのかな」

レーアが消えた後。イストはゆっくりとした口調でルネに尋ねた。

レーアをゴールに無理矢理送り込んだものの、二人の間に競争を始める気配はない。

「レーアだけ先に城に飛ばして、何をたくらんでいるの？」

口調こそ穏やかだが、根底にはどこか鋭さがある。ルネはぽりぽりと頭をかいた。

「ああ。やっぱりイストは気づいたか」

「話の進め方が強引だったからね。それに、君の場合、レーアを賞品にするより、レーアも勝負に巻き込む方を好みそうだったから」

凶星だったのか、ルネは苦笑する。

「まあ、レーアは一種のおとりみたいなものだ。ニムソの廃除の対象は二種類ある。他のニムソか純粋な異物か。そこに俺みたいな魔界の人間は含まれない。魔界の人間が夢を食わないことは、ニムソ自身知っているからな。だが、人間なら異物を認識する」

「だから、わざわざレーアを夢に連れてきたってこと？」

イストの口調に剣呑なものが混ざるが、ルネはどこ吹く風だ。

「ああ。別に人間なら誰でもよかったんだが、レーアが一番都合がいいからな。ああ。イスト、お前は安心していいぞ。俺が側にいるかぎり、ニムソはお前には気づかないから」

「別に心配はしていないよ。それより、レーアだと都合がいいっていうのは？」

「あいつは、行動がわかりやすい。おとりという言葉は悪いが、これが一番手っ取り早くニムソを倒す方法なんだよ。ニムソを早く倒すのは、レーアだって望んでいたことだろう。それに」

眉間にしわを深く刻んだイストに対し、ルネは力強く言う。

「心配はいらない。俺とレーアは、ある意味つながっているからな」

「どういうこと？」

怪訝な声で問いかけるイストに、ルネは不敵に笑った。

「ピンチになったら、絶対あいつは魔法を唱えるだろう？」

(なんなのよこれ！)

レーアは思い切り叫びたい気分になっていた。じわじわと扉まで追い詰められる。

いつのまにか、レーアの後ろに現れていたのは、毛むくじゃらの化け物だった。毛足の長い熊とも言えればいいだろうか。長い毛の間から、白く光る二つの目。よだれにまみれた口元は、ぬらぬらと光り、鋭い牙が見える。

そしてそれは、いきなりレーアに向かってきたのだ。

突然の事態をよく把握できていないが、とにかく、相手が怒っているということだけはわかる。そうでなかったら、いきなり問答無用で襲ってくることなどしないだろう。

もしかして、これが、セルヤの夢に棲み着いたという魔物なのだろうか。

セルヤを異物だと判断して、廃除しようとしているのだろうか。

(なんでよりによって今、現れるの？)

ルネさえいれば、こんな魔物、あっという間に倒れたはずなのに。

魔物が出たらどうするんだって言ったのに！ レーアは自分の運の悪さを呪った。

悲鳴を上げたいけれど、のどがからからでうまくいかない。

魔物がレーアに襲いかかってくる。レーアは必死でよけた。転がるようにして姿勢を下げる。鋭い爪は、レーアの頭上すぐで空を切った。心臓が縮み上がる。もつれる足で、必死に逃げる。

だが、もともと広い空間ではない。すぐに魔物は距離を詰めてくる。

(落ち着くのよ)

レーアは自分に言い聞かせる。ルネは、ゴールであるこの場所に向かっているはずだ。きっとすぐにここまでたどり着くだろう。

それまで、体力はもつだろうか。足のあちこちに擦り傷が出来ている。どこかにぶつけたのか肩も痛い。それに、さっき攻撃をよけられたのは、非常に幸運だったからとしか思えない。

それでも、レーアは逃げ切らなくてはならない。こんなところで命を落とすたくはない。なら、どうすればいいか。

思いつくのは——魔法しかなかった。たぶん、この前、森で魔物に襲われたときのよう、使えない可能性が高いのだろう。それでも、少しでも可能性があるのなら、やらないという選択肢はレーアにはなかった。

必死だった。ただひたすら、魔法が使えるようにと願う。

「魔の向こうにすみし者よ。この声を聞け。目の前の敵に炎の矢を向けろ！」

万に一つの可能性を信じて、レーアは叫ぶ。

直後。

レーアの腕ほどの太さもある炎の矢が生まれる。そして、それはまっすぐに魔物へと向かっていった。そのまま魔物につきささると、あっという間に炎が魔物の腕を包んだ。

魔物から、ぐおう、という苦悶のな叫びが聞こえる。

ちりちりとした熱が、レーアの頬まで伝わってくる。

(——え？)

レーアの思考は止まる。目の前の光景が、信じられなかった。

(魔法を、使えた?)

今まで、比喩ではなく何千回も唱えてきたはずの呪文。でも、一度たりとも魔法が使える気配はなかった。何も起こらなかった。

魔法の素質がある。そう言われたものの、それを信じていいのか、自分でも迷うときがあった。

それなのに。

目の前の魔物は、炎を消そうと必死になって強く腕を振っている。

「うそ」

自分でも気が抜けたと思う声がこぼれる。目尻が妙に熱い。涙が出そうだ。

「魔法が……つかえた」

じわじわと内側から喜びがあふれてくる。しかし、それも束の間だった。

「ぼんやりするな」

ふいに覚えのある上から声が振ってくる。ついでに後頭部を軽く突かれる。——ルネだ。

「ルネ」

振り返ると、そこには背筋を伸ばしたルネが偉そうに立っていた。イストも一緒だ。

「まだやつを倒したわけじゃないぞ」

確かにルネの言うとおりのだ。魔物の腕を包んだ炎は、徐々に勢いを失っている。レーアに向けられる敵意は、気のせいにかふくらんでいるように思える。

レーアたちをかばうようにして、ルネが一步前に入る。

「レーア、大丈夫」

心配そうなイストに、レーアはこくりとうなずいてみせた。それからルネの背中に視線を向ける。

ルネは魔物相手にもひるむことなく、堂々としている。魔界の王子、と信じてしまうような威厳めいたものが、そこにはあった。

「おい。そのニムソ！ まったく。お前が嫌な気をまき散らすおかげで、繊細な俺はここ数日ずっと不愉快だったぞ」

炎も消えてきたからだろうか。魔物がゆっくりとこちらを向いた。魔物に言葉が通じるかはわからない。けれど、ルネが挑発している、というのは理解できたらしい。

けれど、いくらルネが魔物を怒らせようが、レーアに恐怖感はない。ルネの実力を知っているから。イストもそうなのだろう。落ち着き払っている。

「おとなしく魔界にとどまっていれば、こんな目に遭うこともなかったのにな」

さんざん文句を言って満足したのか、ルネが手を前に突き出す。

「炎よ！」

ルネの声に呼応して、魔物のいる場所に、さっきのレーアの魔法とは比べものにならないほどの炎が吹き上がる。

圧倒的すぎる力。肌がひりひりするくらいの熱が、こちらにも伝わってくる。

それは一瞬にして魔物の体を焼き尽くした。

「退治完了」

石の床には黒い焦げ跡。降り積もる灰。それがニムソの残したものだった。

レーアはルネの背中に声をかける。

「……これで、セルヤは大丈夫なんですか？」

「ああ。すぐに目を覚ますだろう。俺たちもこの夢の主が目を覚ます前に帰るぞ」

ルネがレーアたちの方を向く。ルネの漆黒の瞳と視線がかちあった。

「そういえば、勝負はどうなったんですか？」

レーアが景品になっている勝負。しかし、レーアはニムソから逃げるのに夢中で、二人がいつここに到着したのか見ていなかった。気づいたら二人とも近くにいた。

「ああ。すっかり忘れていた」

ルネがぼん、と手を叩く。

「ニムソという邪魔者が入ったしな。今回の勝負はなしでいいんじゃないか」

「ルネがそう言うなら、僕もそれでかまわないよ」

それが二人の一致した見解だったら、レーアとしては異論を挟むこともない。

ルネがやけにあっさりしているのが少し気になるけれど、ここで口出ししても墓穴を掘るだけのような気がした。

「レーアも文句はない、と。じゃあ、戻るか」

ルネがぱちりと指を鳴らす。

来るときも一瞬だったが、また、戻るのも一瞬だった。気づけば、見慣れた使用人部屋にレーアたちはいた。

「セルヤ」

レーアはベッドへと駆け寄る。セルヤは規則正しい寝息をたてて、眠っていた。

「セルヤに声をかけてみて。レーア」

イストに言われて、レーアはうなずく。それから眠っているセルヤに向き直る。

「セルヤ。起きて」

普通の大きさを話しかける。ぴくり、とセルヤが反応を示した。

「セルヤ」

軽いうめき声を上げながら、セルヤがゆっくりと目を開けた。

「……レーア？」

「よかった！ ずっと目を覚まさないかと……」

レーアは目ににじんだ涙を慌てて指でぬぐった。

「レーア、どうして泣いているの？」

セルヤがぎょとんとしている。

「起きたみたいだね」

「イスト様！ どうしてこちらに」

さすがにご主人様が使用人室にいるとは思わなかったのだろう。セルヤは飛び起きた。自分が寝間着のままであることに気づき、慌てて毛布を胸まで引き寄せる。

「大事な使用人が眠り続けているって話を聞いてね」

セルヤは申し訳なさそうに身を縮める。いまいち事情が飲み込めていないセルヤに、レーアはセルヤが眠り続けていたことを説明する。本人には全く自覚がなかったらしい。目を丸くしていた。

それから、セルヤは、部屋の隅で退屈そうに立っているルネに目をとめる。

「……レーア。あの方は？」

「ええと……」

なんと説明したらいいのだろう。レーアが迷っているとイストが助け船を出してくれた。

「隣のキプルソフ夫人の甥っ子さんだよ。セルヤが眠り続けている原因を突き止めてくれたのは彼なんだ」

「そうなんですか？」

セルヤは少し躊躇ったようだったが、すっと立ち上がると、ルネの元まで歩く。その足取りはしっかりとしたものだった。

「その、ありがとうございます」

セルヤはルネの瞳をしっかりと見て、礼を言う。

「別に利害が一致してただけだからな」

ルネがそっぽを向く。

「ルネは、意外と照れ屋だよな」

イストがレーアにささやきかける。レーアは大きくうなずいた。

その夜。レーアは、いつもの裏庭で久しぶりの魔法練習を行っていた。

初めて使えた魔法。感覚を忘れないうちに、確かめておきたい。

さすがに炎の魔法を使うわけにはいかないの、空を飛ぶ魔法にする。

「魔の向こうにすみし者よ。この声を聞け。私に見えない羽を与えよ」

ふわり、と体が持ち上がるはず、だった。なのに、何も起こらない。

「どうして？」

確かに魔法を使えたはずなのに。レーアは力なく立ちすくむ。

「疑問に答えてやろうか？」

上からルネの声が降ってくる。はっとレーアは顔を上げた。

「ルネ！ 何かわかるんですか？」

「魔法の原理をお前は知っているか？」

すたっと華麗に着地するルネ。

「確か、自分と相性のいい魔物に呼びかけて、その力を借りるんですよ」

そしてその相性のいい魔物というのが誰しも必ずいるとは限らない。それは生まれながらの素質のようなものだ。

「その通りだ。それともう一つ。いくら相性のいい魔物に呼びかけても、その魔物が必ず力を貸してくれるわけではない」

考えたこともなかった可能性だった。呼びかければ魔物は力を貸してくれるものだと思っていたから。

「そしてもう一つ。お前の場合、その相性のいい魔物というのが——」

まさか。レーアは目の前に立つルネの顔を見上げた。

「俺だったというわけだ」

レーアの魔法の練習に必ず顔を出していたルネ。思えば、ほとんどの場合、ルネが姿を表したのはレーアが呪文を唱えてからだった。時間を変えても、だいたい同じタイミングでルネはやってきた。

それは、レーアが呪文を唱えるという行為は、レーアがルネに呼びかけるという行為と同じだったから。

「つまり、今まで私が魔法を使えなかったのは、すべてルネが私の要求を無視していたからですか？」

魔物に声は聞こえていたのだ。本当に、レーアには魔法の素質はあったのだ。

「そういうことになるな」

悪びれもせず答えるルネ。

レーアはどっと疲れを感じた。今までの自分の努力はなんだったんだろう。

「……どうした？」

「今日のあれは、つまり、ルネの気が向いたってことですか？」

「ああ。さすがにあそこで力を貸さなかったら、お前の命が危うかったからな」

「そうですか……」

レーアは、はあと大きく息を吐き出した。

まさか、自分と相性のいい魔物が、こんな性格の悪い奴だとは思わなかった。レーアが魔法をつかえるかどうか、すべてルネの気分次第なのだから。

「暗くなる必要はないぞ。王族と相性のいい人間なんて、滅多にいないんだから、胸を張っていい」

「全然嬉しくないんですけど……」

明日から、魔法の練習、どうしよう……。使えない原因がはっきりしてしまった以上、練習をしても無駄な気がした。夢ががらがらと崩れていく。

「まあ、お前が努力しているのを見れば、俺の気も変わるかもしれないぞ」

まるでレーアの考えを読んだように、ルネはにやりと笑った。

くるくる 水島朱音

あらすじ・登場人物

○あらすじ

地元を離れ県外の大学に通っていた小堀明日花は、高校のとき同じ部活だった君島尚輝から久々に連絡を受ける。彼曰く、卒業制作として書いていた未完成のはずのリレー小説が、何故か母校の図書室にあったのだという。その謎を解き明かすため、明日花たち図書部のメンバーは尚輝に呼び出された。

○登場人物

小堀明日花

女子大生。現在は県外で一人暮らしをしている。

君島尚輝

大学四年生。存在しないはずの本を見つけた本人。

小山内美優

図書部の部員の一人だった少女。高校卒業を前にこの世を去った。

第三話 小堀明日花の話

窓の外の景色はとどまることなく移ろい続け、やがて大きな建物はほとんどなくなり、一面の田園風景が広がり始める。

帰ってきたんだ、と明日花は思った。

進学のために県外に出て以来、年に数回しか帰ることのなかった地元。都会の喧騒にすっかり馴染んでしまったけれど、やはり故郷の風景を見ると心が安らぐのを感じる。

時期外れの帰省に、車両の中は空席が目立つ。話し相手もいない。そうになると、頭は自然に今から会う相手のことを考える。

会いたいのか、会いたくないのか。

正直に言えば、後者の気持ちの方が、強い。

(だって、やっぱり、怖い)

憂鬱な気分になり、窓に額をコツンと当てる。

数年ぶりに聞いた声。尚輝は、あの完成しなかったはずのリレー小説が本になっていると、おかしなことを言った。

もちろん、そのことも気になる。どうして、あるはずのないものが。

けれどそれ以上に、明日花の心に巣食うのは、部員たちに会うことの後ろめたさだった。

組んだ両手に、力を込める。

怖い。

(でも、もう、逃げたくない)

四年前のあのとき、全ての歯車が狂ったのは、自分のせいなのだから。

「でも、尚輝が図書部ってというのは意外だった」

高校に入って最初の夏休み。

図書部の顧問である坂本のところに入部届を出しに行った明日花は、それに付いてきてくれた尚輝とともに図書室へ引き返していた。

「あ？ 洸とおんなじようなこと言うな」

黒い眉をしかめ、少しムツとしたような表情を作る尚輝が幼く見えて、明日花は思わず小さく笑った。

「大体想像つくなあ」

「全く、どいつもこいつも……」

夏休みの静かな廊下に、二人の足音と声が反響する。遠くから、吹奏楽部の演奏が聞こえてくる。

「でも、俺にしてみたらお前の方が意外だった」

「え？ 私？」

「本とか好きそうなタイプには見えねえ」

悪意なく言っているのだろうけど、なんとなく馬鹿にされているような気になった。なるほど、尚輝も明日花や洸に言われたとき、同じような気分だったのだろう。もちろん、本心から腹が立っているわけではないけれど。

「普段は漫画とか雑誌とかしか読まないねえ」

「……そんなんでよく図書部入ろうと思ったな」

言われて、少し考えてみる。

「確かに、本はあんまり読まないんだけど。でもほら、あの、あれ」

「どれだよ」

「ノートに書いてたじゃん。お話」

そう言って、手でノートを開く仕草を見せると、尚輝は納得した。

「ああ、リレー小説」

「そう、それ！　すごく面白そうだったから」

明日花が図書部に興味を持ったきっかけは、それだった。

偶然、尚輝が英語のノートと間違えて渡してくるまで、図書部の存在すら知らなかったが。

話を作ったり、空想したりすること自体は好きなのだ。昔から。

「あれさ、小山内がやろうって言い始めたんだ」

「あの髪の長い子だよ」

「そうそう」

あの日、尚輝と一緒にいた子だ、と頭の中で思い返す。

一度さらっと部員を教えられたけれど、まだはっきりと全員の顔と名前を覚えているわけではない。入学してすぐに友人となった尚輝は別として。

「小説家になりたいってさ」

「へー、なんか似合う！」

いかにも文学少女、といった感じの大人しそうな子だった。頭も良さそうだし。

部長の眼鏡をかけた男の子も、いかにもって感じだったなあ、と思い返す。

(あれ、もしかして私、場違い？)

今更ながらに不安になり、尚輝をちらりと見上げた。

視線に気づき、「どうした？」と尋ねられる。

「うーん……なんていうかさあ、本当に『面白そう』って理由だけで入っちゃったけど、良かったのかなあって」

「なんで？」

「う……だって、自分で言うのもなんだけど……私、頭良くないし……。すごく場違いな、気が……」

思った通りのことをそのまま告げると、尚輝は首を傾げた。

「面白そうって思ったんなら、場違いも何もねえだろ」

心の底からわからない、といった風に尚輝が言うものだから。

ああ、本当に、どうでもいいことなんだなあ、と。そう思えた。気にしているのは、本当に、明日花本人だけなのだろう。

「それに、『面白そう』ってのは一番嬉しい入部理由だからなー。みんな喜ぶだろうよ」

「……尚輝も？」

「お？ まあなー！」

そう言って尚輝は、言葉通り、嬉しそうに笑った。

入部した一番の理由は、『面白そう』だったからだけど。

(私、尚輝がいなかったら、きっと入部しなかった)

そう思ったのは、もう少し後のことだった。

尚輝の言った通り、場違いだと思ったのは明日花だけだったようで、図書部の部員は彼女を温かく迎え入れた。打ち解けるのは、あっという間だった。

図書部に入ってから、明日花は今まで以上に本を読むようになったし、部員たちがそれぞれ自分の好きな本をすすめてくれるので、色んなジャンルにも興味が持てるようになった。

新しい物語の世界に足を踏み込むのが楽しいことを知る。一つの物語でも、人によって違う解釈の仕方があることを知る。それを教えてくれたのは、図書部のみんなだった。

そんな図書部のみんなで、この学校に一つの本を残そうと。そう決めたのは、三年生の二期の、最初の日。その日から、卒業制作と題したりレー小説の制作が始まった。

リレー小説は、順調に進んでいた。それぞれ受験勉強やバイトはあるものの、誰もが形になるものを残したいという同じ思いで、ノートの上に物語を綴っていた。

誰もが、当たり前のように完成するものだと思っていた。完成させるのだと。

それは、明日花も同じだった。

手の甲で、自分の額にコツンと触れた。

(わかんない)

けれど、家を出る前に測った時は平熱だった。大丈夫だろう。上がってはいないはず。

三日前に高熱が出て、それからずっと休んでいた。久々の学校である。咳はまだおさまらないけれど、体調はすっかりよくなっている。

三時間目の授業。そろそろお腹が空いてくる時間。

明日花の鼻と口を覆うマスクを見て気遣っているのか、今日はどの教師にも当てられない。ありがたい。

(……次、古文かぁ……)

あまり得意な教科でない。しかも、明日花が休んでいる間にも授業があったため、置いていかれている可能性が高い。

(ノート、誰かに見せてもらおう)

そう考えたところで、美優の顔が頭に浮かんだ。

うんうん、と一人で勝手に納得する。今までにも何度か美優のノートを見せてもらっているが、彼女はとても綺麗にノートをとるので、見やすく、わかりやすいのだ。

成績でいえば、はっきり言って美優より洸の方が上である。けれど洸の場合は、難しい単語が多く使われていたり、彼にしか理解できないようなメモ書きがあちこちにあったりする。

勉強を教えてもらうなら洸だが、ノートを見せてもらうなら美優だ。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り、教師が教材を片付け始めると、教室の中も一斉に騒がしくなる。

明日花は席を立つと、美優たちのAクラスへと急いだ。

Aクラスは次の授業は体育のようで、教室の中から体操着の入った鞆を持った生徒たちが続々と出てきた。

美優も、もう行ってしまっただろうか。

人が途切れたところを見計らって教室の中を覗き込むと、ちょうど美優がこちらに向かってくるところだった。

「美優一」

マスクを少しずらして名前を呼ぶと、彼女はすぐに明日花に気づき、駆け寄ってきた。

「明日花ちゃん……！ 良かった、今日は学校来られたんだ……？」

「うん、もう平気一。ところでさ、美優にちょっとお願いがあって」

顔の前で両手を合わせ、片目を瞑ってみせる。

美優はきょとんと首を傾げた。

「何？」

「古文のノート、今日持ってない？」

「古文？ うん、あるよ」

「ホントにっ？ 良かった、ちょっと見せてほしくて……次の授業中に書き写しちゃうから」

「ふふっ、ゆっくりでいいよ」

「ありがとー！ ホント助かる！ 美優のノート、綺麗で見やすいんだもん！」

そう言うと、照れたように美優はそっと下を向いた。

(こういうところ、女から見ても可愛いんだもんなあ)

ちょっとずるい、とさえ思ってしまう。頭が良くて性格も良くて可愛いなんて。

明日花がそう思っていることなど、考えもしないのだろう。美優はふと時計を確認して、焦ったような表情を見せた。

「ごめん、次体育だから急がなくちゃ。ノート、机の中にあるから勝手に取ってきていいよ」

「わかった。机どこー？」

「えっと、窓側から二列目の、後ろから三番目」

「了解っ！ 体育がんばってねー！」

手をひらひらと振って見送ると、彼女もありがとう、と手を振り返してから教室を出て行った。

教室の中には、すでに数人しか残っていない。

(えーと……窓側から二列目の、後ろから……あそこかな)

美優の席に近寄り、机の横にかけてある通学用の鞆が彼女のものであることを確かめる。それから、椅子を少し移動させてしゃがみ込み、机の中を覗き込んだ。

予想していた通り、不必要なものが入っておらず、綺麗に整頓されている。

(ノート……うーん……いっぱいあってわかんない……)

表紙に科目名が書かれているわけでもない。とりあえず、一番上のものから順番に中身をさっと見て、古文のノートを探し当てることにする。

一番上のノートを手にした時、それがよく知ったものであることに気付いた。表紙に書かれた『図書部』の文字。

めくってみると案の定。それは、卒業制作のリレー小説が書かれたノートだった。

(今、美優の番だったんだー)

なんとなく気になって、最新のページを開いてみた。美優の前は尚輝、その前が明日花だ。彼は、明日花の書いた物語を、どんな風に繋げたのだろう。

しかし。その内容は、最後の方に綴られていた文字を見た瞬間、明日花の頭から消し飛んだ。パタンッ。

思わず、勢い良くノートを閉じてしまった。

(え？ え？)

心臓が、ものすごい勢いで早鐘を打っている。

(今、見てはいけないものを、見たような、気が)

意味もなく、周りをきょろきょろと見回してしまう。もちろん誰も、明日花のことを見てなどいない。というよりも、すでにAクラスの生徒は全員、更衣室へ向かっていた。教室の中に取り残されたのは、明日花ただ一人だ。

それを確かめてから、明日花はもう一度、今度はゆっくりとノートを開いた。

最新のページ。その一番下。小説として書かれた文章とは、明らかに違う。ノートの罫線に沿わない形で、数行の短い言葉が、綴られていた。

尚輝の字で。

(.....なに、これ.....)

誰がどう見ても、それは明らかな告白文。

『好きです』と、はっきりと書かれている。そしてその後に、明日の放課後、校舎裏で待っていると。

「.....っ！」

衝動的に。

明日花は、そのノートを手にしたまま、Aクラスの教室を飛び出していた。

頭の中は酷く混乱していたが、習慣なのか、足は自然と自分のクラスまで戻ってきていた。教室に入って数秒後に、授業開始のチャイムが鳴る。

自分の席につき、教師が入ってきて、授業が始まる。明日花は、閉じたままのノートの裏表紙を、無表情にじっと見つめ続けた。

(.....『好き』って.....書いてあった、なあ.....)

好き。恋愛感情。

尚輝が、美優を。

(それから.....)

それから、なんと書いてあったらうか。

確かめるすべは目の前にあるのに、明日花はどうしても、もう一度そのノートを開く気にはなれなかった。

(.....校舎裏)

そうだ、校舎裏で待つと、そう書いてあったのだ。

(.....ああ.....)

紅葉のジंकウスだ。ちょうど今が時期なので、最近よく女子同士の会話に出てくる、あのジंकウス。

校舎裏にある紅葉が赤く色づいているときに、その木の下で告白し、成功すれば。やがて二人は結婚する。

明日花も、リレー小説の中でそのジंकウスをネタに出したところだ。ちょうど、今は紅葉が綺麗に染まっているから。

だから、尚輝は校舎裏を指定したのだろう。

(.....本気、なんだ)

そもそも、冗談で告白なんてするような男じゃない。それは、明日花だってよくわかっている。

明日花だからこそ、よくわかっている。ずっと見ていたのだから。

けほっ。マスクの中で、咳がこもる。

(いつからだろ)

いつから、尚輝は美優のことが好きだったのだろう。

彼と友達になったのは、きっと明日花の方が先だったと思う。

(.....なんで、気付けなかったかなあ)

教師の声と、板書する音と、時折微かに聞こえてくる雑談。

けほけほと、後から後から、押し出すようにして咳がこみ上げてくる。

(ずっと、見てたのに)

シャツをかきむしるようにして、胸元を押さえる。それでも、咳はおさまらなかった。

「ねえ、ちょっと.....大丈夫？」

隣に座る女子生徒が、心配そうに声をかけてくる。けれど、答えることができなかった。

苦しい。

(……いやだ……)

きつく閉じた目の端に、涙が滲んだ。

全部全部、止まらない咳のせいにしてしまいたかった。

(尚輝を、とらないでよ……)

誰かが背中を優しくさすってくれるのを感じながら、明日花は咳の波が過ぎ去るのを待った。

幸い、熱がぶり返したというわけでもなさそうだった。クラスメイトや教師に心配をかけてしまったのは申し訳なかったが、保健室に行くほどでもない。そのまま六限目の授業も受けて、放課後を迎えた。

鞆を肩にかけ、図書室に向かう。

尚輝や美優には、会いたくない。でも、どうしてもはっきりと確かめなければ、気が済まなかった。

図書室に入ると、部員はまだ誰も来ていなかった。

明日花は定位置になっている隅の机に向かうと、入り口を背にして窓際に座る。そして鞆の中から、数学の教科書とノートを取り出した。

休みの間に出されていた分の課題である。結構な量がある。急いで片付けてしまわなければ。

鞆を開けたとき、ちらりと例のノートが視界に入ったが、必死に意識の外に追いやった。

教科書を開き、ざっと問題に目を通す。この辺りは基礎のようだから、何とかかなりそうだ。

ページを行ったり来たりして公式を確認しながら、問題を解いていく。四問目にさしかかろうとしたところで、背後から声がかかった。

「明日花、久しぶり」

柔らかい声に顔を上げると、いつの間に来ていたのか、洸が鞆を肩から下ろしたところだった。

「洸！ 久しぶりー！」

ほっとした。

最初に来てくれたのが、洸で良かった。いつも通りに振る舞うことができた。ちゃんと笑顔を作れた。

「風邪、もう大丈夫なの？」

「うん。まだちょっと咳は出るけど、平気平気ー」

Vサインを作ってみせると、洸は「良かった」と言って微笑んだ。

そうだ。洸は、知っているのだろうか。彼は尚輝と、小学生の頃から友人らしい。もしかしたら、彼になら話しているのかもしれない。

「……ねえ、洸」

「うん？」

斜め前の席に座り、鞆から筆記用具を取り出している洸が、手を止めて明日花の方を向いた。

「ちょっと、聞きたいことあるんだけどさあ……」

「……何？」

手元のシャーペンを指先でくるくると回す。

「……あのね」

決心してようやく切りだそうとした、その明日花の声を遮るかのように、背後から声がかかった。

「よお」

背筋が、強張った。

会いたく、なかったのに。

「千尋と美優は？」

「今日は来られないって」

尚輝と洸が言葉を交わしている。しかし、明日花は顔を上げることができなかった。尚輝の顔が、見られない。

シャーペンをきつく握り締め、睨みつけるようにして教科書に視線を落とした。

(そうだ、課題、集中しなきゃ)

集中、集中。頭の中で繰り返す。

目の前の空いている席に尚輝が座っても、明日花は動揺する心をひたすら押さえつけていた。平常心。いつも通りに。

「風邪、まだ治ってないのか？」

なるべく話したくはなかった。しかし、声をかけられれば無視するわけにもいかない。

「ちょっとだけね。うつさないから安心してよ」

しまった、と思った。少しだけ、いつもより冷たい声が出てしまったかもしれない。

しかし尚輝は気付かなかったのか、普段と変わらない様子でノートが必要なら見せてやる、と言ってくれた。

それから少しの間、会話が途切れた。尚輝の意識が、明日花から逸れたことに安堵して、少し気を抜いていた。

だからだろう。その次に声をかけられた時は、思わず顔を上げてしまった。

「あれ、なんであんな展開になっちゃったわけ？」

話が唐突すぎて、彼が何を言っているのかすぐにはわからなかった。

(展開、展開、展開……)

頭の中で何度かその単語を繰り返してみても、ようやくピンと来る。

「ああ、リレー小説の話？」

そう、と尚輝は頷いた。

「いや、面白いから良いと思うんだけどさ」

なんで、か。

集中できないと思い、明日花は教科書を閉じた。

(それを、聞きますか)

理由など、尚輝がよくわかっているだろう。自分だって、紅葉のある校舎裏を告白の場所に指定したくせに。

そう思いながら、窓の外に視線を向けた。けれど、ここからはあの赤が見えない。

「今ねえ、紅葉がキレイなの」

あのジンクスを使いたかったのだ、ということを手短かに説明したが、尚輝は理解していないようだった。

ジンクス？ と瞬きを繰り返す尚輝に、あれ？ と明日花も彼を見た。

「……この学校に伝わるジンクスの一つだね。校舎裏にある紅葉の木の下で告白して、成功すれば二人はやがて結婚するっていう」

それまで黙っていた洸から注釈が入り、そこでようやく尚輝は納得した風に頷いた。

(あれ……ちょっと待って)

今の反応から察するに。

「……尚輝、知らなかったの？」

「お？ ああ、初耳だ」

つまり、尚輝は全く偶然に、あの場所を指定したということか。

肩の力が抜けかけたが、いや違うと思い直す。だからといって、尚輝が美優に告白しようとした事実は変わらないのだ。

そのまま、話題はジンクスについての考察に流れていき、その後も取り留めもない会話を交わしているうちに、部活の時間は終わっていた。

「今日、報告書の担当って誰だっけ？」

「あ、私」

挙手すると、尚輝から白紙の報告書を手渡される。

「よろしくな、明日花」

「うん」

鞆を肩にかけ、尚輝が席を立つ。

明日花はてっきり、二人ともそのまま帰るものだと思っていた。

「あ、僕はもう少し残るよ」

けれど、洸は椅子に座ったまま、尚輝に向けてそう言った。

「お？ そうか？」

「うん。明日花が、休んでた間の課題、見てほしいらしいから」

にっこりと、相変わらず人の良さそうな笑顔を浮かべる洸。

(え?)

けれど明日花は、彼が淀みなく言ってきた言葉に、呆然としていた。

(私、そんなこと言ったっけ?)

それは、見てもらえる方が助かるけれども。

明日花は何も言えずにいたが、尚輝は洸の言葉で納得したらしい。

「そっか。じゃ、また明日ね」

「うん。バイバイ」

互いに軽く手を振り合った後、尚輝だけが図書室を後にした。洸は、相変わらず明日花の斜め前の席に座っている。

「……何か、言いかけてたでしょ？」

明日花が尋ねる前に、洸は答えを返してきた。尚輝に嘘をついてまで、彼一人だけを帰らせた理由。

聞きたいことがある。

尚輝が図書室に来る前に明日花がそう言ったのを、覚えていてくれたのだ。その続きは結局、尚輝が来たことにより遮られてしまったけれど。

「……」

明日花は鞆ごと隣の席に移動した。洸が正面にくる位置に。

「……あのさあ」

他の生徒は誰もいない。二人だけの図書室の中。

それでも明日花は、声を潜めた。

「尚輝ってさ……美優のこと、好きなの？」

机の上で軽く組んだ指を、落ち着かなくそわそわと動かす。

洸は、きょとんと目を丸くした。話の内容が、予想外だったのだろう。しかし、すぐに目元を和らげた。

「そうだね。そう言ってたよ」

「……そっかあ」

洸が言うなら、間違いないのだろう。彼は尚輝の昔からの友人だ。

これで、はっきりした。尚輝は美優が好きだ。ノートに書かれたあれは、間違いなく美優に向けた告白だった。

「……なんで、そんなことを？」

洸が小さく首を傾げる。

彼になら、相談してもいいだろうか。なんとなく、何でも話を聞いてくれそうな、そんな雰囲気洸は持っている。

明日花は鞆から、あのノートを取り出した。何も言わず、閉じたままのノートを彼に差し出す。

表紙の『図書部』の文字を見て、

「リレー小説？」

と尋ねた洸に、こくん、と頷く。

「これが、どうかした？」

口で説明するよりも見てもらった方が早いだろう。そう思い、最新のページを見るよう促した。

まだ疑問の色を表情に浮かべながらも、明日花の言う通りに一番新しく書き込まれているページを開く洸。

そして、例の告白を見つけた彼の目が、驚きに丸く見開かれた。

「……これ……」

「……尚輝が、書いたってことだよね。美優に向けて」

リレー小説のバトンの順番を考えれば、それが美優に向けられた告白であることは、誰にでもわかる。

しばらく洗はノートを見つめていたが、やがて何かに気付いたように、顔を上げて明日花を見た。

「でも、なんで明日花がこのノートを持ってるの？」

う、と言葉に詰まり、手元に視線を落とす。

それこそが彼に聞いてほしいことであり、突かれたくない痛いところでもあった。

「……美優に、ねー。ノート借りようと思ったの。古文の」

「うん」

「……そしたら、そのノートが机に入ってた、たまたま目について……小説の続きが気になって、覗いちゃったの」

ありのままを話した。洗は相槌を打ちながら聞いてくれている。

「そしたら……それ、が書いてあって……。びっくりして、思わず持ってきちゃった」

「びっくりした、だけ？」

はっとして、洗を見た。

彼は、まっすぐに明日花を見ている。

(あ……)

その目で、気付いた。

(洗、知ってるんだ)

尚輝の気持ちだけじゃない。

話したことがないはずの明日花の気持ちまで、彼は見抜いていた。

(……意外と、鋭いんだなあ)

なんとなくだが、そういったことには疎いと思っていた。これまで、部活のメンバーでそういった話をしたことがなかったせいかもしれないが。

肩から力が抜けた。知っているのなら、取り繕う必要もない。

明日花の醜い感情も、きっと見抜かれている。

「……どうすれば、いいかなあ」

こてん、とだらしなく机に寝そべった。

机の、少し低い温度が頬に気持ちいい。

「どうすればって？」

「ノート」

頭上から降り注ぐ洗の声。明日花は、そっと瞼を閉じた。

「……何も見なかった振りをして、美優に返すのが一番良いと思うよ。穏便に済ませたいなら」

「ん……だよねえ」

洗の意見は、正しい。明日花だって、それが一番良いと思う。

けれど。

(返したく、ないなあ……)

尚輝の告白が、美優に伝われば。その返事次第で、二人の関係は大きく変わってしまう。

それは、明日花が最も避けたいことだった。

(ヤな性格)

自分が一番よくわかっている。

美優は、きっとこんなこと考えたりしないだろう。あの子は優しく、可愛くて、良い子だから。好きな人の恋愛だって、きっと健気に応援するに決まっている。

そんな女の子だったら、明日花も尚輝に好きになってもらえただろうか。

「……ねえ」

顔を伏せ、瞼を閉じたまま、洗に声をかける。

「尚輝って、なんで美優のこと好きなの？」

少しの間、考えるような沈黙があった後、返事があった。

「……あえて、明確な理由をあげるとするなら、『夢があるから』かな」

「……夢」

「そう。ちゃんとした目標を持ってるの、すごいと思うって。そう言ってた」

夢。目標。

美優は、明日花にないものばかりもっている。

(敵わないなあ)

くすくす、と笑いが零れた。到底、敵わない。

「あーあ……」

ひとりごとのように、ため息を言葉に乗せた。

「……美優ってさあ、可愛いよね」

いつも思っていた。羨ましいと。

明日花はあんな風に、素直で可愛らしい女の子にはなれないから。

「私もあんな風に、なりたかった、なあ……」

「……明日花も、可愛いよ」

「ふっ。……ありがとー」

気を遣ったのだろう。洗が優しい言葉をかけてくれる。それがただの慰めでしかなくても、明日花は嬉しかった。

瞼を開き、のそりと上半身を起こす。

洗は、心配そうに少しだけ眉間に皺を寄せている。

(……ほんと、優しいなあ)

手ぐしで髪を整えながら、大丈夫だと言葉にする代わりに、笑ってみせる。

「洗みたい人、好きになれたら良かったな」

そうしたら、心穏やかな、優しい恋愛ができたかもしれない。

明日花の言葉に、洗は何も言わず、ただ困ったように曖昧に微笑んだだけだった。

基本的に、明日花は日付が変わる前には就寝する。夜更かしは肌に良くないから。

けれどその日は、いつまで経っても睡魔がやってこなかった。既に布団に入ってから、二時間近く経とうとしている。

寝よう寝ようと思うのに、意識は常に一点に引き寄せられる。

電気を消した部屋の中、明日花は仰向けに寝そべっていたベッドから身を起こした。机の上に置いた通学用の鞆。しばらくそれを凝視していたが、やがてベッドから降りる。

机に近づき、デスクスタンドをつけた。暗闇に、明かりがともる。

鞆を開け、一冊のノートを取り出した。パラパラとめくり、一番新しいページを開く。

『何も見なかった振りをして、美優に返すのが一番良いと思うよ』

洸の言葉が脳裏に蘇る。そうだ、それが一番良い。明日花自身も、既にその決意は固めたはずだった。

けれど。

明日花は続けて、鞆の中からペンケースを取り出した。さらに、その中から消しゴムを。

「……」

魔が差した、としか言いようがなかった。眠れなくて、暗闇の中、ずっと思いを巡らせていた

。

尚輝への気持ち、美優への劣等感、今ならまだ間に合うという、自分勝手な判断。それらがぐるぐると脳内で渦巻いて、ぶつかり合って、明日花の行動を引き起こした。

明日花は指先に力をこめ、ノートに書かれた尚輝の告白を、消しゴムで消した。跡も残らないよう、念入りに。けれど、ページを破ってしまわないよう、慎重に。

その作業を終えたとき、ずっと引き結んだままだった唇を開き、思い切り息を吐いた。

文字を消している間、明日花は自分でも気付かないまま、ずっと呼吸を止めていたようだった

。

荒い呼吸を何度か繰り返した後、ようやく罪悪感が襲ってきた。

(やってしまった)

けれどもう、消えてしまった。消してしまった。美優に伝えられるはずだった告白は、伝わることなく消えた。

(やってしまった)

でも。

これで。

(今までどおりの生活が送れる)

好きになってもらえなくてもいい。友人でもいい。

ただ、尚輝が誰かの『特別な人』にならなければ、それで良かった。

(安心した)

ふっと、笑みにも似た安堵の息を零し、明日花はノートとペンケースを鞆にしまった。

ようやく、眠れそうだった。

翌朝、登校してすぐに、明日花はAクラスに向かった。

「美優！」

ドアのところから美優を呼ぶと、彼女はすぐに明日花に気づき、それから何やらごそごそと鞆を探した後、一冊のノートを持って駆け寄ってきた。

「おはよう、明日花ちゃん」

「おはよー。あのね、昨日借りたノートなんだけどさあ」

そう言って、手にしていたノートを差し出した。表紙には、『図書部』の文字。

「間違えて、部活のノート持ってっちゃった」

「うん、古文のノートの代わりにリレー小説のノートがなくなってたから、そうかなあって思ってたの」

くすくすと笑いながら、美優が差し出したノート。それこそが、昨日明日花が借りるはずのノートだった。

「昼休みにそれ読む予定だったから、その時に気づけたら良かったんだけど……運悪く先生に呼び出されちゃって。結局、気づくのが家に帰ってからになっちゃったんだ。ごめんね」

「ううん！ 間違えた私が悪いんだし！」

それに、美優が昨日の昼休みの時点で気づいていれば、明日花がああ告白を消すことは出来なかったのだし。

手にしたノートを交換する。

明日花はそれを、どことなく不思議な気持ちで見ている。

「……ありがとー！ じゃあ、また放課後にね！」

「うん、また部活で」

足早に、明日花はAクラスを後にした。

(大丈夫)

今までの生活が続いていくだけだ。

自分にそう言い聞かせながらも、明日花は胸のどこかが苦く疼くのを感じていた。それは、その言葉が願望でしかないことを、心のどこかでわかっていたからだろうか。

後になって思えば。

『伝わるはずだったもの』が『伝わらなかった』ことで、今までと変わらない関係が続いていくと。

どうして、一瞬でも、本気でそう思うことができたのだろうか。

その日の放課後。尚輝は部活に来なかった。

洸も予備校で欠席していたため、出席メンバーは女子三人。千尋と美優が、貸し借りした本の内容について話しているのを聞き流しながら、明日花は尚輝のことを考えていた。

今頃、彼は一人で待っている。校舎裏で。来ることのない相手を。

ツキン、と胸が痛んだ。

その痛みに対し、何を今更、と内心で自分をあざ笑う。そうなるように仕向けたのは、明日花自身だというのに。

「……明日花ちゃん？」

意識を窓の外に向けていると、美優から声がかかった。はっとして二人の方に顔を向ける。

「えっ？ 何ー？」

「ううん、なんでもないんだけど……なんか、ずっとボーッとしてるから」

美優が、心配そうに眉を寄せている。千尋もこちらを見ているが、表情が乏しいため感情は読み取れない。いつものことだ。

「ごめん、なんでもないんだー。気にしないで！」

そう言って、本当になんでもないように笑ってみせる。美優はまだ納得していない風だったが、それ以上は何も追求してこなかった。

そして、その日を境に。尚輝を中心として、部内の雰囲気は明らかに変わってしまった。

まず、尚輝が部活に顔を出さなくなった。最近では部員の欠席も珍しくなかったため、一日や二日の欠席では特に誰も気にしなかった。

けれどそれが三日になり、予備校にも通っておらずバイトもしていない、これまで最も出席率の良かった彼がこうも続けて顔を出さない日が続くと、流石に部員たちの間に疑問の色が漂い始める。しかも、学校には来ているとなれば、当然だ。

とはいっても、明日花もその情報は洩に聞いただけで、尚輝には全く会っていない。わざと、避けている。

彼はきっと、美優にふられたと思っている。呼び出した場所に彼女が現れなかったのだから、そう思い込んでも無理はない。だから、部活に顔を出せずにいる。

そんな彼に対し、どんな風に振る舞えばいいのだろう。

(だって、私のせいだ)

尚輝が部活に顔を出さなくなったのは、間違いなく明日花のせいだ。

結果として、尚輝は明日花が思っていた以上に傷ついたということになる。明日花が自分の見当違いに気付いたのは、この時点だ。

いつも通りの生活など、送れるはずがなかった。

一週間が過ぎた頃から、ようやく尚輝は部活に顔を出すようになった。けれど、美優と顔を合わせようとしなない。

怒っているのだろうか。呼び出しに応じなかった彼女を。

どうしても気になってしまい、明日花は自然と二人の様子を伺うようになった。美優はよく、尚輝に何か言いたげな視線を送っている。それに対し、尚輝は一切の無視を決め込んでいるかのように、彼女と全く目を合わせようとしなかった。

(どうしよう)

取り返しのつかないことをしてしまった。

そのことに気づくのは、あまりにも遅すぎた。

「……ここ、矛盾してる」

「え、どこ？」

「ここの台詞。前に出てきた台詞と違うこと言ってる」

千尋が指さした箇所を覗き込む。

「前って、どこ？」

「確か……この辺」

「んー……あー……ホントだ」

ページをさかのぼり、該当の箇所を見つけて頷いた。

今日の部活の出席者は、明日花と千尋の二人だけである。千尋は、今の状態の部活メンバーの中で、明日花が最も気軽に話せる相手だった。

尚輝や美優は言うまでもなく、明日花は洸も裏切ったことになる。彼の忠告を、聞かなかった。せっかく、相談に乗ってくれたのに。

彼らと顔を合わせる度に、罪悪感に襲われる。自業自得以外の何物でもないが、明日花はそれが辛かった。

だから、今こうして千尋とリレー小説についての談義を交わしている時間は、久々に『部活』を楽しんでいるといえた。

「……これくらいかな、気になったのは」

「じゃあそこだけちょっと書きなおすねー」

「うん。修正したらあたしに回して」

「……え？」

「え？」

きょとん、と顔を見合わせる。

「あれ？ 順番違くない？ 私の次って、尚輝でしょ？」

「あ……そっか、明日花にはまだ言ってなかったのか」

独り言のように呟いた後、千尋は一瞬だけ苦いような表情を浮かべた。しかし直後にはもう平然とした顔を明日花に向けたので、もしかすると、気のせいだったのかもしれない。

「順番、変わったんだ。あたしと尚輝が入れ替わった」

「え……」

千尋と、尚輝が。

(えーと、それは、つまり……)

これまでは、明日花が尚輝に回し、尚輝が美優に回していた。そして、美優が洸に、洸が千尋に。それが、入れ替わるということは。

(……美優と、接触しないためだ……)

尚輝が美優とのバトンの受け取りを避けるためには、明日花か千尋、どちらかに順番を代わってもらわなければならない。

(……そこまで、徹底して避けるの……?)

これじゃあ、修復のしようがない。

「……なんで？」

「ん？」

「なんで、順番入れ替わったの？」

理由を知っていながら、あえて尋ねてみる。千尋は、尚輝から何か聞いたのだろうか。

けれど彼女はふいっと顔をそらし、そっけなく返事しただけだった。

「なんでだろうね」

その日から、一週間も経たないうちに。

美優が、事故でこの世を去った。

車内のアナウンスが、次に到着する駅名を告げる。

(あと二駅、か)

過去のことを、思い出したせいだろうか。

胃の辺りが、急激に重くなる。気持ち悪い。

(.....もしかして、バレた、かなあ)

電話では何も言われなかったが、もしかしたら、あの時の明日花の行為に、気づかれたのかもしれない。

(今更?)

あるいは、もっと、もっと前に気づかれていた可能性もあるけれど。

どちらにせよ。

(怒られる、かなあ)

それだけでは済まないかもしれない。恨まれても仕方がない。特に尚輝には。

明日花はそれを恐れて、美優の死後、ことさら図書部の部員を避けた。取り返しがつかない、どころじゃなかった。明日花のしたことは。

(私が、全部壊した)

楽しかったあの場所を。大好きだった仲間たちを。あんな風にしてしまったのは、明日花だ。だから。

(もう、逃げない)

遅すぎたけれど。あれからもう、四年以上の月日が流れてしまったけれど。

これ以上、自分のしたことから逃げたくはなかった。何を言われても、どう恨まれても、全て受け止めるつもりで帰ってきた。

美優にはもう、謝ることすらできないけれど。

(.....ねえ、美優)

電車の向こう、遠い空を見上げる。

(私ね、美優にすごく嫉妬して、勝手に敵視したり、しちゃったけど)

でも、それでも。

明日花にないものをたくさん持っていて、優しく、可愛くて。そんな美優のことが、羨ましくて。

(大好き、だったんだよ)

見上げた空の青色が滲む。

つ、と涙が頬を伝った。

そのとき。窓際に置いていた携帯電話が、メールの着信を告げて光る。開いてみると、懐かしい名前がそこにあった。内容は、たった一言。

『ごめん、少し遅れるかも』

絵文字も何もない、簡素な文面。四年前から変わらない。前に一度、「もうちょっと可愛いメール打ったら？」と言ったものの、「あたしがそんなの送ってきたら気持ち悪いだろ」と一刀両断されたことがあり、それ以降は何も言わなくなったのだった。

わかった、と返信した後、あれ？ と疑問に思った。

(なんで私なんだろ)

主催者、という言い方は少しおかしいかもしれないけれど、この集まりを呼びかけたのは尚輝だ。そちらに連絡がいくのが普通ではないかと思うのだが。

浮かび上がった疑問は、車内に流れだしたアナウンスによって頭の隅へと追いやられた。降車するため、そう多くない荷物をまとめ始める。

再会の時は、すぐそこまで迫っていた。

審判部な面々 諸星崇

あらすじ・登場人物

○あらすじ

日下部公平は、全国大会出場経験もある元エースピッチャー。しかし、肩の故障で野球をあきらめざるを得なくなった。進学先で公平は、「審判部」を率いる風間凜と出会う。あらゆる競技の審判を務める部活で、公平はスポーツをはじめ、さまざまな競技や種目に、審判として関わることとなった。

○登場人物

日下部公平（くさかべ こうへい）

審判部の部員。元野球少年で、スポーツ全般が得意。大好きな野球に、審判として関わる道を選ぶ。

風真凜（かざま りん）

審判部の部長。判断力に優れ、つねに威風堂々としている強気な女性。致命的な「ルール音痴」。

第3話 祝福はアナログで

1 コミュニケーション・ツール

部屋の片隅に集まった男たちが、真剣な顔で言葉を交わす。

「ここでこいつが、見張りを殺す」

「その前に毒をまかれるんじゃないか？ こっちが死ぬぞ」

「遠距離から狙撃すればやれるだろう」

「爆弾のほうが効率いいって」

「音がするじゃないか。気づかれる前に皆殺しにしないと」

屋敷の図面を前に、彼らはありとあらゆる侵入ルートを考察した。正面に立つ見張りをどうやり過ごすか。裏口は安全か。相手の武器はなにで、どの程度の性能を持っているか。こちらの持ち物で使えるものはなにか。

いっさいの妥協はない。ひとつの判断ミスが、自分たちの運命を決めるのだ。

「……なあ、オレとこいつ、ここで手榴弾を受け渡しできないか」

ふとした提案に、男たちの目の色が変わった。

「！ ナイス。それは話が変わる」

「こいつ、殺せるな」

「そうなるここちの手が空くから、一気に攻め込める」

手詰まりになりかけた作戦が、一気に展開する。一同の間に殺気がよみがえった。アイコンタクトを交わし、彼らは音もなく、それぞれの配置につく。

準部は万端、勝算は完璧だ。合図に合わせて突入すれば、敵は全滅。彼らは勝利を確信した。

だが、そこに唐突に、冷水が浴びせかけられた。

「……甘いね、みんな」

ただひとり、話し合いに加わらなかった男が、口角をつり上げている。メガネの奥で、彼は不敵に笑った。

「その位置は危ないって、前にも警告したのに」

青ざめる一同を、蛍光灯を反射したレンズがなめるように見渡した。

おもむろに手が伸びる。引き抜いた「それ、を、彼は全員に見せつけるように机にたたきつけた。

「必殺カード、『死の光線』！ 円盤から照射された光線で君たちは全員、死亡した！」

『げっ、げえええーっ!?!』

放課後の部室に、少年たちの平和な悲鳴がこだました。

「負けたー！」

「ちくしょー。強えよ、木星人！」

「このラウンドをしのげば勝てたのにー」

テーブルの上に色とりどりのカードとため息とがばらまかれる。室内は緊張感から解放され、放課後のゆったりとした空気に包まれた。

公平（こうへい）もゲーム部の部員たちにならって、背もたれに背中を預ける。激しく回転していた頭が、ようやく休息を得た。

「どうだった、日下部（くさかべ）くん。おもしろかった？」

最後に公平たちを虐殺したメガネの少年が、にこやかに話しかけてくる。興奮冷めやらず、公平は大きな声でそれに答えた。

「いやあ、すげえおもしろかった！ こんなゲームあったんだな。知らなかった」

机の上には、郊外の廃屋を描いたボール紙のボードが広げられている。全体が細かな線で無数のマス目に区切られて、銃をかまえた指先サイズの間人と、奇怪なエイリアンとがいくつもならんでいた。

木星人が地球に襲来し、たまたまそこに居合わせたサバイバルゲームのチームがこれを撃退するという、突拍子もない内容のゲームが遊ばれていた跡だ。

ここは私立東雲（しのめ）学園高等部のクラブ棟。その名もずばり「ゲーム部」の部室である。

室内にはテレビと家庭用のテレビゲーム機も置かれている。学校の一角としては、なかなか挑戦的な設備だ。

とはいえ、東雲学園ではそうめずらしい光景でもない。なにしろ自由を尊び、数万人の学生が在籍する大らかなマンモス校である。

授業に関係のないものは原則として持ち込み禁止だが、そんな校則が隅々まで行き渡るはずがない。クラブ棟は課外活動でしか使わないことになっているので、公然とお目こぼしを受けている。

ゲーム部以外の部室にも、マンガかテレビかゲーム機か、必ず何かは転がっている。東雲学園とはそういう場所なのだ。

「日下部の思いつきはよかったのにな」

「うん。あれをやられてたら、負けてた」

部員たちはあれこれと、ゲームの感想戦を続けている。結局、公平たちサバイバルチームは奮闘むなしく、木星人の乗ってきた宇宙船から攻撃を受けて全滅してしまった。地球は侵略者の手に落ちたのだ。ゲームの中では。

コンピューターゲームでなら、公平も異星人を撃退したことがある。ゾンビや魔王や未来からの超生命体を退けて地球を救ったことも、何度もある。

しかし、海外で作られたボードゲームでそれを経験するのは初めてだった。

「里崎（さとぎき）、こういうのにくわしいんだな」

「ゲーム、好きだからね。審判部と半分、かけ持ちみたいになってるよ」

メガネの少年が、おだやかに笑う。彼の名は里崎正太郎（しょうたろう）。公平と同学年で、同じ部活の仲間だ。

といっても、ゲーム部ではない。公平たちが所属するのは審判部。スポーツをはじめ、あらゆる勝負ごとで判定を下すことを活動指針にかかげるクラブ活動である。

正太郎は中でも、クイズやゲームなど、いわゆる遊戯系の審判を得意としている。もともとその方面のことが好きなのだそうだ。

対して公平は、少年野球をしていたこともあり、スポーツ全般を裁くことが多い。

おたがい、趣味も得意分野も、ついでに体格も対照的なのだが、不思議に馬が合った。公平もコンピューターゲームはいろいろやるし、正太郎はそれに関して非常にくわしい。男の子同士がゲームの話題で友達になるのは、どの年代でも同じなのだ。

そんなとき、正太郎の口から「ボードゲームをやらないか」という言葉が飛び出した。

「人生ゲームのことか？」

「あ、やっぱりそれが出てくる？」

正太郎に苦笑いをされ、公平は目をしばたいた。

ボードゲームと言われれば、日本人には「人生ゲーム」という不朽の名作が知られる。ルーレットと車を模したコマが特徴的で、今でもたびたびリニューアルされる名作だ。

さすがに最近のものは知らないが、子どものころには、公平も遊んだ記憶がある。

「日下部くん、他のボードゲームってやったことある？」

「いや。つーか、他に何かあるのかも知らない。あるのか？」

「海外に行けば、それこそコンピューターのソフトよりよっぽどたくさんあるよ」

ボードゲームをはじめ、コンピューターを介さずに人の手で直接遊ばれるゲームは、総じてアナログゲームと呼ばれる。

その最大の特徴は、多人数で一度に遊ぶところにある。

アメリカやヨーロッパでは、休日を家族で過ごす習慣が根づいており、また、家屋が広く、大きなボードを広げてもじゃまにならない。こうしたことなどから、欧米ではアナログゲームがひとつの娯楽文化として成立しているのだ。

カードを使って対戦するカードゲームもそうだし、将棋や麻雀も立派なアナログゲームだ。最近では、おとなりの韓国でも市場ができつつあるらしい。

しかし、日本ではなじみが薄い。公平にとってはまったく初めて聞いた話だった。

「今度、ゲーム部で遊ぼうかって話があるんだけど、人数がいたほうがおもしろいんだ。日下部くんもやってみない？ 世界、変わると思うよ」

最後の一言に興味を惹かれて、公平はうなずいた。正太郎の話だけでは、実はいまいちピンと来なかった。だが、そこまで言うのなら何かあるのだろうと、首を突っ込んでみたのだ。

結果として、公平は自分の判断に感謝した。木星人の襲来を退けるのは、想像以上に楽しかったのだ。

「ゲームってすぐ教育に悪いとか、いろいろ言われちゃうけど、いいところだってあるんだよ。すごく簡単に共通の話題になるんだ。日下部くんも今日、初めてゲーム部に来たのに、もうみんなと話せるでしょ？」

「そうなんだよな。小学校のときとか、友達と最初の話題はゲームだったし」

「うん。そんなふうに、知らない人同士がゲームで打ち解けるようになればいいと思うんだ」

よね」

正太郎の言葉に、ゲーム部の部員たちがうんうんとうなずく。公平とともに木星人と戦った仲間たちだ。公平が部室に来たときは、どこことなく他人行儀な気配があったのだが、今はもうそんなことはない。

「審判部でゲームしないの？」

「何個か置いてあったけど、そういやさわったことないな」

「もったいない。日下部、ゲーム向いてるよ」

「向き不向きってあるのか」

「手榴弾の受け渡しなんていいアイデアだったじゃん。ああいう思いつきができる人って、ゲーム強いよ」

「それを言ったら……」

公平の口からも、ゲーム部の部員たちへの称賛が、素直に出てきた。ほんの一時間ほど前に会ったばかりの彼らだが、正太郎の言うとおりに、今では普通に言葉を交わせる。

ボードゲームひとつでそんな感覚を抱けるのは、たしかにすごいと公平は思った。

「あ、やってるわね。みんな」

盛り上がっていると、部室のドアから若い女性が顔を出した。ゲーム部の顧問、川口（かわぐち）ゆきえ教諭だ。

人なつっこい笑顔に、公平たちは軽く頭を下げる。

「こんにちはーっす」

「ゆきえ先生。おじゃましています」

「日下部くん、いらっしゃい。楽しんでくれた？」

「はい。おかげさまで」

公平の返事に満足したのか、ゆきえはにっこりと笑った。

小柄で童顔、声音もどちらかというと幼く聞こえるゆきえは、パッと見た感じでは、およそ教師らしくない。アナログ、デジタル問わずゲームが大好きなところも、教師より生徒の感覚に近い。

ただ、そのぶん、彼女は生徒たちと目線の高さが近く、人気がある。生徒の話を楽しく聞いてくれるので、誰もがゆきえに気軽に話しかけられるのだ。

もっとも、本人は教師あつかいされにくいことを、ちょっと気にしているらしいのだが。

「今日は何をやったの？」

「『FROM JUPITER』です。里崎が円盤攻撃で全滅させました」

「あ、いいゲームだね。終わり方はひどかったみたいだけど」

さすがにゲーマーとして鳴らすゆきえは、タイトルを聞いただけで内容がわかるようだ。結末も想像できたのか、くすくすとおかしそうに笑う。部室に、なんともなごやかな空気が流れた。

ゲーム部という、ともすれば白い目を向けられかねないクラブ活動だが、ゆきえは積極的に賛同している。授業との線引きを忘れなければゲームは悪いものではないと、きちんと主張してくれているのだ。

本人も、ゲームは大好きだが、のめり込みすぎてはいけないと、いつも言っている。その姿勢

が一貫しているの、生徒からの信頼はあつい。

そのかわり、ゲーム部はゆきえに顧問をしてもらっているということで、たまにやっかみを受けることもあった。

「実はね、みんなにちょっと相談があるんだけど」

ゆきえが改まった口調で切り出す。なんとはなしに、公平は答えた。

「彼氏さんのことですか？」

「へっ!？」

ゆきえの声が裏返った。同時に、小さな顔がトマトのように真っ赤になる。凶星を突かれたにしても、あまりにもまっすぐな反応だった。

「な、な、な、なんでそんな、すぐにわかるの!？」

「いや、有名だから」

ゆきえに恋人ができたという話は、先日、新聞部がすっぱ抜いて、あっという間に生徒たちの間に広まった。ゆきえがお見合いをした翌日のことだ。新聞部の取材能力もなかなかあなどりがない。

お相手は山浦和貴（やまうらかずき）氏。大学の助教授で、コミュニケーション学を専攻しているそうだ。二十七歳で、ゆきえよりは二つ年上。長身で寡黙、なかなかのイケメンらしい。

発覚当初は、一部の生徒たちが大さわぎをしたのだが、ゆきえがあまりに幸せそうにのろけ話を連発するので、自然におさまった。ゆきえ自身はのろけているつもりはないのだが、聞いている側には明白で、生徒たちは勝手に、次々に失恋していったのである。

今では学園中、ゆきえの祝福ムードでいっぱいだ。

「ボクたちに恋愛相談するのはどうかと思いますよ、先生」

正太郎が自嘲気味に言い、ゲーム部の面々が大きく同意する。失礼ながら、公平も心の中でうなずいてしまった。

ゲーム部は特殊な環境だ。簡単に言えば、女子部員がいない。ゲームを趣味にする男たちの集まりという点で女子が敬遠してしまう上に、部員はみごとな奥手ぞろいだ。

たまに現れる女子の見学者にもあたふたして、軽いパニックになってしまう。共通の話題になるというボードゲームの高い性能も、ゲーム部の部員たちが女子生徒の前で活かすことは難題だった。

そもそも高校生が大人の恋愛に口出しできることはない。ゲーム部に相談するとは、正太郎でなくても止めるだろう。

しかし、ゆきえはしどろもどろになりながら、話を続けた。

「そ、それはいいの。自分でがんばるから……。そうじゃなくて、その、ちょっと山浦さんと話すきっかけを作ろうかなって思って。今度の日曜、山浦さんをゲーム会に誘ってみようと思うの。興味はあるみたいだから」

ゲーム会とは、要するにいくつものゲームを持ち寄って、大人数でわいわい遊ぼうという場だ。友人を呼んでもいいし、自分の好きなゲーム、やりたいゲームを持ってきてもいい。とにかく気楽にゲームを遊ぶ場を設けよう、という企画である。

一応、ゲーム部がやるときは、コンピューターゲームは不可、というルールがある。せっかく多くの人が集まるのに、会話が減ってしまいかねないからだ。

「へー。いいんじゃないですか」

公平も今しがた、アナログゲームのおかげでゲーム部と打ち解けたところだ。共通の話題ができる意味でも、ゆきえのことを知ってもらう意味でも、山浦氏といっしょにゲームで遊ぶというのはいいアイデアだろう。

「山浦さんって、ゲームとかしたことがあるんですか？」

「コンピューターゲームなら少しはやってるみたいだけど、アナログゲームはほとんどないみたい。だから、できるだけ簡単なゲームがいいと思うの」

ゆきえの言葉を受けて、正太郎やゲーム部の部員たちがあれこれとタイトルをならべ出した。こういうことになると、好きな人間というのは途端に盛り上がる。ゆきえもいっしょになってゲーム談義に花が咲こうとした。

しかし、そこに扉を開くけたたましい音が割り込んだ。

「ちょおっと待ていっ!!」

入り口からどかどかと生徒たちがなだれ込んでくる。二十人近くいるだろうか。血走った目を向けながら、彼らはゆきえと部員たちの話に割って入った。

「ゆきえ先生！ 話は聞かせてもらいましたよ！」

先頭に立った生徒の手には、将棋盤があった。それだけではない。よく見れば、全員がなにかのゲームの道具を持っている。

といっても、ゲーム部にあるボードゲームやカードゲームのようにカラフルなものではない。将棋盤に碁石、サイコロ、チェスの駒など、世界的に広く遊ばれていて、それ自体がゲームという枠を飛び出したジャンルに分類されている遊具だ。

それぞれを活動主体としているクラブの部員たちが押しかけてきたらしい。

「彼氏さんと遊ぶ機会を作るのはいいことです。が、世界には古来からの伝統的な遊戯があります！」

「こんな低俗なゲームを遊んでは、先生の印象が悪くなるだけですよ！」

「山浦さんに『ご趣味は？』と聞かれて『カードゲームを少々』などと答えられますか？ 『百人一首を少々』のほうがずっと高尚です！」

乱入者たちが口々に叫ぶ。言い方が引っかかるが、あながちまちがいは言えなかった。

たしかに、言葉の印象は後者のほうがいい。日本人はまだ、ゲームという単語にそこまで寛容ではないのが実情だ。公平も正直なところ、アナログゲームにはマニアックで近寄りがたい印象を持っていた。

実際にやってみた今となっては、そんな気持ちは残っていないが、知らない人にはわからないだろう。山浦氏もどう感じるか、公平たちには知りようがない。

「彼氏さんにアピールするなら、もっと知的な印象を与えないとダメですよ！」

「ふむ、一理あるな」

と、押しかけた生徒たちの間から、聞き覚えのある声が飛んできた。公平と正太郎がそろってそちらを見る。

黒髪をなびかせた女子生徒が、人ごみの中にすらりと、さわやかな風のようにたたずんでいた。

「部長」

「凜（りん）さん。いつからいたんですか？」

「オセロ部に呼ばれて一勝負してきたところだ。心配するな。勝ったぞ」

オセロ盤を抱えてくやしそうな顔をしている連中がいるのはそのせいかな。公平はどうでもいいことに納得した。

審判部を束ねる部長、風真（かざま）凜は、公平たちより一つ上の先輩だ。つねに堂々とした態度をくずさず、場を取り仕切ることにかけては東雲学園の誰よりも秀でていて、その名を学園中に知られている。

ここでもその存在感は発揮された。モデルのようにさっそうと、凜が前に立つと、そのしぐさだけでゲーム部に押し寄せた生徒たちはおとなしくなった。

「ゆきえ先生。差し出がましいようですが、ご自分をアピールされるなら、不得意を隠すより得意を伸ばすほうが前向きになれるはずです。ましてや、ゆきえ先生の得意分野は、親交を深めるという点では非常に優れています。たくさんのゲームを集めていっしょに遊ぶのは有意義な時間になるでしょう」

涼やかで、それでいてよくひびく凜の声は、聞く者の耳を自然に引きつける。いきり立っていた生徒たちも、ゲーム部の部員たちも、だまって凜のほうに目を向けた。

注目が集まっても、凜の立ち姿はいっさいゆるがない。

「しかし、それだけでは印象に残らないでしょう。やはりなにか、特別なイベントがあったほうが気持ちも盛り上がるかと思います。ちょうどいいと言ってはなんですが、ここに対立する二つの派閥がある。そして、私たち審判部もおります」

「え？ う、うん。それで？」

ゆきえがとまどい気味に答える。公平もなんだか雲行きがあやしくなったように感じた。

凜はたしかに頼りになる先輩だ。だが、それ以上にトラブルメーカー的な側面を持つことも公平は知っている。彼女の言動に振り回されたことは一度や二度ではない。

そんな公平の経験則は正しかった。

「このままでは伝統的な遊戯をかかげる彼らも納得しないでしょう。そこで提案します。古典遊戯と近代的なゲーム、どちらが勝るか白黒つけようではありませんか」

『おおーっ!!』

「ええーっ!？」

歓声と驚愕の声とが交錯する。凜はすました顔で続けた。

「ご心配なく。審判は公正に務めます。ゲームのルールに関してなら、里崎の右に出る者はおりません。そうだな、里崎」

「そ、そうですけど、そうじゃないんじゃないんじや……」

正太郎のおずおずとした反論は、周りの声にかき消された。

「そうと決まれば負けん！」

「逃げるなよ、ゲーム部！」

「ゆきえ先生、俺たちが絶対いい印象を与えますからね！ まかせてください！」

伝統遊戯をかかげる各団体は口々に宣言すると、ゲーム部の部室から出ていった。

あとには呆然としているゲーム部とゆきえ、公平、正太郎、そしてなぜかひとりだけ胸を張っている凜が残される。

「日曜が楽しみだな」

この場でそう思っているのは凜だけだと、公平は確信を持って言い切ることができた。

2 ミラクル・プレイヤー

「なんでこんなことになったんだろう……」

「凜さんがからんだせいだと思うぞ」

審判部の部室。暗澹とする正太郎に、公平は半眼で答えた。

来る日曜日。ゆきえが山浦氏を招いてゲーム会を開くことになった。そして、そこでは古典遊戯連合とかいう謎の共同体が組織され、ゲーム部と優劣を競うことになってしまったのだ。

「ルールの審判をするだけならいいけど」

「ゲーム部の連中に泣きつかれちゃったからな」

二人を憂鬱にしているのがそこだった。押しに弱いゲーム部は、開始前から古典遊戯連合の迫力に屈してしまい、戦意を失ってしまったのだ。

負けてどうなるものでもないが、やる以上は勝ちたいと思うのが人情だ。それに、ゲーム部の印象が悪くなるとは、顧問のゆきえも悪く見られかねない。山浦氏の前でそうなるのは最悪だ。

そんなこんなで、なぜかゲーム部の用意するゲームは、正太郎が選ぶことになってしまったのである。

「まあ、審判に関してはオレも手伝うよ。将棋とかオセロなら、ルールはわかるし。囲碁は無理だけど。あと、アナログゲームみたいな複雑なヤツじゃ、凜さんにやってもらうのも無理だな」

「なんだ。人をだしにして、聞き捨てならないことを言っているな」

奥でお茶を淹れてくれた凜が戻ってくる。審判部の部室には、全員分のカップとお茶くみセットが常備されているのだ。

公平としても、頼れるものなら凜を頼りたい。凜があおったおかげで今の事態を招いた気もするし、それ以上に凜は優秀な審判だからだ。

彼女の判断力は部内でもずば抜けて高い。目も耳も鼻も舌も、おそろしいほど鋭い。判定という面ではこれ以上ない能力を持っている。

ただひとつ、「ルール音痴」という致命的な欠点をかかえていなければ。

(ゲームなんて絶対無理だ)

それは、公平にも正太郎にも共通した認識だった。

どういうわけか、凜はあらゆる競技において、ルールというものをほとんど覚えられない。頭に入る項目は、二つか三つがせいぜいだ。

たとえば、「速ければ勝ち」という短距離走において、凜のジャッジは正確無比だ。他に覚えるルールもないので、凜の目の鋭さが遺憾なく発揮される。

が、これが野球になると、凜は打者が三振したかどうかすらもわからなくなる。ヒットの場合、ファウルの場合、アウトの場合、ホームランの場合、デッドボールの場合、その他もろもろと、ルールの量が凜の許容限界を振り切ってしまうからだ。

そんな凜に、さまざまな要素がからむゲームを判定できるとはとても思えない。

「あの、凜さん。ゲームとかできるんですか？」

一応、公平は確認してみた。凜もルール音痴の自覚はあるようで、相応の答えが返ってくる。
「簡単なものならな」

「UNOとかですか？」

「UNOだと？」

いきなり室温が下がった。低音で答えた凜が、かみつきそうな目で公平をにらんでくる。

「日下部。キミはあのカードゲームが簡単だと、そう言ったのか？」

「いや、簡単でしょ、あんなの」

「あ・ん・な・の・だ・と？ よかろう。では、日下部。あのゲームのカードの種類をすべて言ってみろ」

「えっと、色と数字はいいですよ。スキップ、リバーズ、ワイルド、ドロー2、ドロー4」

異様な迫力に気圧されながら、記憶をたどる。一般的なルールでは、たしかこれだけでいいはずだ。

言い終えた公平が視線を戻すと、凜が口をへの字に曲げていた。

「キミとはもう、口を聞かん」

「は？」

「そんなに覚えられるものか！ 誰も彼も、あんな面倒なゲームにうつつを抜かして！ どこがおもしろいのだ、まったく」

へそもいっしょに曲げたらしく、凜はふくれつつらでそっぽを向いた。

UNOといえば、トランプとならんで修学旅行の携帯品の定番だ。中には苦手な人もいるだろうが、ルールの複雑さが理由でそう思っているのは、日本中をさがしても凜だけだろう。

やはり、凜のルール音痴はゲームにもついて回るらしい。よくわかった。UNOのカードを覚えられないとは、公平からすれば絶望的と言える。

「じゃあ、ゲームやらないんですね」

「そんなことはない。私もゲームは好きだ。娯楽として楽しめるし、思考力を鍛えるにもよい題材だと思うぞ。里崎に教わって、いくつかやったこともある」

公平には少し意外な答えだった。正太郎はどうやって凜にゲームを教えたのだろうか。

そう思ったが、続く凜の言葉にあっさり納得した。

「私が一番好きなのはすごろくだ」

「なるほど」

すごろくなら、ルールもあってないようなものだ。コマの止まったマスに書かれていることをその都度、処理していけばいい。

「あれなら覚えられますね」

「ああ。覚えやすいのもあるし、サイコロを使うのがいい。さいの目は、私にもどうにもできないものだからな」

「……なんか、そんなこと言った有名人、いませんでしたっけ」

「ほう。後白河法皇の逸話を知っているのか。見直したぞ」

凜が感心したように微笑む。誰だったか、記憶の中をほじくり回して、公平は思わずほおを引

きつらせた。

平安時代の末期、朝廷で院政を敷き、権力をほしいままにした当時の最高実力者ではないか。

あまりの権勢ぶりに、「坊主とさいの目だけは自分の思いどおりにならない」などという言葉を残したと伝えられている。よりもよって、そんな人物と同じ趣旨の発言をすることは、凜の頭の中はどうなっているのだろう。

得意気な顔の凜と、はるか昔の最高権力者がふんぞり返る姿とが、公平の目には重なって見えた。

「日下部くん。部長がゲームできないって思っていない？」

「思ってる」

正太郎の言葉に、公平はつい反射的に答えてしまった。凜の形のいい眉がぴくりとはねる。しまったと思ったが、もう遅い。

「いいだろう。私の実力を見せてやる」

言うなり、凜は部室の棚をあさってゲーム機を引っ張り出してきた。白とえんじの色がなつかしい、国民的ゲーム機だ。カートリッジを突き刺して、電源を入れる。

非常に有名な画面が現れた。配管工だかなんだか、個性的なデザインのヒゲのおじさんキャラクターが闊歩する、横スクロールのアクションゲーム。その最初期の作品である。

「なんでそのチョイスなんですか？」

「これならキミもよく知っているだろう」

日本人の大多数が知っているであろう軽快な音楽が流れ、凜の操作にしたがって、主人公がゆっくりと歩き出した。

歩く。飛ぶ。歩く。飛ぶ。なかなか順調だ。凜がこの手のゲームをできるとは思わなかった。ので、公平はおどろいた。

なおもおじさんは歩く。

歩く。歩く。歩く。歩く。ひたすらに、とにかく歩く。

——遅い。

「凜さん、Bダッシュぐらいしましょうよ」

「Bダッシュ？ 何だ、それは」

真顔で返されて、公平は言葉を失った。凜は画面に集中していて、こちらを見向きもしない。

配管工のおじさんは、同じペースで進んでいく。

「まさか、知らないのか？」

「知らないよ。部長が知ってるのは、Aボタンでジャンプ。変なモノにさわったら死亡。穴に落ちたら死亡。それだけだから」

公平の問いに、正太郎は当然のように答えた。

基本だ。基本中の基本だ。これだけを知ってプレイするほうが逆に難しい。

見ていると、凜は敵キャラにもさわらないし、途中のパワーアップ用のアイテムがかくされたブロックもすべて素通りしていく。地面以外のモノには、徹底してさわらない。

凜の中では、主人公と地面以外はすべて「変なモノ」にひとくくりにされているのだ。

「あと、部長は一回死んだら終わりだと思ってるから。残機があるの、覚えられないみたい」

「ってことは、もしかして、このままBダッシュなし、アイテムなし、ワープなしのノーミスでクリアするのか？」

「そうだよ。ボクも初めて見たときはウソだと思ったけど」

信じられない思いで、公平は画面を凝視した。配管工のおじさんは地道に先に進んでいく。非常にじれったい。じれったいが、着実だ。

「日下部くん、『ウォッシュャブル』って知ってる？ ちょっと前に出たシューティングだけど」

正太郎が、ゲーム雑誌などで話題になったタイトルを出した。公平も聞いたことがあるコンピューターゲームのソフトだ。

「あれだよな。敵がめっちゃめっちゃ弾撃ちまくってきて、難しすぎて人間にはクリアできないって言われたヤツ。なんか、ちょっと前にクリアした人が出たんだろ？」

「それ、部長だよ」

思わず公平は凜の横顔を振り返った。あいかわらず、凜のきれいな目は画面に集中している。だが、耳と口は公平たちのほうに向いた。

「シューティングゲームのルールはわかりやすいからな。敵や敵の弾に当たらないようにして、攻撃して進んでいくだけだ。あとは難易度の問題でしかないぞ」

言われてみれば、たしかにそうだ。シューティングゲームほど単純明快なルールのゲームも他にない気がする。

それと、画面の大半を埋め尽くす弾幕をかいくぐることはべつの話だと思うが、凜ならできるのかもしれない。

「格ゲーはどうなんですか？」

「あれはコマンドが覚えられん」

公平が聞くと、きっぱりと言われた。

格闘ゲームのキー入力複雑だ。凜が覚えられないのも無理はない。

「ロープレは？」

「あれもコマンドが覚えられん」

ロールプレイングゲームのコマンドといえば、「はなす」だの「じゅもん」だの、あれのことだ。たしかに数は多い。

凜が覚えられないのも……いや、それは凜だけの問題だ。公平は考え直した。

「部長は、ルールは覚えられないけど、反射神経とか思考能力とか視野の広さとか、そのへんのスペックはずば抜けてるから。できないゲームは多いけど、できるゲームでは無敵なんだよ」

正太郎がそう言っている間に、配管工のキャラクターはとうとう最後のステージにたどり着いた。

いまだノーミスだ。公平は頭からこのゲームを始めて、ここまでキャラクターが一度も死ぬことなく進められたことはない。

あいかわらず、おじさんはスローモーに進む。ちなみにこのステージは隠された通路を正しい順番で進まないとは決してクリアできない。最初は凜も、この罠が突破できなかったそうだ。

その後、正太郎が一度だけ道順を教えたのだが、それ以降、まったく無駄なく正しい通路を通れるようになったらしい。

そして、公平の見守る前で、凜は本当にノーミスでゲームをクリアしてしまった。

「どうだ」

勝ち誇る凜に、公平は返す言葉を持たなかった。すごい、というより、なにかべつの次元のできごとを垣間見たようで、どう感想を言えばいいのか真剣にわからなくなったのだ。

「えっと、その……おみそれしました」

「そうか」

称賛だかなんだか、言った公平にもよくわからなかったが、凜が満足そうにうなずいたのでそれでいいことにした。

貴重なものを見たのは、まちがいない気がする。問題は、それが今、価値のあるものかどうかということだろう。

「それにしても、今の、何の時間だったんだ？」

「本当だ。それどころじゃなかった。どうしよう」

思わずつぶやくと、我に返った正太郎が頭をかかえた。

のんきに凜とゲームをしている場合ではない。日曜日の正太郎の対応次第では、ゆきえの人生も左右しかねないのだ。

とはいえ、公平に手伝えるのは、当日の審判くらいしかない。

「里崎。私はキミに機会を用意したつもりなのだが、気に入らなかったか？」

と、ゲーム機をかたづけながら、凜が切れ長の目を正太郎に向けた。

「キミはゆきえ先生には世話になっただろう。恩返しくらいしても罰は当たらないぞ」

正論を正面からぶつけられ、正太郎がうつむく。

彼だけでなく、ゲーム部の部員たちはみな、ゆきえに助けられたことがあるという。ゲームに傾倒して、うまく人づき合いのできなかった生徒たちを集め、部活という場を用意してくれたのはゆきえなのだそうだ。

そのゆきえに頼られたのだから、正太郎も期するところがあるだろう。ゆきえだって、かわいがってきた生徒たちに力を貸してもらえれば、うれしいはずだ。

公平にもできることがあった。

「そうだが、里崎。ゲームを通じていろんな人が打ち解けられたらいいって、お前、そう言ったじゃないか。オレを誘ったのもそれだろ。凜さんの言うとおりに、ゆきえ先生と山浦さんが話すきっかけを作る、またとない機会だぞ」

軽く肩をたたいてやる。正太郎はおずおずと顔を上げた。公平はそこに、にかっと大きく笑って見せた。

「自信持てって。オレだってゲームのことは全然わからなかったのに、一回遊んだだけでみんなと話せるようになったぜ。お前の言ったとおりにさ。あと、古典遊戯がどうか言ってる連中は、はっきり言って腹立った。いっぺんゲームを教えてやろうぜ。お前の得意分野だろ。負けるなよ」

言葉で強く、背中を押してやる。正太郎もゲーム部の部員たち同様、あまりメンタルの強いほうではない。

けれど、ここで逃げ出すような男でもないはずだ。でなければ、責任を持って審判など務められない。ゲームの審判をしている正太郎は、凜にも負けにくいぐらい堂々としている。公平はそれを知っている。

公平は正太郎の味方だ。そうあることが、今の公平にできる一番のことだった。

「……うん。そうだね。バカにされたままじゃダメだよ」

「おう」

もう一度、正太郎の肩をたたく。今度は少し強くした。正太郎は軽くつんのめりながら、こわばった笑みを浮かべる。公平も笑い返した。

その姿を見ていた凜が、かすかに目を細めたことを、公平と正太郎は気づかなかった。

3 ファミリー・ゲーム

日曜日。ゆきえが用意した特別授業室に、生徒たちが集まった。

中にひとり、年長の男性がいる。山浦和貴氏だ。ゆきえによれば、少し口下手な人らしい。生徒たちにあいさつを返してくれるが、積極的に話してくる人ではない。明るく人なつっこいゆきえとは対照的だ。

もちろん、初対面の生徒たちに囲まれて、緊張しているところもあるのだろう。それをほぐすためのゲーム会だ。

ただ、古典遊戯連合の生徒たちは妙なやる気に満ちていて、ときおり不気味な笑みを浮かべている。それが公平には少し気がかりだった。

(無事に済めばいいけど)

ゲーム部はゲーム部で、すでに隅のほうに固まってしまっている。ゆきえは当然、山浦氏のとなりだ。

ともかく、ゆきえに悪いようにならないことが最優先になる。公平は頭を切り替えて、今日のプログラム表に目を移した。

「まずは百人一首か」

今日は山浦氏を交えて、いろいろな遊戯、ゲームを順番にやっていくことになっている。その中で山浦氏に最もよい印象を与えた種目の勝ち、というわけだ。

トップバッターは百人一首。公平は小学校のとき、授業でやったくらいしか覚えがない。こんな機会でもなければ、ずっとふれることもなかつただろう。

伝統や格式という面では、たしかにアナログゲームより見栄えはいい。

「日下部。百人一首だが、審判はキミに頼む。私も入れと言われた」

凜がやってきて、そう言った。百人一首クラブから、凜も加わってほしいという話があったらしい。もちろん、ゆきえと山浦氏も加わる。

「わかりました。誰が札を取ったか、見ればいいんですよね」

「ああ。キミには造作もないことだ。よろしくな」

形式は百枚の取り札を床にならべて、早い者勝ちで取り合う、オーソドックスなものだ。公式大会では一部の札を抜き取り、自陣と敵陣に整然とならべて一対一で取り合うのだが、今日はゲームを楽しむという趣旨なので、わかりやすい形を取っている。

特別授業室には畳の敷かれたスペースがあるので、そこを使うことになった。公平の役目は、一枚の札に複数の人の手が重なったとき、誰が早かったかを判断することと、お手つきの判定だ。

札の読み手は百人一首クラブの部員が務める。

「やっぱり再戦要求があったんだね」

準備を待っていると、正太郎が横に来てつぶやいた。聞き慣れない言葉に、公平はたずねる。

「再戦要求ってなんだ？」

「部長は前に、百人一首クラブと対戦して圧勝したんだよ。百枚取りしちやってさ」

正太郎から、もっと聞き慣れない言葉が返ってきた。

「百枚取り？ それ、全部じゃないのか？」

「そうだよ。それも、五人相手にして」

公平が審判部に入部する前に、そんなことがあったらしい。凜が百人一首が得意だとかいう話が流れて、百人一首クラブから挑戦状をたたきつけられたのだそうだ。

結果、正太郎の言うような惨劇が起こったのだという。

「そういえば、この間はオセロ部に行ってきたとか言ってたな」

「たぶん、同じようなことになったんじゃないかな」

凜は、できるゲームなら無類の強さを誇る。百人一首クラブもオセロ部も、部外者に大きな顔をさせるわけにはいかないと、挑戦したのだろう。

その百人一首クラブが今日を好機と、凜に雪辱を果たしに来たようだ。

「なんだかな……。まあいい、オレ、審判してくるわ」

「うん。よろしく。特に部長のこと」

ものすごくやっかいなことを頼まれながら、公平は位置についた。取り札の周りに凜、ゆきえ、山浦氏と、五人の生徒が座っている。

一様に真剣な表情だ。張りつめた空気の中、読み手がゆっくりと最初の札を手に取った。

「む」

パン！

凜の手がしなって、畳の上にかすかなけむりが生じる。一枚の札が、振り抜かれた凜の手の先の壁にぶつかって落ちた。

「……え。今の、取ったんですか？」

「無論だ。今のは一字決まりの句だぞ。『む』と聞けばわかるだろう」

わからないです。

口をついて出そうになったが、そこにいる全員が真剣な目で公平を見ていたため、公平はそれを飲み込んだ。

「百人一首は冒頭の六文字までを聞けば、取る札は決まるのだ。あとはそれがどこにあるのかを把握して、相手より先に取ればいいだけだ」

理屈はそのとおりだ。百人一首の句には、七文字目以降まで同じ言葉が重なるものはない。最大でも六文字を聞けば、その句は特定される。

もちろん、句がわかっても取れるかどうかはべつの話だ。目的の札がどこにあるか把握して、さらに誰よりも早く手を出さなければならない。

実際、プロが札を取る瞬間は、速すぎて常人にはとても見えるものではない。

軽い気持ちで審判に立った公平だが、もしかしてとんでもないところにいるのではないかと、いまさらながら背中が冷たくなってきた。

「やるわね、風真さん」

「いくらゆきえ先生が相手でも、勝負で手は抜きませんよ」

ゆきえと凜が不敵な笑みを浮かべる。

いやな予感がひしひしとする。

「あしび」

パン！

「たご」

パン！

「きみがため、は」

パパン！

「あ、今のはゆきえ先生で」

公平の予感の的中した。場は本当に六文字読まれるだけで札が飛び交う、プロ顔負けの争いになったのだ。

身体能力で勝る凜に対し、ゆきえもゲーマーとしての経験をフル活用していどむ。その間、百人一首クラブはひとりとして、ひとつの手出しもできないでいた。もちろん、山浦氏など完全に置き去りだ。

さすがにまずい。公平はこっそりと、二人に注意をうながした。

「ちょっと、ちょっと。凜さん、ゆきえ先生。山浦さん、引いてますよ」

「後にしろ」

「真剣勝負中よ」

が、聞く耳を持たない。二人の視線はかたときも取り札から動くことはなかった。

公平も公平で、両者の手の動きを必死に見きわめているため、他に気を回せない。まばたきでもしようものなら、札を取る瞬間を見逃しかねないのだ。山浦氏のフォローに回る余裕はなかった。

結局、勝負は凜が五十枚、ゆきえが五十枚を獲得して、引き分けに終わった。

「すみません、すみません！ つい熱中してしまって」

部屋の向こうで、ゆきえが山浦氏に何度も頭を下げている。山浦氏は大人の対応で、気にしていない様子だ。

ひとまず胸をなで下ろしながら、公平はとなりの問題人物にくぎを刺した。

「凜さんもちょっとは反省してくださいよ」

「そうだな。さすがは先生だ。勝てなかったか。私もまだ未熟ということだ」

そういうことではない。ツッコミを入れようかと思ったが、凜に通用する気がなくて、公平はあきらめた。

それよりも、ゆきえの失点を取り返すほうが先決だ。なんとかいいところを見せて、山浦氏にアピールしなければならない。

そう思ったのに、悪いことは重なるものだった。次々とやってくる伝統遊戯に対して、凜とゆきえがやらかしたのだ。

「次は将棋だ！」

「私に駒の動きを覚えろと言うのか？」

将棋の駒は全部で八種類。すべての動きがちがう上に、成り駒もあり、そのときは駒の種類まで増える。凜が把握できるわけがない。

かわったゆきえが四面指し、つまり四人を同時に相手して、すべて十分以内でかたづけた。

「次は麻雀だ！」

「私に役を覚えろと言うのか？」

麻雀は手持ちの牌を使って、役と呼ばれる決まった形を整えなければならない。ポーカーのようなものだ。

が、その種類はちょっとかじった程度では覚えられないほどに多く、複雑である。当然、凜が把握できるわけがない。

かわったゆきえが容赦なく高得点を連発して、全員の得点をマイナスにたたき込んだ。

「次は神経衰弱だ！ ……はっ」

「いい度胸だ」

めくったトランプの数字が同じなら取れるという超簡単ゲームだ。記憶力の鬼である凜にかなう人間がいるわけがない。

というわけで凜が、二十六組五十二枚を制覇して完勝した。

「……どうしろってんだよ」

いつの間にかゲーム会は、凜とゆきえが暴虐ぶりを発揮する処刑場のような有り様になっていた。

ボロカスにやられた各クラブの部員たちが、特別授業室のあちこちでうめき声を上げている。死屍累々。そんな言葉がふさわしい。とてもゲームをした後の光景とは思えない。

ゆきえはどん底まで沈んだ顔をしている。山浦氏はあまり感情が表に出ないのか、最初と変わらない表情だが、いくらなんでも愉快ではないだろう。

ちなみに凜だけは満ち足りて楽しそうな顔をしていた。

「じゃあ、最後はゲーム部で」

公平は一縷の望みを正太郎にたくした。というより、半分押しつけた。

この期におよんで、ゆきえの名誉回復は望めそうにない。なにかいい感じのゲームで適当にしめて、改めて作戦会議をしたほうがよさそうだ。公平は正直、そう思っていた。

「えっと、ボクが持ってきたのはこれです」

正太郎が取り出したのは、蒸気機関車のイラストが描かれた小振りの箱だった。中からアメリカの地図が描かれたボードといくつかのカード、そして二センチほどの小さな黒い木の棒がいくつも出てくる。

「いわゆる鉄道ゲームのひとつなんですけど。一人ずつでも遊べるんですけど、今日は二人ずつペアになってやります。まず、駅名の書かれたカードを受け取って、その駅がボードのどこにあるか確認してください。それがそれぞれのペアの目的地で、線路で結んでいきます。一回の手番で引ける線路は二マスまで。全部の目的地がつながったら勝ちです」

ボードのアメリカの地図上には都市が配置されており、全体がマス目状に区切られている。その線の上に木の棒、すなわち線路を置いていく。

ペアにはそれぞれ、目的地となる都市を示すカードがランダムに五枚配られる。そして、誰が置いた線路でもかまわないので、その五枚の目的地が線路でつながればいいというものだ。

「そんだけ？」

公平は拍子抜けして聞き返した。

以前の木星人撃退ゲームに比べたら、あまりにも簡単だ。あのときは自分のいる位置やら相手の位置やら、地形やらアイテムやら時刻やら歩数やら仲間との連携やら、考えることが山ほどあった。

それに比べれば、いかにも単純なゲームに思える。

「うん。こう言ったらなんだけど、対象年齢は三歳以上」

正太郎が言うと、古典遊戯連合が鼻で笑った。子ども向けの遊びだと思ったのだろう。悪いとは思ったが、公平もこのときは似たような感覚だった。

「では、私とペアを組むか。日下部」

「あ、はい。ゆきえ先生は山浦さんと組んでください。……ちゃんとフォローしてくださいよ。オレたちもなんとかやってみますから」

ゆきえはこくこくと、いそがしくうなずく。幸いなところは、これだけ簡単なルールなら、ゆきえのゲーマー根性が暴走しても被害が少なそうなところだ。

古典遊戯連合からも何人かが冷やかし交じりに加わり、五組のペアで戦うこととなった。ルールの裁定など、審判は正太郎が務める。

といっても、正太郎の判断をおおぐような場面はほとんどない。ルールは簡単で、全員、いや凜以外だが、把握できている。

線路をつなぐ。次のペアに回る。自分たちの番になるまでは待つしかない。その間に何度か、目的地の位置を確認する。

(.....あれ?)

何度か手番をこなすうちに、公平は違和感を覚えた。全然思いどおりにいかない。ボード上の線路は増える一方なのに、公平たちの目的地のほうにはまったく線路が伸びてくれないのだ。

しかたなく、本筋とはずれたほうに線路を伸ばす。と、となりのゆきえと山浦氏のペアから声が飛んできた。

「山浦さん。あの二人の目的地、ワシントンです」

(げっ!)

当たり前だが、このゲームでは各ペアとも、目的地のカードは伏せる。誰がどこを目指すかわからないので、不用意に線路を引けなくなるのだ。

逆に言えば、適当に線路を引くと、このように目的地がバレる。当然、そうなったら誰もワシントンのほうへ線路は引かない。

結果、公平と凜のペアは最下位。目的地まで達していない線路が最も長いペアとして沈んだ。

小さな歓声上がる。勝敗も明快で、見ている側にもわかりやすいようだ。みごと、目的地を線路でつないだゆきえたちに、拍手が送られる。

「もう一回だ」

「凜さん？」

「負けた。くやしい。もう一回やる」

凜がむきになって言う。公平にも気持ちはわかった。ルールが単純でわかりやすいゆえに、負けるとなんだかとてもくやしい気分になるのだ。

「何回かやって、届かなかった線路の合計が十を超えたら、そのペアが負けっていうのが正式なルールです」

「わかった。私たちはまず四本だな。日下部、次は勝つぞ」

「了解っす」

目的地カードを入れ替え、第二戦が始まる。

今度は公平も慎重に進めた。目的地を気づかれないように、そして他のペアの目的地を探りながら、線路をつなげていく。

そのとき、ふと聞こえた声に、公平は思わず顔を上げた。

「ゆきえさん、ここはどうですか」

「あ、いいと思います」

山浦氏から、ゆきえのほうに相談をしていたのだ。

(そうか。ルールが簡単だから)

ゆきえと山浦氏では、ゆきえのほうが圧倒的にゲームにくわしい。なので、これまで山浦氏のほうからゆきえに提案するようなことはできなかった。ゆきえが山浦氏の考えより二歩も三歩も先を行ってしまっていたからだ。

だが、このゲームはちがう。単純で明快なので、山浦氏もゆきえと同じレベルの考えやかけ引きを思いつくことができる。そこから会話が生まれるのだ。

その後もいくつか、山浦氏とゆきえが相談する声が聞こえてきた。正太郎がここまで考えてこのゲームを持ってきたのなら、本当にすごい。公平は素直に感心した。

「よし、これでつながった！」

「あー、あと一マスで勝てたのに！」

第二戦は公平たちが勝った。それぞれのペアにマイナス点が課される。だが、まだどのペアも十には届かない。

「くそ、もう一回！」

その言葉は、古典遊戯連合のペアから飛んだ。彼らはそのことに気づいていないようで、ボードのアメリカ大陸を凝視している。

公平は周りを見てみた。

回数を重ねると、ゲームがわかってくる。人間が相手なので、考えが読める部分もあり、うまくだまされる部分もある。そして自分がうまく相手を出し抜けることもある。

見ている側にもそれが伝わっていったのだろう。いつの間にか、ボードを囲む話し声が増えている。

「ここの線路を伸ばします」

「今回は一本だけ引く」

「その手があったか……」

部屋にいるみんながゲームに引き込まれていた。わいわいと声が大きくなっていき、外からも助言が飛ぶようになっていく。

「そこはないだろ！」

「よし！ ……あ、いやいや、なんでもないぴょん」

「あのペアがあそこを目指すとしたら、ここでこうなって……」

わいわいがやがや、何回戦かが過ぎ、ついに決着がついた。囲碁部とダーツ部のペアのマイナス点が十二に達し、脱落。

トップ、つまり最もマイナス点が少なかったのは、ゆきえと山浦氏のペアだった。

「では、ゆきえ先生と山浦さんに拍手を」

正太郎の声に合わせて、みんなが拍手を送る。一番いい結果だ。ゆきえもどこか、ほっとした表情を浮かべていた。

そのとき、山浦氏がぽつりと口を開いた。

「もう一回、いいですか？」

思いがけない言葉に、一同がそろってまばたきをする。山浦氏はてれくさそうに、ボードとみんなの顔とを見比べた。

「思った以上に楽しくて、おどろいてしまって。みなさんがよろしければ、もう一度、遊んでもらえませんか」

ていねいな口調でそう言い、山浦氏は軽く頭を下げた。

公平も周りも、びっくりしてしまって返事ができない。大人にそんなふうに言われたことなど、誰も経験がないのだ。

ゆきえすら、おどろきに目を見開いている。

「あ、あの、山浦さん」

その空気を破ったのは、一步前に進み出た正太郎だった。緊張しているのか、肩がこわばり、

手もかたくにぎりしめている。

顔を真っ赤にしながら、正太郎は口を開いた。そこには、決意を秘めたひびきがあった。

「ボくら、みんな、ゆきえ先生にはよくしてもらってます。ゲームなんて、普通の先生なら怒りそうなものだけど、ゆきえ先生は認めてくれて、こうしてたくさんの部活ができるようにしてくれました」

ふるえる声をかみしめるようにして、正太郎は話す。助け舟を出そうとした公平を、凜が手で止めた。見ている、と澄んだ瞳が言っている。

正太郎の思いが乗った言葉を聞いていると、そう言っている。

「ゲームって、すごくいいコミュニケーションの道具です。ボクは、みんながゲームで打ち解けられたらいいって思います。今みたいに。ボクが知ってるゲーム、ボクが作ったゲームでそんなふうになったらって、すごく思います。ボクはゆきえ先生のおかげで、そういう夢を持ってました」

誰も、何も言わない。正太郎の声だけが、特別授業室にこだまする。正太郎の抱いていた、正直な気持ち。ゆきえへの感謝の気持ち。

それは、そこにいる生徒たちみんなに共通するものだった。

「このゲームなら、子どももいっしょに、家族みんなで楽しめると思います」

『あ』

全員が、そろって声を上げた。盲点を突かれた気分だ。公平の目からもうろこが落ちた。

これだけ簡単なゲームなら、小さな子どもでもできる。正太郎はそう考えて、今日、これを持ってきたのだ。公平もそこまでは気がつかなかった。

正太郎はゆきえと山浦氏が、新しい家族も交えて遊べるものを選んできたのだ。

「お子さんとは、最初はこういう簡単なゲームで遊んで、それからチェスとか囲碁とか、難しいけど奥の深いゲームも教えてあげてください。楽しく遊ぶことは、どんなゲームでもいっしょだと思いますから」

うつむき加減だった正太郎が、大きく息を吸い込んだ。緊張ではじけそうな顔を思い切り持ち上げ、続けて一気に振り下ろす。

「こんなこと、ボくらが言うのはおこがましいですけど。山浦さん。ゆきえ先生のこと、よろしくお願いします！」

『よろしくお願いします、山浦さん！』

なんの合図もなかった。だが、全員の声とおじぎは、みごとなまでに重なった。

伝統的な遊戯も新興のアナログゲームもない。ただ、ゆきえへの感謝を込め、幸せを願って、生徒たちは同じ気持ちを表していた。

「ゆきえさん」

「は、はい！」

おだやかな山浦氏の声に、ゆきえが文字どおり飛び上がる。山浦氏の口元には、今日初めての、優しい笑みが浮かんでいた。

「あなたは、本当に生徒さんたちに慕われていますね。今日は、そのことがよくわかりました。」

あなたと生徒さんたちは、いつもこうしてコミュニケーションを取り、深めていたんですね」

「お、お恥ずかしいところをいろいろと……」

もごもごと口ごもるゆきえの手を、山浦氏がそっと取った。ゆきえが息を呑む。公平たちも固唾を呑む。

心臓の鼓動が、異様に早い。口から飛び出しそう。だが、目を離せなかった。

「恥ずかしいなんて、とんでもない。あなたは生徒さんにしっかりと向き合う、立派な方だ。だから、僕とも向き合ってください」

山浦氏が両手でゆきえの手を包む。二人が向かい合った。

公平はまばたきも呼吸も忘れて、祈る。ただ、祈る。

まるで自分が言われるかのように、次の言葉を待った。

「結婚してください。いつか、このゲームをいっしょに遊びましょう。僕らの子どもといっしょに」

ゆきえの目が、限界まで見開かれる。室内の空気も爆発寸前に張りつめた。誰もが息を止めてしまう。ゆきえの口元がふっとほころび、そこに最高の笑顔が乗った。

「はい。よろこんで」

次の瞬間、割れんばかりの大歓声がかどました。生徒たちは我先にと二人にかけ寄り、祝福の嵐を投げかける。ゆきえはほおを涙でぬらしながら、その声ひとつひとつに、しっかりと答えた。

。

万歳三唱、三・三・七拍子。わけのわからない大さわぎの後、なぜか胴上げが始まる。山浦氏が、ゆきえが宙を舞い、最後に正太郎がかつぎ上げられた。

お祭りさわぎは、ゆきえへのなによりの饞となった。

晴天に恵まれたある日、海辺の教会でウェディングベルが鳴りひびく。

その日、東雲学園の生徒たちが企画したお祝いパーティーでは、新郎新婦を交えて、鉄道ゲームの大会が開かれたという。

(了)

解 説

ここでは本誌掲載六作のそれぞれについて解説する。

第三号である今回のテーマは「夢」ということで、物語の中ではかなり使いやすい題材だが、一方で人によってかなり解釈の違いのあるものである。さて、作家陣はこの腕の振るいがいのある食材をどう料理したのだろうか。

『きみの花飾り』入江棗

三女の話、次女の話ときて、今回の主役はいよいよ長女。異性との微妙（でちょっと奇妙）な関係性というメインのテーマは共通しているが、長女ともなれば自分ひとりのことだけを考えているわけにもいかない。彼女の悩みは多いのだけれど、さて……というお話。主題である長女自身の葛藤を丁寧に描きつつも、そこにごく自然な形でこれまでの話の「その後」を差し込んでるのがうれしい。

『人形姫と泥棒悪魔』貴水玲

感情のない人形姫に夢（寝て見る夢ではなく、希望を託して未来に見る夢のほう）がわかるはずもない。その彼女と悪魔の今回の物語は、かなりダイナミックに「冒険」となる。ファンタジックな物語を楽しめるのはもちろんのこと、描写のそこそこに少女の変化、そして二人の関係性の変化が見えてくるのが読みどころ。

『世話焼き魔一メイド』番棚葵

記憶を失った魔界の王子と、高校生として暮らしていた彼のもとへ押しかけてきた人魚のメイド。魔界からやってきた敵と戦うことになってしまった二人の前に、今回はかなりの強敵が現れる。夢を自在に渡る強敵を前に、主人公自身にもまた変化があって……となかなかシリアスな展開がありつつも、ラブコメ（というか、エロコメ？）的展開もはずさない、安心の仕上がりになっている。

『王子と私とご主人様』広野未沙

魔法の練習に熱心なメイドと、魔界の王子と、少女が勤める館の息子。その三人が今回出会う事件は、同僚のメイドの一人が夢から覚めない、ということだった。深刻な事態をまえに、どう立ち向かうのか…というお話。今回は、かなり重要な情報が出てくるので、楽しみにしてほしい。

『くるくる』水島朱音

空中分解した高校の部活動、死んでしまった少女、書かれなかったはずの本の存在。少しずつ謎が解き明かされ、それがまた新たな謎を呼ぶ……という青春ミステリーの第三回は、ここまで

で一番大事な情報が明らかにされ、しかしそれによってさらに今後が気になる、というつくりになっている。昔の仲間たちが全員そろったとき、物語はどう動くのだろうか。

『審判部な面々』 諸星崇

挫折した野球少年とルール音痴の先輩が、さまざまな「審判」を下してきたこの物語。今回はある意味王道である「ゲーム」の審判がテーマ。破天荒な先輩に振り回されつつ、勝負の裏にある「目的」をどう達成するのかを楽しみながら読んでほしい。また、今回は元ネタありのさまざまなゲームが登場する。興味をもたれたら、それらのゲームを実際に遊んでみるのはいかがだろう。

奥付

2010年11月30日 発行

著 者 入江棗／貴水玲／番棚葵／広野美沙／水島朱音／諸星崇

企画・監修 榎本秋

発 行 所 株式会社榎本事務所
〒179-0076
東京都練馬区土支田1-29-12 ファミール光が丘102
電話 03-6750-6341

表 紙 伊藤麗（AMG出版工房）

イラスト 新月竜、戌 祐秋、仔樺、Snow（すべてAMG出版工房）

協 力 脇功一、三浦奈緒
（アミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科）

本マガジンは、榎本事務所HPで配布しているPDFファイルを改変しないことを条件に配布、複製は自由とする。ただし、有償での配布は印刷も含めて不許可とする。